人は理性と真理と希望につらなる
未来を求めてやまない——

天上界
メッセージ集

千乃裕子／JI編集部編

天上界メッセージ集　インターネット公開版

昭和60年 2月 5日　第 1刷発行
昭和62年11月15日　第 5刷発行
編　者　千　乃　裕　子
J　I　編　集　部

平成17年 5月 5日　電子書籍作成
平成18年 1月 3日　最終更新日
作成者　エルアール出版
（旧ジェイアイ出版）

©千乃裕子 1985-2006 ALL Rights Reserved 無断引用・転載を禁ず

月暈(Ⅰ)

8:00P.M.－9:00P.M.,オリンパスOM2,ズイコー28mm F3.5

UFOを信じたくない人は否定したがりますが、この時も傍に来ているのが判ります。月の光体の真上に小さな光球が見えています。天国シリーズ第1巻出版の記念に、写真撮影の為にわざわざ出して下さいました。まことに天の奇蹟、"契約の虹"です。(1978年8月18日北海道岩見沢市春日町にて)

月暈(2)

10:00P.M.～11:00P.M., オリンパスOM2, ズイコー28㎜ F3.5

自然現象ではあり得ない月の三重の虹暈。UFOが仰天して早速出動。すぐ傍まで来てわざわざ停止、観測するという二重の不思議な出来事でした。ジュラルミンに似た機体でしょうか。真上から撮ったことになりましたが、月光を反射して鈍く光り、夢幻の境に誘います。露出過度のフィルムで申し訳ありません。(1978年12月14日横浜市港北区菊名町仲手原にて)

人は理性と真理と希望につらなる未来を求めてやまない――

天上界メッセージ集

千乃裕子／JI編集部編

ジェイアイ出版

□目　次□

口絵　天の証—月暈、日暈の写真・大天使の方々の絵

『天上界メッセージ集』発刊によせて　谷田三枝　3
メッセージ——神の犠牲　ガブリエル　7
第一章『JI』掲載メッセージ——15
一九七八年一一月創刊号〜一二月号まで
ガブリエル 17　ミカエル大王 19／23
一九七九年一月号〜一二月号まで
ミカエル 27／37／46／50／56　ラファエル 31／34／70／73／78　ウリエル 40
イエス・キリスト 43　パヌエル 62／66
一九八〇年一月号〜一二月号まで
ミカエル 81／85／93／120　ウリエル 97／103／106　ラファエル 110／113　ガブリエル 120／123／125
一九八一年一月号〜一二月号まで
ラグエル 127／141　ミカエル 129／142　パヌエル 131　ガブリエル 134／138／140／143　ラファエル 136
一九八二年一月号〜一二月号まで
ミカエル 144／148／156／159　ラファエル 145／146／147／152／154　ガブリエル 150／158　ウリエル 160
一九八三年一月号〜一二月号まで
ミカエル 161／164／167／171／174／177　ラファエル 162／163／165／169／173　ウリエル 176
一九八四年一月号〜六月号まで
ラファエル 178　ウリエル 180　ミカエル 182／183／185／187　ガブリエル（六月二十九日）188

第二章 『希望と愛と光』掲載メッセージ ―― 189
一九八一年一月創刊号～一二月号まで
ガブリエル 191／203／204／214 ミカエル 192／206／219 ラファエル 195／200／212 ウリエル 198／202／210
一九八二年一月号～七月号まで
ラファエル 216／218 ガブリエル 220 ミカエル 219 ラグエル 222
第三章 〝正法〟とはなにか？ ―― 225
正法のあゆみ 千乃裕子 227
正法の解説 235
第四章 『高橋信次霊言集』の著者・大川隆法氏への反論特集 ―― 245
〈天上界からメッセージ〉 ミカエル 247
目的達成のためなら手段選ばぬ「悪」の正体 池見 宏子 248
馬を鹿という愚か者に過ぎない 海野 真 250
正法流布の活動妨害を意図 畑中省一郎 252
千乃正法と真向から対立するもの 上地 正雄 253
「理論」も「科学」もない 大沢 宏 254
どこもかしこもデタラメだらけ 柳田 徹 256
底知れぬ程馬鹿な悪霊のたわごと 森絵 睦子 257
生命の尊さの意味もわからず 水谷 俊夫 265
憤りの念を禁じ得ません！ 大原由起子 266
「科学性」もゼロ 新道 一作 268
高橋信次の霊と詐称し、読者を徹底的に愚弄せんとする悪書 S S 生 270
テーマ別索引1 278 テーマ別索引2 276
カラー絵 千乃裕子 カラー写真 石崎正

神の犠牲

ガブリエル

ペル　イエス・キリスティロア　ウム　モルト　カルクス
RER IYES KIRISTIROA UM MORTO KARKUS
イエス・キリストの十字架の死は、

エスセステ　ナム　ペルポイオロス　メルシウセア　ロムール　ミステア　パーナミトム
ESCESTE VAM RELRQUOS MELCIUSEA ROMUL MISTEA RAAVAMITOM
永遠に悔いぬ　悪の魂に満ちた地上に、

ノーブレム　スプラ　エプタム　ピルタ　マハーテス
VOBLEM SURRA ERTAM RIRTA MAHATES——
高貴に過ぎる神の犠牲であったかも知れない。

イルレネーア　エルダー　アナム　ディレーネア　ホルコム　エ　ピールタム
ILREVEA ELDA AVAM DIREVEA HORKOM E RIRTAM
その昔　私達天が与えた希望と光を

メアゾー　キルレア　エスセステ　ウム　デトム
MEAZO KIRLEA ESCESTE UM DETOM
あまりにも多くの人が地に投げ打ち、

エ　サタージアス　プレ　パラス　ドーザ　ムーテム
E SATAAJIYAS ꞮRE ꞮARAS DO)ZA MU)TEM
サタンのしつらえた舞台に踊り、

シウド　エルマー　エ　シウド　ピルタ　エ　シウド　セルパラ　セレパラス　セクレタム　キルナー　ナム
SIUDO ELMA̅ E SIUDO ꞮIRTA E SIUDO SERꞮARA CELEꞮARAS CEKRETAM KIRVA̅ VAM
偽の救世主と偽の神と偽の牧者に従って迷わぬ人類は、

グーナウピールタム　エ　グーナウピルテア　ナム　エレムロイ
GU)VAUꞮIRTAM E GU)VAUꞮIRTEA VAM ELEMRQ
真の光や真の神々の来臨に、

テーハルナ　ナム　ウーブレ　ダー　テレクレッタ　グーナウ　ミルデア　ポロペイナ　ナム　ハルクム
TE)HALVA VAM UVRE DA̅ TELEKRETTA GU)VAU MIRDEA ꞮOROꞮEIVA VAM HARKUM——
目開かず、その語る真理にも耳を傾けず、

エイロイオウサ　プリアテス　ポイト　アマム　ウム
EIRQOUSA ꞮRIATES ꞮQTO AMAM UM
心は閉じたままに生き続け、

プロフォル　テクテマナ　ノーブレム　ホルコム　ナム　ポスム
PROFOL TEKTEMAVA VOBLEM HORKOM VAM POSUM
深い思考と智恵と気高い望みを抱かず、

モーカム　エス　グーナウ　アナム　エルダー　エ　ダウム　セレパラス　キルレア
MOKAM ES GUVAU AVAM ELDA E DAUM CELERARAS KIRLEA——
私達天の者と、それに従う人々を偽者と嘲笑う。

エ　ピルタナム　サタージアス　ナム　テクテシウサ　フローレム　トーメス　ウム
E PIRTAVAM SATAAJIYAS VAM TEKTESIUSA FLOLEM TOMES UM
神もサタンも認めぬイデオロジストが世界にはびこり、

セークレト　サルガス　エ　アゲム　ウム　ウスパ　ウスペナム　キルレア　デジウス　テクエクト
CEKRETO SALGAS E AGEM UM USPA USPEVAM KIRLEA DEZIUS TEKEKTO——
彼等に取り入り、煽動し迷路に更に迷い込む人類の滅亡を計る。

ウム　ポイアウサ　ナム　テクテム　ギルグ　テクテシウサ
UM PAUSA VAM TEKTEM GIRG TEKTESIUSA
イデオロジストは、殺人を罪と思わず、

テクテム　ティーレエ　エケテステ　オネ　スレ　アマム　デジウス　テリオロ　ウムラスカス
TEKTEM TILEE EKETESTE OVE SURE AMAM DEZIUS TERIORO UMRASKAS——
盗みや姦淫を生きる一つの手段であると思い、人を不幸に陥れる。

イシュ　セルカム　ポイアウサイ　アミカス　ラハイム　ナム　フルーネ　オネテル
ISHU CELKAM ꝗAUSAI AMIKAS RAHAIM VAM FLUVE OVETER——
たとえ友人の生命を自ずからの手で奪おうとも、涙ひとしずく　流すことはない。

セークレム　テレクレッタ　セムテペアム　エ　ペルテレウナ　ウム　キルナー　エプトエ　エスタク　ナム
トーネ　ウム　ピルナ
CꝗKLEM TELEKRETTA CEMTEPEAM E PERTELEUVA UM KIRVA ERTOE ESTAK VAM
TOVE UM PIRVA——
彼等の語る平和や人類愛は虚しく、よそよそしく、訴える響きがない。

サブルア　オネトル　ナム　セルセ　ブルド　フルーネア
SABRUA OVETOR VAM CELCE BURDO FLUVEA
人一人を救う為に己れの血を流さず、

セルク　サブレム　セア　ナム　ペルポイオロス　ポイアウサイエ　ラハイム　トル
CERKU SABLEM CEA VAM PERPQUOS ꝗAUSAE RAHAIM TOL——
自ずからが救われる為に、人の生命を奪いて悔いず。

サタージアス　セム　テク　テシウサ　ナム　ペルテレウナ　ウム　テリオロ　フェデローム　メア
SATAAJYAS CEM TEK TESIUSA VAM ŘERTELEUVA UM TERIORO FEDEROM MEA——
悪魔のイデオロジストに、人間愛の情熱はない。

ピルタ　ディレーネアム　ギスカトル　ノーブレム　テリオロ　デジア　サタージアス　ウム　キルレア
ŘIRTA DIREVEAM GISKATOL VOBLEM TERIORO DEZIA SATAAJYAS UM KILREA
神は無実の気高き人を、サタンの企みにより人類に与え、

ダナム　ピリウケ　キルレア　デジウテアト　セア　サタージョン　セイコス　ピルタム
DAVAM ŘIRIUKE KILREA DEZIUTEATO CEA SATAAJIOV SEIKOS ŘIRTAM——
サタンに導かれて、愚かな人類は神を見棄てた。

キルレア　プロフォル　サカム　ウム　エイロイオウサ　ピルタ　エプタム
KIRLEA ŘROFOL SAKAM UM EIRQUSA ŘIRTA ERTAM
神の犠牲を心に深く刻みつけた人々は、

スレーネア　アマム　セルセ　バスク　エス　イエス・キリスティロア
SLEVEA AMAM CELCE BASK ES IYES KIRISTIROA——
イエス・キリストと同じ生き方を、己れの範とした。

ネアソル　ケル　クレッテ　セリム　リベル　セレメウム　クレルヨール　ペル　サターネル
VEASOL KEL KRETTE CERIM LIBEL SELEMEUM KRELYOL RER SATAAVEL——
しかしサタンやその部下と戦う勇気を持ち得た人は少数のみ。

ネア　ピルタ　エプタム　エ　テリル　エプタム　メルシウセア　フローレム
VEA RIRTA ERTAM E TERIL ERTAM MELCIUSEA FLOREM
神の犠牲と人の犠牲にも関らず、悪ははびこり、

セークレ・サナム　パナム　ウムラスカス　キルレア　ガザート　セレパラス　エ　パナム　ウム
モルト　グーナウピルテア
SEKRE SAVAM RAVAM UMRASKAS KILREA GAZAATO SELERARAS E RAVAM UM
MORTO GUVAURIRTEA——
神を見て従う人々の不幸を願い、死を願う。

テムセクテ　メルシウセア　テクエクト　メア　セルマデ　キルレア　ピルタ　ガザーテム　エ
ターテム　グーナウミルデア　セルセ　セケウナ　シュメーデ
TEMCEKTE MELCIUSEA TEKEKTO MEA SERMADE KIRLEA RIRTA GAZAATEM E
TATEM GUVAUMIRDEA CELCE SEKEUVA SHMEDE——
いつの日に悪は滅び、あらゆる人は神を見て己れの意志により、真理を選ぶか——。

第一章『JI』掲載メッセージ

＊一九八一年三月から『慈悲と愛』を改題致しました。
＊各メッセージの後に表示された年月日は天上界の方々がメッセージを出された日であり、月刊誌の各号の表示ではありません。各号については索引を御覧下さい。

ガブリエル

私はガブリエルです。

私は天上よりこの素晴しい『慈悲と愛』と名附けられた正法の機関誌が、このたび初めて世に出されることに限りない喜びと安堵を覚えるものです。

将にこの世は末法と言うべきほどのものにて、神の意志と計画と言葉を伝える書は、この機関誌とそして高橋信次氏の後継者として私達に祝福され、守られて、病身に出来うる限りの正法流布の仕事として出されている千乃裕子様の手になる「天国の扉」他天上の書のシリーズのみだと言わねばなりません。

高橋信次氏の御著書は、生前には光を与えられ、多くの人々の心と魂を目覚めさせました。しかし今はその光は失われ、天上の声はその書からは聞えなくなりました。なぜならば、それらを用いて自分達の益となし、神の意志でも計画でもなく言葉でもない教えを、理論の正しきものが後に「天国の扉」を通じて出されているにも関らずそれを無視して、サタンの惑わしの〝しるし〟と現象と企みに愚かにも利用された人々が教典のようにして伝え広めているからです。

私達は高橋信次氏の教えの中の誤りを抜き出し、正しく改められた教え、すなわち天国の書のシリーズに説かれます法を、皆様が学び、心の養いとして下さることを心より望むのです。

「天国の扉」に続く天上の書「天国の証」において私達は、いままで皆様に語ることの出来なかった天上の苦衷を誠意と限りなき悲しみをこめて語りました。そして同時に「最後の審判」という大いなる裁きが人々の徳と罪とを秤りにかけて行われているという事実も明らかにしました。

しかしそれは善なる心の人に恐れを齎すものでもなく、徳高き人々に世界の暗闇が身近にあると伝える宣言でもないのです。

却ってこれらの人々は神にありて喜び、その人々と同じ心を神々が、天上の者が有していることに共感を覚えて勇気づけられねばならぬものなのです。

人々の中には〝厳しすぎる〟〝慈悲と愛が足りない〟と評された人もいますが、神における善我の心とは、磨かれた、光を放つものでなければならぬのです。原石を磨いて宝石とするのに研師はどのような仕事をするでしょうか。磨かれる原石にとっては決して居心地のよい、楽しいものではありません。研磨とはそのような仕事です。ごつごつとした石を割り、荒い表面を磨きに磨いて表面を滑らかにし、水をかけては汚れを洗い流す。それを何度も何度もくり返すのです。

そのようにあなた方は神の戒めと光によって、そして自己の反省と改めによって魂を磨かねばなりません。

慈悲と愛はいかなる世にも善に徹し、徳に親しみ、賢者となる時自然に解るのです。魂が堕落を許されぬ環境において、神の光を感じ、清々しく悪の心を容れぬ浄められた良心において、人と対する時、心からなる誠意と善と思いやりが湧き出てきます。何の躊躇もなく、何が正しく、何が誤りであるか見抜き、指摘することが出来ます。

それは魂の歌であり泉なのです。

そして人の世の汚れに染まぬ心を持ち、自然の美しさに触れ、鳥や動物の無邪気なそして自然の摂理に叶った生活を目にする時、またそれらへの限りなき慈しみの心が溢れ出てくるのです。

神の恵みとはこのことであるかと悟り、天上の大いなる慈悲と愛をしみじみと感じるでしょう。そしてこれは波動の荒々しい、投げやりで荒んだ感情や心の人や、己れのことのみに明け暮れる人には決して悟れぬものだと私は断言致します。

パウロは奇しくも次のように申しました。

〝十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である〟

これを〝神の言は〟、〝わたしたちには神の恵みである〟とおき換えて考えて下さい。

正法を学ぶ人々の為に ①

ミカエル大王

私はミカエルです。

私の名を御存知ない方は、キリスト教の旧約新約聖書に出ておりますし、マホメットにもジーブリール即ちガブリエル大天使と共に啓示を与えミーカイールと紹介されています。

またオルレアンの少女ジャンヌダルクに使命を与え、オルレアン市からイギリス軍の占領を退けた聖女を守り助けた大天使ミカエル、聖ミカエルとしても知られております。イエス様誕生の折は、ガブリエル大天使と共にマリア様のもとに現われ生誕を告知致しました。

さて、私がこのたび千乃裕子様を通して現象形式であなた方に呼びかけるのには大きな意義があります。それは、この七月を以って私達天上界高次元の顔ぶれが代わり、私ミカエルがエルランティー即ちエホバ様に代わり天上界の最高指揮官としてその任につき、それと同時に、元六大天使が総て九次元に昇格致しました。そして新しくこのたびは、八大天使が任命され大天使長には、太陽界中位の天使でありかつサブリーダーであった者がなりました。九次元のブッタ様、イエス様、モーセ様は宇宙界に上がられました。詳しくは第二巻天国の証に記載されております。この書は八月十日頃に出版される予定です。新しい八大天使に支えられ天上界の高次元はいままでと違った方針で計画を立て実現を図るつもりであります。いままで発表されたものとして善霊の基準が大幅に変りしっかりした善悪の判断力を身につけた方でなければ、天上界に迎え入れることは出来なくなりました。微細な点に

至る迄善悪の判断力がなければならないのです。また、勇気ある方のほうが、ない方よりも喜ばれます。人のために進んで己を投げ出し、善のために、平和のために、正法のために尽す、それが最も私たち天上界の喜ぶところなのです。これが第一――。

そして、第二は「天国の扉」で申したことですが、人間の一生というものは、肉体を伴ういままでの生がある限りで、死後には天上界に迎えられれば永遠に魂、霊体として存在します。ということは、いま成すべき事を成しておかねば、学ぶべき事を学んでおかねば恵まれた環境で自分がその機会を与えられるということはもうなくなるのです。その人の一生が後の霊としての生涯を定めるのです。価値あるものか無きものか、優れたる者か、成長の止れる者か、九〇%の大脳の活躍とて本人が生ある間に如何にその脳細胞、大脳皮質に学習をさせたかによります。それによって全体の価値基準が決まるのです。誰もが同じレベルになるわけではないのです。能力を開発させ思考訓練をしておかねば死して後に同じことは絶対に出来ません。霊体の仕事はただ人の一生の助力者として導き教えてゆかねばならないだけなのです。他の人の指導をしなければならないのです。例え合体霊としてもその人を導いてゆかねばならないのです。

それが出来ぬ頭脳ならばもはや天上に籍を置く資格はなくなるのです。魂においてはもっと進んだ形での己を磨き鍛え浄化させることが必要となります。これは己について反省を日々行い改めねば達成されません。サタンの甘言といざないと甘やかしに己の虚栄心をくすぐらせて喜んでいるような人間は、正法を学ぶ資格さえないのです。それはこのたびの二月の最終的なサタンとの戦いにおいて天上界は何を為すべきかをはっきり知らされました。善悪の基準のしっかりしていない善霊たちの次から次への裏切りでどれだけ天上界は迷惑を被ったか知れないのです。ただ善人であることだけでは助けとならなかったのです。サタンの惑しと誘いにすぐ私たちやエルランティー様をうら切り、サタンと共に天上界に刃向ったのです。情けないことに半数が死にましたが、これは消滅と同じことで、霊体として存在しなくなることです。その中の四分の三がこうしたうら切り者で私たちに滅ぼされたのです。

善悪の基準と共にサタンの言葉の何が誤りで不合理であるかを見抜く英智を養っていなかったのです。これは生前の暮し方によるものが大半で死後の天上界での魂の修行は身についていませんでした。悲しいことに生前に厳しく自己を鍛練した者でなければ、死後に徳を養うことは出来なかったのです。また生前の徳を保つことも出来ませんでした。

第三に定められていることは、今生における正法流布の目

的は人々をして迷信から合理的思考へと導きだし、徹底的に霊の世界と三次元との関わり合いにおいて不明の点を明らかにし、即ち私たち天上の者の知る限りの真実と真理を与え宗教という有名無実の却って人々の魂の修行の妨げとなり、神についての知識を迷妄に導く宗派・団体を解散させこの世から去らせるものです、この世から消え失せさせるものです。僧職の解釈があるために、牧師の説教と独断的解明があるために、どれだけ天上界と人々は遠きに隔てられ、理解を阻まれたことでしょう。世の中があらゆる分野において科学優先となり、人々の学習レベルが上がり、知的水準が高くなり、私たちの語るごく人間としてあたりまえであり、常識的に物事を見極めていこうとする態度を理解して下さるまでに成長された、それが故の私たちの証です。

これは私たちを低くするわけでも卑しめるわけでもありません。善人であっても、教養と立派な人格、徳と知性とを備えた者のみを私たちはいま、選んでいるのです。それ以外は唯人類を混乱と、破壊に陥れる者のみでした。善人であっても愚かであれば人の迷惑となり、全体の進歩をはばむものです。人々の全体の向上を低下させるものです。そのためにあなた方は老いも若きも等しく、向上し続けなければなりません。要するに精神的な成長を望むのです。立派な成人としての人格を望むものです。年をとっていてもわがままな子供のような精神状態に退行してはいけないのです。ましてや三十代、四十代、五十代、二十代もそうです。賢明な人々、それを私たちはパンニャ・パラミッターを得た人々と呼び重要視致します。

牧師であっても、僧侶であっても天上界の語る言葉とサタンの惑わしを見ぬけぬ者の方が多いという悲しい事実も知っております。それが故に宗教は人の知的水準を高めるものではなく逆に低めるものであり、盲いたる者にするものであるとの結論に達し、その解体に踏み切ったのです。

今日はこのくらいですが、いずれ天上界にて定められた方針等につきあなた方に語りましょう。どうぞ望みを捨てず、光の中に歩み、正しき事、善なる事、そして賢き事を目標に日々を過ごしていって下さい。これで終ります。

（一九七八年　七月十日）

今からは、各守護霊たちに、大天使方および天上界によって消滅され、微粒子となったサタンがいまだに意識に働きかけ、その扇動に乗る人々への注意と警告が始まります。

今日は御気嫌如何ですか、私の名前はミカエル大王です。このたび、七月一日よりエホバ様の最高責任者としての地位を引き継ぎ、四次元である天上界ならびに三次元即ち地上に

住める人々を統轄し、平和と調和をもたらすため、悪の名において、正法の流布を妨害せんとするすべての霊並びにその霊に意識を支配され、この天よりそなえられたる正統なる後継者よりいずるメッセージを妨害し、失脚せしめんとする意図を持つものをことごとく滅しあるいは罰し、恥と死に至らしめんとする決意をここに述べ、また誓うものです。あなた方はそのような人々に心を閉じ耳をふさぎ、常に光を信じ、私を信じ、高橋信次氏の正統かつ合法的な後継者千乃裕子様を信じ、悪の惑わしにおのが信念をゆるがせられることなきよう固く正法の教えを身につけ八正道と中道とに歩み、そしてイエス様の如くブッタ様の如く善と悪と、正しきものとあやまてるものと、神と悪魔と善なるものと偽善者とを見わけ、理性と信念とゆるがざる神への信仰とを持って、神に離反するもの、神を罵るものを心より退け、正法流布のために己をとして働いて戴くことを望むものです。

神を罵る者とは粒子となりて扇動するサタンに惑わされし人々のことです。これで終ります。

（一九七八年　七月二十二日）

ミカエル大王

現象　土田展子

ただいまより後継者についての私ミカエルによる現象を始めたいと思います。

後継者については、「天国の扉」や「天国の証」を読んでいられる方は御存知と思いますが千乃裕子様が、天上界から後援、支援をうける唯一の人であり、その本体となる霊が今まではサリエル大天使だと公表されていましたが、真実の本体である合体霊は私ミカエルなのです。何故いまさらそのように、一度公表したことを変更するかということに関しては、ここでは仔細には触れませんが、今までGLAや其他の関係により、ミカエルと発表すればさまざまな衝突が起り、正法の流布が滞りなく行われることがむつかしいだろうと予想したからです。サリエル大天使の転生だと発表されていた時点では、それは、それでよかったのですが、最近の〝天国の扉〟を読んで正法流布のために働こうと心掛けた人達の間に様々な不穏な動きや天上界に背こうとする動きがあり、それによって私達は真実を発表することにしました。

千乃裕子様が、私ミカエルの転生であるということは、私ミカエルの名に賭けて皆様に誓います。これは絶対真実なものであり、誰にも覆すことの出来ないものなのです。ですから皆様もこだわることなく素直にこの発表を受け入れて欲しいと思います。そして次に後継者についての皆様が誤解し易い二つの点について説明したいと思います。

私が千乃裕子様の合体霊であるからといって、私がすなわち千乃裕子様であるとは云えません。また千乃裕子様がすなわち私ミカエルであるとも決して云えません。合体霊は合体する人間に高い意識を与え、そしてその人生をより良きものにするために働きかけるものなのです。ですから決して二つの魂は一つになることなく永遠に二つのままなのです。

そしてさらに詳しく申し上げると人間はその受精卵が出来た時より魂の歴史が始まるのです。そして受精後三ヵ月目より天上界からの合体霊が合体を始め、そこから新しく出来た魂が魂を通し合体霊の意識の吸収を始めるのです。合体霊は合体霊であり、新しく出来た人間の生命は決して合体霊と同じものとは云えないのです。このことを皆様はしっかりと理解しておいて下さい。

特に私達が天使の転生である、菩薩の転生であると知らせた人々に特に自分が菩薩である、如来である、天使であると思い込む人が非常に多いのです。人間は、生きている人間は、決して天使や如来や菩薩にはなり得ません。あくまでも死んでから、その個人個人の魂の修業の度合いによって如来界、菩薩界或は天使界に上がり、そして如来、菩薩、天使になるのです。ですから生きている人間は決してもう天国への切符を予約出来たわけではないのです。こういう現象は高い次元に生れた者にとっては、非常に掛かり易い罠であり、このテープを聞かれる方の中に私共の方から天使の転生である、如来の転生である、菩薩の転生であると知らせた人々は特に、注意してこのことを聞いておいて下さい。

もう一つは後継者という観念について説明します。後継者というのは、一般に理解されている、GLA式の後継者とは違うのです。それは人々に対して敬意を得るための後継者ではなく、人々の修業の礎となるための基礎となるそのための後継者なのです。つまり私達を通じ、後継者を通じ示されることを素直に信じ、ついて来るならば、あなた方の悟りへの道は約束されているのです。謙譲の心を失わず、常に素直で子供のような心を持ち、そしていつも光の方向を向き正法の基本にそって生きているならば、あなた方は決して正義から、愛から見離されることはないのです。「天国の扉」「天国の証」そして私達がいままでに送ったテープの内容をよく理解し、そして深く悟り、私達がこれから指示することを素直に守って、ついて来て欲しいのです。そしてもう一つあなた方に諭しますが、

決してメシヤと自称する人々についていってはなりません。彼等が自分を崇めること、拝まれること、献金されること、救い主のように扱われることを望むならば、その人はすなわち正法を説く資格などなく偽者であると見破って欲しいのです。奇蹟が起こせるから、霊能が優れているからといって、人格が立派だということにはならないのです。

真に正法を説く資格があり、人格が立派な人は、人から崇められたりすることを嫌います。拝まれたり、献金されることを軽蔑します。ですからあなた方のまわりに霊能があるからといって奇蹟が起こせるからといって増上慢に陥っている人がいたら、あなた方はすぐその人から離れなければなりません。そしてあなたに余裕があればこの人に忠告し、その人がそのような心の状態から抜けだせるように忠告してあげなさい。悪霊による天国のものと見せるような奇蹟、そして悪霊による霊能も確かに存在するのです。いつも、光と共に影はついてまわります。そしていつもいつも影の方に惑わされる人々の方が光の方について来る人よりも三倍、いえ、もっと多くいるのです。あなた方もその影の方について行く人々にならぬようにしっかり私達がこれまであなた方に示したことを、よく悟って下さい。

理解することと悟ることとは違うのです。正法を理解するのであれば誰でも正法を理解することが出来ます。ですが悟るとなれば、それは少し違います。悟るとなればその人の賢い判断、そして素直な心が必要なのです。そして決して楽な方に逃げてはいけません。私達天上界は絶えずあなた方を叱り、あなた方を励まし、あなた方を前に進ませようとしていますが、私達があなた方を諭そうとして叱っているのを、理解出来ない人がいるのです。私達はあなた方が一人でも多く天上に上って来られるように、一人でも深く悟れるようにと悪いところがあれば叱咤しているのです。私達から叱られるのは見込みがある証拠であり、期待が大きいからなのです。大きく

深い悟りを得ることに比べたら、プライドが傷つけられることなど何んでもありません。プライドや体裁を気にしていては、真に正法を悟ることは決して出来ないのです。地位のある人、財産のある人、名誉のある人ほど正法を学んでおきながら天上界から叱られたりすると、すぐそっぽを向いてしまうのです。彼等にとって一体正法とは何だったのでしょうか。自分の悪い所を素直に認め、相手のよい所を認めよ、そういうことを全く正法だと理解しない人の方が多いのです。

こういう意味において、金持ちが天国に入るのは駱駝が針の穴を通るより難しいということわざは本当であるようです。若しあなた方が心の底から自由になりたいと願うならば、日々に足りるだけの食物を買うお金があり、暮してゆける十分なだけの品物があるならば、その外の物は足りない人に分けてあげなさい。この考え方は二千年前のイエス様の時代と全く変りがないのです、使いもしないお金を持っていて何になりましょうか。プライドの高い人は今すぐそのプライドを捨ててしまいなさい。それによってあなた方の悟りはますます深いものになるでしょう。財産や地位や名誉のある人はいますぐ、それを抛って困っている人々への助けとしなさい。そうすればあなた方は正法を説くのに相応しい人になるでしょう。「天国の扉」「天国の証」そして私達がいままでに送ったテープに依ってあなたが深い悟りを得、天国に上って来ることが出来るように私は願ってやみません。短いようですがこれで私の後継者についてのメッセージを終ります。

（一九七八年　八月十七日）

ラファエル

時折千乃様に来るお手紙に、正法者の男女間の愛に対する考え方について、正しい態度を教示してほしいという内容のものがあります。

『天国の扉』第三章においてミカエル様により愛の定義がなされ、エロスの愛とアガペーの愛について説かれていますが、正法者がまず学ぶのは神の愛、すなわちイエス様の人類の罪を贖う愛、他者のために己れを犠牲にする愛、の尊さについてなのです。

その素晴しさは次の一言に尽きます。

〃人その友の為に己れの命を棄つ。これより大いなる愛はなし〃

昔から聖人と言われる人はすべて、その愛を神々の導きにより三次元の人々に示してきました。それはまことに精神美の極致ともいうべき昇化された愛の形であって、人は誰でもこのような愛を受ける時、自ずからの心も浄められ、同じアガペーの愛の心を会得し、それを行おうと念ずるのです。

この愛は友情にも、親子の繋がりにも、兄弟姉妹の絆にも、また見知らぬ他人同士の間にも見出し得るものであり、実現し得るものでもあります。従来のキリスト教においては他者への愛の絶対的な形、それには志を同じくせぬものや愚者や悪人への愛をも含めた、利己愛を完全に抜け出たものとして解釈されてきました。これは仏教の慈悲の心と相通ず

るものがあり、〝衆生済度〟の教えと源を同じくするものでしょう。

このような神の愛が利他的な、自己犠牲的な愛であることを学び、正法者はそれを絶対的基盤とし、男女の愛すなわちエロスの愛については如何、と心迷うものとなります。アガペーの愛に通ずるプラトニックな愛でなければならぬ。それ以下のものは罪と見なされるのではないかと戸惑うことになるのです。

それは正しくはありません。イエス様でさえ〝自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ〟と言われているのです。自分を愛する愛は利己的な愛であり、本能的な愛です。アガペーではない。フィリアといった友愛でもありません。そしてこの自己への愛が精神的な成長と昇化によって他者への愛、すなわちアガペーとなるのです。つまり本能の愛を知らねばプラトニックな愛もアガペーの愛も生まれてきません。

ましてや男女の正常な人間としての愛は本能と理性とのバランスを保ち、互いの人格を尊重し、思いやりと奉仕の気持すなわちアガペーの精神を持ち、しかもエロスの愛をも認めるものでなくては人間の心身の健全さを保つ上において障害となるのです。人間は精神のみでなく身体をも持つものであることを忘れてはなりません。

ピューリタンのような（清教徒的）厳格な愛は自然に湧き出るエロスの愛を不自然に押さえつけその結果反動として二倍の強さの本能の衝動を耐えねばならなくなります。そしてそれを律するに同じ強さの厳格な掟を以て身を縛らねばならない。厳格な人というのは往々にして、エロスの愛を認めず、道徳は禁欲主義であるといった歪んだ解釈をしています。それゆえに自ずからを掟で縛り、他を律し、精神の自由な広がりと健康な人生観を超えて苦行僧の苦しみを意識下において味わっているのです。

私は、快楽主義を奨めるものではありません。しかしすべてにおいて正法者は中道を行く心構えを身につけるべきだと言いたいのです。

つまり精神主義に偏りすぎず、肉体の快楽のみを求めるものでもなく、〃中庸〃が精神と身体の健康のバロメーターであることを常に念頭において、男女の愛というものも見て頂きたい。

またこれと同じことが仕事とレクリエーションの関係にもあることをお教えしたいと思います。勉学についても同じです。知的な職に就いていればいるほど、気分転換のための工夫が必要となります。また絶えざる労働からの解放である休息も必要となります。それをしなければ、精神と肉体は緊張の毎日のみを強いられることになり、疲労度が増してきて、ついにはストレスの蓄積から心の病い、身体の病いに罹ることになり、健康回復に時間がかかり、勉学を断念、職業や仕事を放棄しなければならなくなるのです。反面、遊びや怠けるだけの生活であっても、正業に就くことが厭になり、社会に適応出来なくなります。

そうならないために、日頃から心身の健康を保つため一つの事のみを偏って行わず、一つの考えのみに囚われず、心身の両面を理解して賢明に身を処してゆくことが、安定した円満な人格を形作るのに役立つことは言うまでもないでしょう。

正法を学ぶ人の為に②

業（カルマ）について

ミカエル

私はミカエルです。

本日は正法を学ぶ方々のために再びお話をしたいと思います。

今日は業（ごう）すなわち仏教の教えでは前世のむくいあるいはこの世での善悪の所業について述べたものですが、それについては誤った所を正し、正しい定義を与え、正法を学ばれる方々の正しき指針としたいと思います。

業（ごう）すなわちカルマは大別すれば、四種類あります。

第一のものは人間本来の本能に根ざすものです。

第二は祖先伝来の気質や国民性からくるどうにもならない性格、考え方、例えば日本人は一般に感情的で非理性的、思考の段階も浅く、深くつき詰めて考えないで、直ぐ結論を出し、多分に好き嫌いによって事の選択、賛否のいずれかを決めます。

要するに熟慮断行型でなく、浅く思考し、直ぐ付和雷同し、非理論的で扇動に弱い所があります。非個性的であり、正論か曲論か深く考えて選ばず、世論の動く方へ押しやられまた逆らいもしない。

これは過ちを正し、納得するまでその所信を問い、真理を受け入れるにやぶさかでないという、いわゆる〃物の解る〃タイプとは正反対なのです。

感情に任せて事を定め、大勢（タイセイ）に個人の意見を無視されても仕方がなく、マスコミの好む方に押しやられる――それが従来の日本人のどうにもならぬ業（カルマ）でした。

アメリカ人にはアメリカ人の業（カルマ）があり、イギリス人にはイギリス人の業（カルマ）があります。

第三のカルマは両親から受け継いだもの、遺伝的な性格上の弱点、欠点であり、環境的に周囲と協調しようとする過程で形作られてゆく性癖で、社会生活の中で仕方がなく作られて了う性格上の欠点などがあります。

第四のカルマはこれも第三と共通のものが多く、個人の性格上の弱点、欠点などです。

善悪に対する身の処し方が判断の目安とな

ります。

仏教思想および宗教思想では、個人の責任に呼び掛けても、人々の意識や知的水準が低い場合には心掛けを変える事は出来ませんから、前世の報いでこうなった、だから今生ではその報いを来世に持ち越さぬよう一生懸命善事をなして、その罪業の一つ一つを消してゆきなさいと説き、それが行き過ぎて、先祖を祀らないからその報いで一家が病気勝ち、離散、事故に遭い、不運な毎日を過さねばならない、と言われるような、新興宗派に口実を与え、喰物にされるようなことになるのです。

人々の未知の世界への恐怖心を掻き立てるのです。

これは原始宗教と同じ性質を持つものですね。

現代の科学的合理的な生活をする、少なくとも文明国に住む知的水準の高いあなた方が二千年前や三千年前の考えに退行し、前世があるから、来世があるから、祭儀を完全に取り行わねば、霊となった死者の気嫌を損じ、どんな報復を受けるかも知れないとか、三次元でいわゆるカルマを無くしてゆかねば、来世に持ち越し、困った事になるといった幼児的考えは一切捨てて頂きたいのです。こういった考えを迷信的と申します。信仰の誤った道に迷い込んだ人々の形容詞ですね。

理性的、常識的に考える時、自己の責任において考え、行動をし、語り合い、他に迷惑を掛けない、傷つけないといった民主的な考え方を生活に採り入れる時、すべての人々がそう努めて生きる時、業だとか、カルマだとか、因縁あるいは宿命といった他力的な、原因が他から来たといった被支配的な考えは、出てこなくなるでしょう。

あなた方は神の前に平等であり、誰の奴隷でもなく、だれに屈従するものでもないのです。天災は仕方がないとしても人災は他から来るものではなく、自ずからが作り出すものです。

業（カルマ）や原罪などという本人がどうにもならぬような印象を与えるものを記憶にしみ込ませて悲観的な人生を生きるのは止め

ましょう。

うまくゆかない。事故に遭った。病気になった。これらはすべて、自らの工夫が足りない。注意や智恵が足りない。つまり自分のやり方にどこか誠意や努力や知識や工夫が足らないのだと思って下さい。これが二十世紀から二十一世紀にかけてあなた方に与えられた正法なのです。

〝運命〟といった悲劇的な考えや言葉は用いず、自分達が世界を創り出してゆくために種々努力しなければならない。〝親の因果〟〝前世の報い〟などといった前世紀の遺物のような古めかしい考えは捨てて、そういったものを餌に信者を増やそうとする擬いものの宗教には動かされぬこと――またこういったことを非理性的な、他がそうするからしなければ、といった無批判な人々に教えて上げて頂きたいのです。

愚しい宗教思想はもうそろそろ切り捨てねばなりません。文化生活と曽祖父母の宗教思想とはそぐわないものです。

そのようなものに惑わされていては、いつまで経っても人間として精神の成長も知的開発もなされず、魂の修業とは僧侶の修業だぐらいの知識と認識しか得られないのです。

天上界の求めるパニャ・パラミタとは賢明な対人関係であり、工夫に富む合理的な生活態度であり、感情に走らず理性的に物事を処する生き方であり、賢者を範となし、徳を備え、正義と不義をわきまえ、善悪を識別する知能であり、愛と慈悲の心より出ずる善我に根ざした言葉と行いの全き人生の智慧を指すのです。

女も男もそのようにならねばなりません。でなければ天上界の一員として資格ある、天の信頼し得る魂とはならないのです。

引き続く善霊の裏切りに私達は以前にもました完成された人格を望みます。

このような魂の修業が面倒であるとする怠け者は天上界は必要としない事を改めて私はここに明らかに致したいと思います。

一九七八年十月十六日

ミカエル

『天国の扉』第三章でちょっと触れましたが、〝愛〟について再び皆様の理解を深めて頂きたく思います。

国の体質に合うのでしょうか、神道と相まって仏教系宗派の敷延が大きい日本においては、仏教の大義たる〝慈悲〟の解釈がどうしても個人の神仏への信仰心に吸収されて一つの固定観念となり、キリスト教で説く、すなわち私達の提唱、提示する〝愛〟について、その要求される形が何であるか判然としない人が多いのではないかと思います。

過日ある高僧が〝無慈悲の慈悲〟の必要性を今日の教育、子供の躾けに関し述べておられましたが、ちょっとした理由で自殺や殺人に走る近頃の子供には耐える心、鍛える心、待つ心がない。それは両親も社会も自分達に対し、子供に対し、慈悲を与えすぎるからであるといった内容でした。学童期、思春期を問わず、日本ほど、子供向けのマンガや雑誌に露骨で残酷なものを載せる国もないですが（マスコミと作家が互いを堕落させ合って大人の興味を満足させているといった所でしょう）、その他について言えば、なるほどその通りであろうと私も共感を覚えました。

慈悲が甘やかしに通ずるものであっては、教義において至高の徳とされる〝慈悲の心〟が正しい形で与えられることにはならない。それが正しく与えられていないから受ける側も何の感動もなく、生涯を通じての心の糧、魂の修業への指針とはならないということなのです。機関誌創刊号のメッセージにおいてガブリエルが魂の研磨を説き、そこから初めて〝慈悲と愛の心〟が湧き出てくる。それは魂の歌であり、泉である、と述べております

が、〃慈悲〃は厳しく己を練磨する心がなければ、己にも他にも益とならず、また本当の〃慈悲〃とは言えないのです。

〃衆生済度〃とはあるがままの俗人を救うのではなく、天に相応しい人格となす為に良き教えを万人に説き、心を清め、そして救うことなのです。自然界にある動物や植物は人間のごとくに過度の破壊を求めず、従ってあるがままで救われる。同じ救いでもそれだけの大きな開きがあります。

〃衆生済度〃を説くからには心を浄めず、天の意に沿わずとも救われるであろう、というのはあまりに身勝手な考え方と言わねばなりません。〃どうでも良い〃と言う人もいますが、心の底、意識の深層においてはやはり救われること、天に生かされることを願っているのです。私はそれを知っています。

〃慈悲〃でさえもそのようですから〃愛〃も勿論その域を出るものではない。愛も甘やかしの愛であっては、自他共に有害無益となり、尊敬と信頼を以て接する人格の成長を互いに望むことは出来ません。

愛は罪をも宥すとされていますが〃盗み〃や〃殺人〃もよほどの理由があってそこまで追いつめられて不本意になしたのであれば、〃法〃も情状酌量という温情を与えますが、罰されることなく、いつも宥されるのであれば、世の中は犯罪に満ち満ちたものとなります。それを防ぐ為には慈愛は〃法〃に譲らねばなりません。

そのように〃罪〃も神の国の一員たらんとする人々は原則として容認されざるものとなります。神の宥しにも限りがあるのです。反省と懺悔は愚かもののようにくり返せば良いというものではありません。少なければ少ないほど良いのです。

更に〃罪〃についてより詳しく語るならば〃罪〃とは他人の生命、生活を脅かし、社会の調和を乱し、破壊するものを言い、暴力、破壊の為の闘争もすべて罪です。

三大新聞の一つに岡本某なる社会部の記者が、〃大阪大学は保守化「反共」の傾向が著しく、学生は主体性を失い、無気力化している。それは死を待つガン患者のごとし〃と堂

々と書いていますが、この保守化させた原因として挙げられた世界基督教統一協会を私達は認め擁護するものではないにしても、従来の集団の暴力を肯定する左翼運動のみが個人に主体性を与えるといった、偏狭な意見が一部の教師や社会人によってしばしば吐かれるからこそ、学生は判断に迷い、暴力や殺人を革新と取り違え〝罪〟を犯し続けるのです。主体性は創造に伴うものであって、破壊にではないことを三次元で理解するものは少ないのでしょうか。

〝正義、正義〟と理想理念を掲げて即短絡的な力に訴え、殺人、強奪、破壊を正当化するイデオロギーは死者と闇の世界の使いであり、天と光の国の使いではありません。真理と天は社会の調和と秩序を擁護するものであり、それを乱し破壊するものはすべて〝罪〟なのです。

再び〝愛〟に目を転ずるならば、〝愛〟は一部の楽天的なクリスチャンが解釈するごとく〝律法〟と〝罪の観念〟を空しくするものではなく〝慈悲〟が〝戒律〟と〝魂の修業〟を離れては存在し得ないように、〝律法〟を完成するものであることを私は何度もくり返して皆様にお話したいのです。

自己を厳しく戒め、法と戒律を当り前のこととそのごとく生きようと志す人にでなければ、真の価値ある〝慈愛〟の限界を知ることもなく、思いやりと甘やかしの違いさえも会得することはないのです。

中には私の厳しさに触れる時たじろぎ、疑いと恨みと反逆の言葉をさえ私に吐く人もいます。千乃様に対しても同じです。このような人は私の法の目で厳しく見詰める時、必ず何処かに何らかの形で自己を甘やかし、悪いことには己にのみ甘く、他に厳しい人であったり、他に甘やかしの言葉や賞讃のみを求めて生きていることが判ります。自己顕示と賞讃願望が清水に油を二、三滴流し込んだ時のように醜く浮いているのです。

今の世は能力、実力主義と言われ、技術や才能がなければそれが生活権を脅かしかねない場合もあります。そういった中では自己を知ることが他と比べての優劣を知ることとも

なり、それが自信に繋る人は無意識に自己顕示の衝動を露わにします。

しかし反面、自己を顕示し賞讃を求める人は幼児的な性格を持ち、自分の技術や才能、果ては生き方にまで自信のない人なのです。子供が大人は自分に何を要求しているか、果たしてこれは許されることか許されないことか、ということを絶えず意識し、顔色をうかがうようなものです。

つまる所、精神的に〝子供〟であることは社会の甘やかしを求め、その甘やかされた人生において善悪の基準がはっきりせず（社会はそれを与えないのですから）、従って〝罪の意識〟も薄く、律法の厳しさを避けて通り、〝慈悲と愛〟の本質も解らず、自己愛のあまりに他者への愛も慈悲も理解せぬ盲目の人生を送ることになるのです。

天の指針であり、イエス様の言葉である、〝幼な子の如き心を持て〟というのは真理に対して素直な信頼の心であり、精神の怠惰から幼児に帰れと言う意味では決してないのです。

自ずからを厳しく律するものであってこそ魂は良心の苛責から自由であり、悩みを持ち苦しみにある隣人への真の愛と慈悲の心に目覚め、無私の心で手を差し伸べる思いやりと誠意が生まれてくるのです。

魂の研磨を怠らず、互いに助け合うこと――それはこのような〝律法と愛〟、〝戒律と慈悲〟の中から自然に生まれるものであり、天はそのような人々に惜しみなく正義の冠を与え、信義と愛で包むものなのです。

ミカエル

今日は思いやりと尊敬について私の思う事を述べてみたいと思います。

人間は動物とは異なり、エロスの愛即ち本能的な愛からナルシシズム即ち自己愛へと感情が揺れ動くのではなく、どのような人であっても、心の余裕さえあれば人の心を思いやり、傷つけるような言葉や行動は差し控えるのが健全な反応であると言えましょう。それはアガペーの愛の基本となる、理性によって制御された高等感情と呼ばれるものです。

〃思いやり〃は先月号で述べたような〃律法と愛〃、〃戒律と慈悲〃の中に組み込まれた美しい感情の一つなのです。

〃己に厳しく他には寛容に〃とはあなた方の間で言い古された古人の教えですが、他への愛であり、慈悲であるのが〃思いやり〃として現われる感情です。その中には憐みというよりも自分と他とを同一視し、人の気持を傷つける事は、己も同じく傷つく事であり、人が何らかの不幸や悲しみにあって心が痛む時、それを知る自分も同じ不幸と悲しみを感知することであり、その度合がどのくらいのものであるか正確に知る事なのです。

それを知る能力――心のやさしさと感受性がある時、他への思いやりから出る慰めの言葉と行動は、その悲しみにある人を正しく立ち直らせ、希望を与える事が出来るのです。他と共に泣き、涙さえ流す事の出来る美しい

心の持主となるのです。これには自分を中心とし、自分が他に与える印象や体裁、プライド、虚栄、そして自己を顕示する気持といった偽我の感情の入り込む余地はありません。

他への思いやりと自らの誠意と愛を与える時、初めて心の余裕があると言えるので〝心が浄められている〟と私達が表現する状態なのです。他への負担とならぬ為に自らの心身の健全を計り、その上でそれ以上の自己への関心を持たぬ時――即ち完全にナルシシズムの気持を捨て去る時、魂は深奥から光り輝き、真の人間としての価値を持つのです。初めて私は四次元においても尊敬を得る心であり、魂であると申しましょう。

高橋信次氏の教えはあの方の私見をもまじえ、荒けずりで、多くの偽我を抱えながら近づく人々の装った表面のみを見、つくろった言葉のみを聞き、ただそのオーラの色や量のみで善我の物差しとしておられた。

それがゆえに、一旦GLAに籍を置く人々は俗人と全く変らぬ人間としての厭味と生の感情を心に隠し持ち、高橋氏の不在の場所では、地獄の亡者そのままに、俗的な新興宗教に籍を置く人々と何ら変らぬ低級な意識と我執が言動として現われていました。高橋氏の死と共にダビデの煽動も激しくなり、それが一層制御出来ぬものとなったのです。

私達が誠意と真実を以て語りかけても、その深い意味を悟らず、心に響く人は片手の指にも満たぬものであったでしょう。私は側にあって、サタンダビデと悪霊の干渉と戦いつつ、皮肉な思いでそれらの人々を眺めていました。他の元大天使方も同じ事です。

イエス様、ブッタ様、モーセ様も同じ気持でいられたのでしょう。何も口に出しはなさいませんでしたが。

残念なことに、高橋氏は天より大いなる権威と自信を与えられ、慈愛に満ちた言動の人として現われてはいられましたが、私達天上のものが常に鈍ってはならない感受性と心の琴線の音色にはもう一つ感ずる所のない人でした。

ただ熱意と感動の人であったのです。そし

て正しく偽我を浄めることを教えられず学ばず、悟ることもなかったGLAの人々は、今や内外に別れてしまったのですが、今もって〝有難や有難や〟の気持しか持たず、誤りがあろうがなかろうが、従来の如く教祖や始祖を奉るように高橋氏とその語る所を完全に偶像化しているのです。ただ目に見える派手な〝しるし〟と、大仰な儀式ばった言葉と、寄せ集めのような浅慮な宗教的表現としか知らず、私達から見ればまことに意識が低く、奇異な迷える人々の群としか映らなくなってしまいました。

それらの人々に取って、私達の今語る真理と真実は理解することの出来ぬ高等感情であり、悟ることの出来ぬ心の美しさなのです。

にも関らず、天国シリーズを読めと奨められ、また彼等の非を指摘されて、その言葉が〝心に響かない〟〝悟りがない〟とうそぶく人々もこれらの中にいます。その響きとは、モーセ様の現わされた奇跡のような、落雷の如きものであり、その悟りとは、〝私は悟りを開いた。宇宙即我を悟った〟といった言葉だけのものに過ぎないのです。

それほどに荒々しい、精妙な心の音色に応ずる所のない、即ち天の波動には合わぬものとなってしまっているのです。高橋信次氏の下に私達を求めて来た人々が、今は私達に石を投げつけ、唾(つばき)しているのです。〝天に唾(つばき)す〟とはまさにこの事でしょう。

私達の警告に耳を貸さぬ、俗人と何ら変りのない偽我に生きるこれらの人々に私自身もはや救う意志を持たず、ただ現正法者の（天国シリーズの下に集う人々の事を指し、他の自称〝正法者〟の事ではありません）慈愛の心が私に寛容な態度を与えているのみなのです。

世に言うヒステリー性格という気質があります。これは神経質で感情的で派手で、自己顕示が強く、虚栄心が強く、独創性に欠け、没個性的で、人真似がうまく、人の中心となりたがる。それでいて他人の気持など解らず鈍感で、しかも人を惹きつけるようなアクセ

ントのある喋り方をする非常にエゴイスティックな性格ですが、その上に依頼心強く動物的な恐怖が常に心に不安を齎し、変化に耐えられず単純で付和雷同型で、自主的に行動することの出来ない、大変厄介な人格で、こういった人々がどの国においても狂信・盲信宗派の中心となっています。

一口で言えばデリカシーや感性の美しさ、情操の豊かさといったものとは縁遠い人々であり、そしてまた、あらゆる犯罪に参与しているタイプでもあるのです。

虚言、盗み、殺人、謀略、破壊へと、宗教的狂信から思想、イデオロギーの狂信者に至る迄の共通する一つの性格類型であることが心理学者、精神分析医のデータにおいて明白でしょう。

すなわちイランを暗黒へと導く狂信的イスラム教徒と左翼思想を信奉する狂信的共産主義者は、性格的に同じパターンに属するのです。彼等はおのおの自分達の献身するものが最高の理念であると信じて疑わず、振り返ってその理念の誤りを冷静に分析することすら出来ない。彼等に取って〝思いやり〟、〝慈愛〟、〝天の波動〟、〝感性や情操の質の高さ〟といったものは遙か遠く無縁のものであり、愚かな感傷といった程度にしか理解していない。そのような非情な教育しか受けていないのです。

GLA内外の人々も彼等と質において大差はありません。恐らく私達天上の言葉には彼等の理解し、語るものとは共通の表現がないのでしょう。また〝尊敬〟といった高等感情もありません。互いの人格を重んじ、心に尊敬の念を以て接する。その意味や重要性を理解出来ないのです。

なるほど狂信的な人々は彼等自身を愛しているわけでもなく、自己の人間としての価値について振り返ってみた事もないのでしょうから、他を真の意味において愛することも尊敬することも出来るはずはありません。愛や人間の尊厳がある所に虚言も、盗みも、謀略も、殺人も起ろうはずはないのです。ただ言葉遣いのみていねいであっても、心の底に人

を軽んずる気持があれば、それは真の尊敬ではなく、偽我に過ぎないのです。彼等が外見上穏やかで円満に見えるのは〝偉大な偶像〟や〝メシヤ〟に縋って、小児の如く安心しているからなのです。歎かわしき病的精神構造です。

私が今ここに集い、天の波動に合う為、日々魂の修業をと決意を新たにして善に徹し、心の浄化に努めていられる人々にお願いしたいのは、先に述べた未熟な性格の人々のようでなく、個人の尊厳を意識し、互いに真の尊敬と、思いやりを持って欲しいということです。

魂の修業に励む人々を立派だとは思いませんか？　もしあなた方の中に自分の修業の方が立派だと他を見下す人がいるならば、それは天上人となる資格を持たぬ人です。またもや偽我の世界を自分で作り出し、いかに心の立派な人々と交流し、最高の徳の教えに接し善のみを実践しようと、他の人々の徳が目に入らず、敬まうべきを敬まわず、判断の基準を狂わせて偽りの対象を敬まうならば、あなた方は知らずにGLAの再現をしようとしているのであり、私達は再びあなた方を離れてもっと真なる善我の世界を求めて出てゆかねばならないでしょう。

相手を敬う心を持つ事は徳ある人となる為の初歩の心得であり、その気持がなければ互いを高めあうことなど出来ないのです。

もし自分がなべて人を軽んじて呼ぶ資格があると思う人は、それだけで傲慢な心を持つのであり、対する人の謙虚な言葉遣いや態度が、自分よりも弱者であるからなどと思う人は、あまりにも物事の表面をしか見抜くことが出来ず、そのような人々を私達の「集い」に参加させているだけでも、天の恥となります。

GLA内外であろうと、私達の「集い」であろうと、単なる読者であろうと、主宰をなじり、千乃様を軽んじ、あるいは善意を以て馳せ来たった正法者である仲間に、魂の修業への暖かい思いやりを持てず、敬意を払えな

い人は、私から同じものを受けるであろうことを覚悟して頂かねばなりません。

とくに千乃様に関しては、GLAに於ける高橋信次氏や佳子氏の場合と違い、千乃様を通じて出るものは、単なる連絡であろうと考えであろうと意見であろうと或いは他への批判であろうと、言葉遣いであろうと、その判断の誤りなきよう、すべて私ミカエル及びラファエル、ウリエル、他の九次元の方々、時にはエル・ランティ様、イエス様、ブッタ様、モーセ様の検閲と同意、並びに許可なくして出されるものはないのです。

千乃様は公正であらんがため、その態度を最初から持しておられるのです。

この事実から、千乃様に対する軽視や侮蔑は、全天上界に対する軽視であり侮蔑であると私達は受け取り、対処するものである事を心して頂きたいと思います。

昭和五十三年一月八日の土田展子さん現象の、千乃様を通じての人々へのメッセージに〝おがみ、あがめるな。後継者はそなたらの僕である〟と述べたのはメシヤ信仰を廃するためであって、単純にその通りに行い、千乃様の真の価値を見ぬけず、その悟りと洞察の深さを計り得ず、自己の偽我を正見・正思と思い誤まり、千乃様のみならず、私の手紙にさえつばきする事は、それが己れにかえってくる事を覚悟して頂かねばならないのです。

正法を学ぶ人の為に③

について

ミカエル

私はミカエルですが、今日は善我と偽我について詳しくお話したいと思います。

まず善我というのは、善なるものについて深く追求し、いつわらざる善の心を披瀝することを理想とする生活態度をいいます。

それはいろいろな意味を含み、いろいろな表現法がありますが、『天国の扉』第三章〃ある日の高校生クラスの討議より〃の中で述べた善我の定義が、自然であるがままの気取らぬ自己を感じとるということに始まり、いつわらざる自己であり、また他と全面的に協調し調和する心に終るということ。

これは名人達人といわれる人の虚心坦懐の心情と相通ずるものがあるのです。

すなわち善なる心という安定した曇りのない良心に支えられ、何ら心を乱すものなく、流動的でいかなる人にもその心情を等しく合わせてゆく事が出来る水の流れにも似た心であり、少しも片寄ることも、ゆがむこともない。真理を常に求めて真理を学ぶ事に喜びを見出す心の余裕をも持つことのできる精神のあり方なのです。

正しきを喜び、自己の過ちを認め、悪びれず、素直に正していく事の出来る柔軟な心構えなのです。

ところが善人であろうと欲し、そのごとくふるまい語りながら、己の非を問われたらたちまちにしてプライドと虚栄心がとってかわ

り、出来うるかぎり己をかくして欠点を見せまい弱点をさとられまい過ちを知られまいと自己保存に専念する。

そうなれば事の正否ではなく、ただ言い張り拒否し続けることによって相手があきらめるのを待つ、相手の追及が終ればそれで自分は安全であるというこのような善人もおります。

これは何と呼びましょうか、善人は善人でしょうが愚か者であり小人なのです。

そしてこれは善我と呼ぶにはあまりにも人間としての欠点を持ち過ぎた人です。これは偽我と呼ばねばなりません。自己保存という偽我です。

霊界の意識です。

またいかにも善意に満ちておりながら、何をおいても善行を人より以上に励み他につくすことが生きがいといった人もおります。人にもまた大きく宣伝します。自信を持って自分は悪い事はしたことがない良い事のみをなしてきたとその善事を数えあげます。

善我と偽我

いわゆる大変積極的な性格です。このような人に頼むと物事が大変はかどると思わせるような人です。

ところがこのような人に何かを頼めば、いつもそれを過大に評価し、感謝を繰返し言わねばならず、心の重荷となるような場合さえあります。あまつさえこの人の行為はいつも感謝して受けねばならず、少しでもそれを迷惑がったり拒否したりすると、大変気分を害するのです。

このような人は善人でしょうか？

善人どころかその反対で、大変おしつけがましい、他人の心や思いが目に入らぬ人であり、自分の考えしか胸中にないのです。これこそ偽善者の代表といわねばなりません。これは自己顕示欲という偽我なのです。

これも霊界ですね。

また穏やかでいかにもやさしく善意そのものといった印象を与えるにもかかわらず人から真の愛情や友情を得られない人もいます。

こういった人は、えてして完全主義者であ

り、いかに人に良い印象を与えるか、善人であるといわれる為にはどのように振舞えば良いかといったことにまで神経を使い計算して行動します。スターがファンに対して注意深く振舞うのに似ていますね。

このような人は外見に注意を払うあまり、肝心の人の心を見抜き人が何をしてほしいと願っているか悟ることが出来ないのです。

つまり表面は神経が細やかで言葉にも注意して完全な人格者としての印象を与えようと望んでいるが、自己をつくろうあまり、愛情に欠けてはならない他への思いやり、どうすれば他の人を喜ばすことが出来るか、幸せな思いを与えることが出来るか等については悟り得ないのです。

そこまでいきとどかないといった方が解かり易いでしょう。つまり自己中心的で他人の事など考えていない人です。

これも善人とはいえません、暖かい思いやりに欠けるからです。それにふさわしく他からの愛も友情もうることは出来ないのです。

これは偽我であって善我ではありません。エゴイストという偽我です。

わがまま勝手というのはエゴイズムの派手な現われ方ですが、冷たい性格で他人の気持が解らないのはエゴイズムの陰性のあらわれかたです。

幽界か知識階級であれば神界の域を出ません。

また善人であると自称し他にも強制的に認めさせる人もいます。おおよそ徳と名付けられる事は全て行い、いかなる法にも反せず細かいところまで正しいと思われ語られることは全て為している。

完全な徳の持ち主で非難すべき所は少しもない、自分が正しく徳にかなうことをなしており、言葉においても行いにおいても非のうちどころがないがゆえに他人の欠点やいたらない所が気になり、叱らずにいられない、文句を言わずにいられない、このような人も勿論善人とはいえません。

聖書では律法学者と呼び、一人で社会の掟と道徳をつくっているような人で、それがこの人の生きがいでもあるのです。

しかしこれとて裏面から見れば、自分の納得がいく形で自己の完全主義的傾向を満たす為に行うのであって、他人の思惑や感情などどうでもよいのです。

つまり自分が他からなじられる非がなければ良い、欠点や弱点がなければよいといった自己中心的な自己保存的な気持を一歩も出ていない偽我なのです。

少しでも過ちをなすと不安になる。机が少し曲って置いてあっても真直ぐに直さないと気になる。ほこりが少したまっていても気になる。全てが完全な状態でないと気にいらない脅迫的な偽我なのです。

神界の意識です。

もう二つあります。

それは人間としてありとあらゆる欲と灰汁(あく)を持ち、不道徳なこと人に嫌われるようなことも、社会で成功するため名誉をうるため平気でやって来た人が、成功と名誉を勝ち得た時に世評が急に気になり出し、その醜い人間的な過去を世人に忘れさせる為にやたらに善行を施す人がいます。何々に寄付、何々の養護といった事に必ずその名を連ね目立つことをします。

これはうしろめたい自分の良心をごまかす自己欺瞞的なやり方で、明らかに偽善者的な性格を持ちます。

偽善者に共通の嘘をつくことが平気で、それがのちには本当であるかのように錯覚してしまうような人です。自己欺瞞という偽我です。

霊界の次元です。

おわりにこれは善もなさず悪もなさずという人で、大変に気が小さく他人の評判が気になるのに非常識的で爪に火を灯してもなりふりかまわず倹約な生活を送る人。

つまり吝嗇家であって、こういった人には善も悪もなく、従って徳とは何か人格とは何

か自由な魂とは何かを知ることに永久に無縁であり、ただ気がすむように倹約して大金をためることを生きがいとする。

これは善我ではなく偽我のかたまりなのです。

こういった人には平和も調和もユートピアも無縁です。もちろん幽界の次元です。

つまり自己の現われかたにおいて、そこに自然な感情・愛情の流れを感じさせないものぎくしゃくと不自然な感情が本人をおおっているもの、真理や真実を受け入れず背を向けるもの、これは偽我なのです。

反面、自然で暖かく飾り気なく、よそおったものもなく開けっぴろげで、心から素直に笑うことの出来る、信頼して間違いないと人に確信を与える、これを善我といい、また良心の曇りなきにより自由な魂ともいえるのです。

ギリシアの自然哲学者に共通する心であり禅僧の悟りにも似た心でしょう。

大自然の法則・成り立ちというのもこれに似ていて、環境を形造る上に理想的なもののみが良しとされ、理想の条件に合わないものはどんどん形を変え姿を消してしまう。

調和というまろやかな流動する様相、そこにはバランスという大切な要素があります。

自らの内なる生命のバランス・他とのバランス。己れを生かし他を生かすその規律のうちになければたちまち一つの環境を形造っていたもの全てが破壊され、その中にあった生物は植物をも含めて、生存不能となってしまう。つまり大自然そのものが歪みや不自然なバランスを好まずに自己調整をするがごとくに見えるのです。

調和のとれた永続性を持つ自然環境は決してその中に余分な片寄り過ぎた要素を含みません。

過度にすぎず過少にすぎず自然の中に含まれる動植物の数のバランスさえ一定の数を保ち、多く増えすぎたものには天敵という自然の与えた自己調整法があります。

つまり過度にすぎるものは調和のバランスを崩すものであり、地ならしをされねば常に

流動する地球という惑星上に棲息出来ず存在出来ないのです。

恒星と惑星間の引力のバランスが崩れれば惑星の様相は一変します。

その時、惑星上のあらゆる有機物・無機物はそのつり合いの数が変化します。

従ってそれは生態に変化を及ぼし、現在地球という惑星上に保たれている自然の法則と数のつり合いは一度に変化し、環境は破壊され平衡を失うでしょう。

このように全てにおいて調和と過度にすぎぬこと。つまり中庸が自然と宇宙の法則であり、ひいてはその宇宙に含まれる有機物・無機物、そして生態の法則でなければならず、またそうすることを余儀無くされて来たのです。

これを広義における善といい、人間にあてはめると同じような自然の法則に心身を従わせることになります。

己の節制を図り心の有り方を律すること。それが大自然の中の一環である人類の為すべき務めでありまた責任でもあるのです。

その自然と同じ心の有り方を狭義における善我の解釈にも用いて、善我は自然の成り行き、すなわち自然の法則と同じようなものであると、そう『天国の扉』第三章で述べたのです。

お解かりになりましたでしょうか。

一九七九年二月一日（現象　千乃裕子）

パヌエル

―動物愛護について―

私は「愛護」という言葉が嫌いです。人間の動物への恩恵といったニュアンスがあるからです。人間は「人類は万物の霊長である」と自分勝手に信じ込んでいますが、一体どの辺りからそのような妄想を抱き始めたのでしょうか。

人間には、発達した頭脳がある。文明がある。と威張ってみても、それが真に自己の幸せに繋がっているとは言えません。欲を持ち執着を持ち、文明の副作用としての弊害はありすぎるほどあるのです。

動物は確かに高等な思考を持ちませんし、人間から見れば原始的な生活史であるでしょう。しかし比較的精神の束縛から自由でいられます。自由であるというのは幸せであるということです。短命ではあるが、自然界の中で幸せである動物に比べて、束縛から逃れられない人間の一生はそんなに価値あるものでしょうか。

自然の法則という神の目から見るとき、人間は果して「万物の霊長」と言い得るでしょうか。自分達ではどうすることも出来ぬほど人口の絶対数が増え、他生物の環境や資源まで侵し、自分達の土地だと言いながら、住める限りの範囲、踏査できるだけの領域は散々に荒して、人間の衣食住さえ保障されていれば、動物や植物の〃種が絶滅寸前〃などというニュースは科学者、生物学者の問題だと考えるような狭い視野では、自分達の置かれている立場は見えぬかも知れません。

「人間は総ての不幸を取り除くことが出来る」とか、「無限の未来がある」ということを信じ、「いざとなれば神様が何とかして下さる」、あるいは「人間にしか心が無い」と言うのは人間の特性のようです。その反面、自分より能力の劣る相手は、虐待してもよいし、殺してもよい。力こそが勝利であり正義であるということを誇示します。これはしかし動物界の法則であって、人間で言えば二、

三歳からせいぜいで十歳くらいまでの子供の心理状態なのです。

言葉を喋らない。四つ足だ。人間より下位にあり、劣れるものだ。というのが動植物を粗末に扱い、虐待する理由のようですが、人間が私達天上界の者に取って忌むべき存在となるのは、動植物と同じく強者が弱者の上に立つのはまだしも、他を滅ぼすに必然的な理由と目的がなくともそれに徹する時です。滅ぼす相手が人間であれ、動物であれ、ただ殺すことに喜びを覚えるのです。誰がそのような権利を与えたのでしょう。少なくとも私達天上のものではありません。

殺すこと、虐待することに喜びを覚えるのは、サタンの業(わざ)以外の何ものでもないでしょう。

動植物を滅ぼせば滅ぼしたで、結局は自分達の食するものや着るもの、住みかなど、つまりは衣食住に、響いてこざるを得ないのです。どのような形で響くかは、私が説明せずとも少し考えればお判りだと思います。

また、刺戟しなければ動物達の大半は平和で友好的であるのに、銃やわなを用いてその上にも屈従を強い、あるいは殺害する人間の野蛮な習性は、弱者へのいたわりや思いやりを欠く習性ともなります。

不平を言えないもの、言えても報復出来ないものに対して強者の権利を行使するほど卑怯な心はありません。

神の目から見れば、人間よりも動植物の方がずっと生き残る価値があります。宇宙の法則を「生きる」ことにおいて実践しているからです。人間はその上に寄生しているにすぎません。現在はその寄生虫が大きくなりすぎて、地球は正常な生活のリズムを狂わせられているのです。

人類はどのようにして生きてきたのかもう一度考え直してみて下さい。文明のお蔭ですか？　そうではないはずです。他の生物や植物、無機物などの存在の恩恵を蒙っているはずです。その事実を再認識し、絶えず新たに思い起さねばなりません。

全国民が僧侶を経験するはずの仏教国タイの政府が、難民を百十台ものトラックに満載

し、他の方法もあったであろうにカンボジャに強制送還し、母国の国境を越えた所で全員が殺されたということを聞く時、動物はこのような残虐非道なやり方はしないということを認識しなければなりません。むしろその殺された難民が、これまでの人間に対する動物の立場であったということも。

何度も言うようですが、神の目から見れば人間は決して特別なものではないのです。動物のうちの一つの種にしかすぎません。

知らない方々、小さな猫を見ても殺されそうな悲鳴を上げて石を打ちつけかねまじい愚かな御婦人方（情ないことに子を持つ若い母親にこういった人が多いのです。その子供がどのような育ち方をするかは火を見るより明らかです）にお教えしますが、動物にも心があります。言葉もあります。動物に愛情を感じたことのない人、親身になって世話をしてやったことのない人や、動物を「畜生」として人間以下に見做す宗教に毒されている人には判らないことですが。

動物もそれを知っていて警戒心を持っています。野性のものほど手なずけるのには根気が要ります。その代り信頼を得た時、動物ほど人間の優しさや愛情に敏感で繊細な心の表現をするものは人間の中にさえも数少ないことが判るでしょう。彼等は身体でそれを表現するのです。尻尾や目、耳、身体全体、そして鳴き声です。語彙というものを持たないのにどれだけ多くのことを表現することでしょうか。〃愛らしい〃というのは、動物が人間に彼等の言葉を伝えようとする時のための形容詞であるかのようです。〃純真な喜び〃というのは彼等のためにあるかのようです。人間は自分達の子供からさえこのような素直さを奪うことの出来る、唯一の非情な動物であることを反省しなければなりません。

そのように、自分達を越えて他の動物や植物の性質、特質、生活史にも殆ど関心を持たず、心の自由を持たず、人間同士の互いの我欲のために幸せだと感じる余裕もない〃種〃が、人間としての価値を持ち、真に〃万物の霊長〃と己れを他に認識させるには、何をなすべきでしょうか。どのように生きるべきで

しょうか。私達は答えをいつも与えてきました。

恐竜一億年。人類は地上に一体どれほど生存出来るでしょう。その歴史は二百万年ほどしか経っていないのです。

つけ加えておきますが、天上界では動物達の哀れな生涯を経たものは菩薩界に住み、誰にも二度と脅されることなく平和に暮しております。動物にも生存権や平和に生きる権利があることを人間に教えるためです。勿論人間一人一人にも生存権と平和に生きる権利があることは言うまでもありません。

共産主義者は自然の法則をあらゆる点において破壊し、踏みにじり、ソ連という強大国の支援に勢いを得て、第三次大戦の危険をもはらみ、〝毒性を持つ赤潮〟のごとく世界に広がりつつありますが、その大義名分は「搾取の絶滅」を目指すのであるとか。

それならば宇宙の法則に従って人間が絶滅しなければなりません。人間自体も他生物から「搾取」し、植物から「搾取」して生きていることを忘れたのでしょうか。学んだことはないのでしょうか。例え人間間の搾取を絶滅したと思っても、その次に自分達が自分達の作った政府や国家にとって「搾取」の対象となるのを知らず、またそのルールも無視するならば、国家全体が崩壊せざるを得ず、彼等は地球上において法律に束縛されぬ暴徒の群にしかすぎなくなるのです。

他者への愛を忘れた宗教徒と、人道を説く者、正道を唱える者をひたすら殺すことに喜びを覚え、破壊することが正義だと、自分達の残虐非道なやり方を当然であるかのように振舞う社会主義国家と共産主義者達――私は恐竜が生存し、闘争をくり返していた時代に今直面しているような錯覚に陥らざるを得ないのです。

パヌエル

動物愛護について（二）

八月号のメッセージに関連する話題として一カ月遅れてしまいましたが、八月四日土曜日に千葉県君津市において起った怖しい事件についても触れておかねばなりません。これは寺の住職に対する住民の反感から起ったことなのです。人間の感情に哀れな幼い動物が犠牲になりました。

覚えていられる方も少なくないと思いますが、某真言宗の寺で観光用に住職が動物舎を作り、次々と動物を飼育していました。いろいろな事があって飼い変え、最近は雌雄のトラを飼い、子供も十頭生れ、生後一年ばかり経ったところでしたが、それが二日夜、誰かの悪質な悪戯で動物舎のカギを開けられ、子トラが三頭共家人の気附かぬ間に外に出て、一頭は直ぐ帰りましたが、残りの二頭は附近の山中を歩き廻ったらしく、翌日から大騒ぎになって探したのに帰ってこず、遂に警察に助力を求めて大がかりな捜索を始めました。

そこ迄はよかったのですが、トラと聞いて附近の住民は震え上がり、千葉県の警察は機動隊を結成し、消防団員を呼び、猟友会というハンター・クラブの会員に依頼して、凡そ八百人の銃撃・捕獲部隊を動員した結果、オリに帰ろうとしてこの物々しい有様に驚き、二日間何一つ口にせずに逃げ廻った空腹の、しかも人に飼われていてトラの獣性もまだ目覚めていない子トラを散弾で射ちました。メスを崖に追いつめて射殺したのです。最初五米の至近距離で狙いをつけた時に子トラは逃げようともしなかったと、仕止めた安藤某というハンターは得意気に語り、四人が同時に射ったのですが、後で〃大任を果した〃と祝杯を上げたとのことです。

このトラを知っている近所の母親や子供達の〃殺さないで欲しい〃という何人もからの嘆願がありながら、まるでオリの中の動物を殺すように追いつめ、発見時に住職に知らせもせず、麻酔銃が二本あったそうですが使い

もせず、誰も彼もが恐怖のあまりにただ、射殺に専念したのです。野生のトラでもなく、誰一人傷つけられた人は居なかったと言うのに。滑稽なことにトラではなく、クマンバチに刺されたハンターが呼吸困難を起したとのことです。

オスは逃げたので弾が幸い当らず、しかしなおもオリに帰りそびれて（飼主側の住民の非難に対する遠慮と、あまりに多くの武器を携えた人々が歩き廻り、足跡を探して廻ったがゆえに）、既に五日目を迎えました。その間、専門家の意見もあり、殺さずに捕獲することを最後迄考えるべきであったと忠告を受け、やっと計画を変更し、餌によってオリまで誘導する方針にしたとのことでした。そして七日には、しびれを切らした千葉市長が、ハンターでも何でも出来るだけ動員して人海戦術で山狩りを行い、射殺するように指令を出したのです。事情を知らず、トラは殺すべきだ、との単純な考えの持主なのでしょう。

私達天上界の者にはただ言うべき言葉がありません。私に取ってはこれは功に逸り、動物を殺すことに慣れた、狂気のように動物を殺したがるハンター達の暴挙としか思えず、動物について殆ど無知である人々の、ハンターだけが頼みになると考える軽挙妄動であるとしか思えないのです。

動物がいかに大型の猛獣であっても、人間に飼われ、餌をもらい、子供である間は、飼主は親に次いで信頼すべき人なのです。可愛がっている人であれば、飼主はその動物の性質をよく知っています。住民は他の動物のことで迷惑を掛けられたと興奮し、寺側の言葉を信用せずに〝早く殺せ〟と警察に談じ込みますが、しかし何も知らない子トラが住職への反感の為に殺されてもよいということは絶対にありません。非は一方的に人間の側にあるのですから。

そして母親や父親、兄弟達の顔を見ることも出来ず、メスの子トラはその上に、飼主や附近の可愛がってくれた子供達の愛情と、ハンターの殺意を区別出来なかったのです。この年齢では（人間にすれば中学生か高校の一年生位の）人間の子供の方がもっと自衛の本

能を持っていたでしょう。飼主が居ることを知らなければ、その動物の性質が判らず、人間が射殺するということもあります。しかし飼主が近くに待機していたのです。今度の場合は。愚かなことではありませんか。

私達が動物を可愛がり、その生命を大切にしてやることが正法に叶うことであると説明しても、一般に精神的文化のレベルの低いこの国では、動物の生殺与奪の権利は人間にあると思い違いをして、人間の沽券にかかわると内心思う人が多いでしょう。

いかに大型の動物でも、野生であっても、無闇に人間を襲ったりはしないものです。小動物に取っても彼等が満腹である時は警戒すべき相手ではありません。ましてや人間はこのオリに帰れないトラにただ食べさせる為だけに餌をまき、空腹にならないよう配慮してやることが出来たのです。飼主が一番にそれをすべきでした。オリに帰すことばかりを思いつめずに。人数を集めて追い込めばおとなしく逃げ帰るというものではありません。野性の強い動物はペット用の小動物より遙かに警戒心が強いのです。猛獣の習性もよく研究せず、トラを観光用にただ飼うのであれば、いっそ飼わぬ方がよいのです。

里にエサを求めて降りてくるクマも人間は殺すことしか考えない。自然破壊の為に、エサ場を失った鳥が、群をなして人家の近くにやってくると殺すことが解決だと思う。日本はそういう所なのです。米国ではそういった場合に新しいエサ場に集団移動をさせ、動物は麻酔銃で捕獲して移動するのです。これを動物の保護計画と言います。人命軽視の国であるソ連でさえ、小型のクマをペットのように飼いならしてサーカスで種々の芸をさせ、人間と融和しているとのこと。シュバイツアー博士は蚊を殺すことさえいさぎよしとされなかったのです。動物は本性的に平和な心を持っていることや、人間の愛情に応えるのに敏感であることを彼等は知っています。日本ではマヤ子という象の脚に鎖をつけて連れて廻り無残な死に方をさせました。インドでは鎖をつけずに象が歩くのです。象の習性を知らない日本では怖れつつ文化の象徴として、

財産として飼いたがるのです。

動物虐待の習慣や（医学の実験でも外国ではちゃんと麻酔を施してやります。日本はそれほどの貧乏国ではありません。医科大学は多額の寄附を、一体何に費い切るのでしょうか。そういった所から医師の生命尊重の観念が薄れ始めるのでしょう）自然を大切にしない国民性を誇れるものと思うのは大間違いです。弱者を保護する気持のゆとりが出てこなければ、まだまだ人間とは呼べません。頭に知識ばかりつめ込んでも、精神面は動物の一種であってそれ以上のものではないということを認識しなければならないのです。

植物のように物を言わぬし、鳴き声も立てない種ではなく、動物は人間に身近かなものを持っていることはお分りでしょう。そして精神は幼児以上のものにはなりません。その無邪気な動物を可愛がるということは、親の子に対する愛情と同じ無償の、保護者としての愛なのです。それによって人は心のうるおいを学ぶのです。人は自己をのみ愛していては人格が円やかにもならず、深まりもしません。必ず他に愛を注ぐことが大切です。そして絶対の信頼を寄せる、裏切らない動物からの愛情は、人の心に安心と落着きを与えるのです。いつか新聞に、一知識人の発言として〝愛を語りつつ、動物を愛することを知らぬのは、愛とは何かを知らない人々である〟と報じてありました。これは意味深い言葉であり、自然との共存への第一歩と申さねばならぬ健全な考え方です。

日本人がこれを学び得なかったならば、ひとたび国が赤化されるや、カンボジアの赤色クメールと同じになるのです。愚かな国民性です。

ペットにはしたいが、大型の動物は人が恐がるようであれば、まず殺してもよい。人間優先である。その情緒と愛情の欠如した所から幼児を殺しても構わないという母親が作り出されてくるのです。

ラファエル

我等天に住めるは皆、
千葉の二頭の子トラの
非運に悲しみを味わうものなり。

この末法を証するかの如く、
社会主義国家の犠牲となりし
インドシナ難民の
世界による非人道的処置と
時を同じくして、
日本国は国家の権限をかざして
動物虐待、生存権無視の方針を
打ち出したり。
ドバトを狩猟鳥とし、
その生態を知らずして、数多きがゆえに
羚羊(かもしか)を狩猟解禁とし、

保護区さえも監視者を置かぬに等しく
密猟者の餌食となす
動物殺戮(さつりく)の方針を打ち出したり。

それに和する文化人、知識層、
自からの生活の権利のみを主張する
心なき国民の非情さよ。
彼等は自からの妄想と
ヒステリー的集団心理に
踊らされるを知らぬなり。

ああ古えのこの国は、
一輪の花、一匹の動物、
一羽の鳥の生命をも
愛(いと)しく思う優しき民であった。

健康な心の民であった。
一茶や良寛などの優しき僧を慕う、
心穏かな人々であった。
いつの時からかサタンの黒き手に導かれて
この国の人々は、
自からを〝至高の種〟と称え、
地上の生あるもの、草木や花、鳥達、
小動物から大型の動物、
人間以外の生きとし生けるものを
踏みにじり、殺害し、
原始の時代にも曾て見られぬ、
傲慢の徒と成り果てた。
彼等に平和は無く、
彼等は只、力を誇り、
強者として君臨する支配者の権限と、
心の荒廃をしか示さぬ。
心のみか、自然の法に照らしても
人類以外の種の絶滅、
天敵の減少は、
やがては公害の反復と人類の滅亡となり、
目に美しく、心安らぐ自然と、
悪と謀りを知らぬ幼な子の如き

動物界との触れ合いを失うことは、
力を誇る人間間の争闘の引き金となり、
世界の滅亡となるであろう。
猛獣を飼育する側の責任を
問う気持がエスカレートして、
闇に迷い出でた哀れな子トラに
野生の猛獣とて人を襲わぬ
その性質を知らず、
忠告を聞けども聞かず、
人口の密集せる都市ではなく、
原始林と見紛う深き山々にトラを追い、
数を頼みてトラ狩りに秘かに心踊らせ、
横たわりし若き哀れな生命に
〝万歳〟を唱え、無事を喜び合う。
千葉県鹿野山の人々はその愚さと
非情とエゴイズムにおいて、
悪魔の心しか持たぬ。
平和を愛し、自然を愛し、
事の理を弁えし、
優しき心の人々と
純真な子供達の訴えを

斥けて引き金を引く警官とハンターに
幾分の理ありや？
〃動物に心なし。
人間は極悪非道の者でも
その生命は千金の重みあり〃と断ずる
この国の法と国家とは何者ぞや。
その法に和する国民とは何者ぞや。
彼等は〃心〃とは何か
果たして知る者なりや。

ああ我等天は失望せり。
日本国という地獄の魂に失望せり。
戦いなき平和な日々において
彼等の非情で己を神とする慢心は、
全体主義であろうと
自由主義であろうと、
変らぬ劣性の国民性を呈するものなり。
即ち病的心理構造と感情的選択が
この国の法を定めるものなり。
彼等は〃神〃とはどのような心を
持つものか
知るものであろうか。

我等神と呼ばれし天なるものは、
一人として彼等と質を同じくするものは
無きを知らぬなり。
彼等は天と縁なき衆生であるを
知らぬなり。

ガブリエル

人類の生存について、あるいは既成の思想、宗教、道徳について、何らかの危機感を抱いて生きている人は多いでしょう。明らさまに危機だから改心せよと宣告する宗教教祖も多いでしょうし、あなた方の中にもじっとしておれぬ思いの人もおりましょう。

ですが、まだまだあなた方のように恵まれた環境の中に於て、危機を語るのを見ると、井の中の蛙大海を知らず、とつぶやかざるを得ません。さあ人類の危機だ、私が何とかしなければ、と立ち上る教祖、それにつづく信者を見ると、平凡な生活の中で変った刺戟を求めて集まった、実際の救済とは縁もゆかりもない現実逃避の人間達だと思います。

実際に危機が訪れようとしているのは事実ですが、天変地異が起り、人間の獣性のみがはびこるような本物の終末が訪れたとき、まず最初にいなくなるのは、信者の上にあぐらをかいている諸教祖でしょう。

あなた方の中に、使命感を抱いている人が恐らく沢山いるでしょう。ですが、その使命

感が天から来たか、それとも自己の現実に対する逃避か、みわけることが大切です。それによって、悪霊に操られ、結果的に天に反する言動に走ることも防げるからです。

まず終末が来そうだ、人々は怯え、互いに疑いあっている。そのときあなたはどうするか。人々の前に立ち、指導者の如く振舞おうと思いますか。自分の先行きのことより、家族や友人、知人はどうしているだろうか。彼等は大丈夫だろうかと、とっさに考えますか。

正しい使命感の芽生えは愛が始まりを告げます。前者の如き人は諸教祖の二番煎じであるに過ぎず、後者が天から来る使命感なのです。

天の使命というのはとても地道で、現実に即応したものであり、決して夢の如きぼんやりしたものではないのです。そして誰もが持つべきものなのです。

世を変えてゆくのは一人の偉大な万能のメシヤではなく、「こうしたい」と望む一人一人の全人類なのです。

（口述筆記　土田展子）

ガブリエル

今月は善意の嘘と悪意の嘘についてお話ししましょう。

善意の嘘とは人を救う為、人を慰める為、人を傷つけない為につくもので、英語では"white lie"と言い、医師などが患者によく用いる手です。それによって周囲も自分も傷つかず、互いの調和や平和を乱すものではなく、反ってそれを生み出す為のものですから〝善意の嘘〟と言われます。

その反対に悪意の嘘とは究極的には破壊を齎(もたら)す有害なもので、他への思いやりではなく、自ずからの立場や利益や名誉、地位、財産を守る為には他を傷つけても、陥(おとしい)れても、それについては心を痛めないという、虚栄の心とエゴイズムの産物でしかないものです。このような嘘からすべての悪が生まれ、世を破壊していくものです。

そしてこれこそが悪魔に魂を売る堕落への道、消滅への道へと導くものです。抜き差しならぬ立場に立たされても、自らを守る為の自己保存の嘘で言い逃れを計るのは止めまし

ょう。それを始めるや否や、あなた方は天から後じさり（後退）を始め、遂には背反の曲り角へと追いつめられていくのです。

すべての反逆者、消滅宣告者もこの道を辿りました。よく心して毎日を過ごして下さい。

勿論、今私は正法者間と天との信義について述べているのです。正法者でない外部との接触は、正法を守る為に追求を避けて、善意の嘘をつかねばならない場合もあり、それは認められています。

何の警戒も必要でない正法者同志で、先程の悪意の嘘が頭をもたげてくる時に危機が訪れるのです。

魂の修行の為に常に自ずからを省(かえり)みて人生を歩んで下さい。これを忘れることが魂の堕落の始まりであり、修行の挫折の第一歩なのです。

ラ　グ　エ　ル

新年になりました。人それぞれに思うこと、喜ぶこと、憂うことがあるでしょう。

天上界の思うことは、地上に生きるあなたの平和であり、

天上界の喜ぶことは、苦しみ多き中にあるあなたの内の平和であり、

天上界の憂うことは、あなたの住む小さな国の外の争いと、自らにもふりかかりつつある争いに対してなす術を誤って敗者の道を選択しようとしていることです。

本来、防衛と平和運動は同義でなければならず、力で押してくる者に智恵で勝とうとするのは、相手が戦う武器を持たぬ愚か者の場合にしか通用しません。平和を願い求め、自由を享受しようというのならば、その根底には自国の独立と主権を命がけで守る、という気概がなくてはなりません。自由も人権も、かつては同じように守るため得るために戦ったはずです。防衛が平和を守る運動であるのです。守る、ということは襲い来る災難や何者かの侵略、攻撃に対して、何らかの対策を講じ、崩す者が来てもこたえぬ準備をすることを指すのです。それなくして如何に災害と敵から身を守り、家族を守り、国を守り得るでしょうか。

人一人の人生に於ても、赤子のままの心で成長したなら、如何なる人間になりましょう

か。求めるばかりで与える人間とはなりますまい。天上界が赤子のような心で、とたとえるのは、その姿勢であって、決して無知を言うのではないのです。生まれてから成長の過程に於て知ることが多くなるにつれ、悩みや苦しみも増してゆくその中で、悟りを得るものです。悟りは、とらわれに対する経験から生まれた防衛なのです。

武器をもつことは、殺人のみを意味しません。守りのための武器があるのです。天上界の善霊と暗闇に棲む悪霊の戦いも、悪霊は善きもの美しきものを滅ぼそうと動き、善霊はそれ等を守るために武器を以て戦うのです。悪霊の狙う善きもの美しきもの、とは地上に生けるあなたがたの心の内にある善や自己犠牲、正義の観念なのです。天の正義や善は純粋なるが故に暗闇の中でも貫くような光を発しますが、あなた方は生きているが故に、魂と同じく、善きものの心は磨かねば、磨き続けなければ光らなくなるのです。良き魂を持った人でも心の醜い人間の中におれば、やがてはそれに染まるのと同じなのです。

悪に対して無防備、無抵抗で、神の裁きを待つ、というのでは、いつまでも地上に神の国の平和は来ないでしょう。神が裁いて下さる、と安易に問題を考えてはならないのです。

（口述筆記・12月9日・土田展子）

パヌエル

最近特に感銘を受けたことをお話しましょう。先日テレビチャンネルの一つで、世界で数少ない、残された自然の動物王国の中で、南米のジャガーの王国というのが取材され、南米特有の動物の生態が実録、放映されていました。

その一コマに、年若く見える一匹のジャガーが餌を探して歩く場面がありました。野生のイノシシやバクやカメで失敗した挙句に、親の側を離れてふと迷い出た子鹿を見つけ、たちまち攻勢に出たとたん、横合いから父親のシカが踊り出、気をそらせる為にゆっくり別の方角に走り、簡単に子鹿の代りにジャガーの餌食となりました。ジャガーに食べる物を与えて、子鹿を生かそうという気持であったのでしょう。それは静かな悲鳴一つ聞こえぬドラマでした。

しかしここに人間が範とせねばならない自然の大きな智恵――種の保存の為に身を以て子を守り、犠牲となる親が動物には実に多く見出されるということです。そして彼等はそれを当然の事として少しも自分の犠牲について過大評価しない。後に残された母親あるいは父親あるいは子供は、悲しみを黙って耐え、自然の掟に従って己が生命を生きていられる間生かし、種の存続に役立てる。

これと同じ事が人間の世界に起こればどうでしょう。社会は人の〝鑑〟として讃辞を惜しまず、当然視はしないでしょう。それ以上

に子を敵から守ってくれぬ親、動物でも下等な部類に属する親が増えているのです。子もそれを学び、己の生命のみを大切に思う大人に成長します。そういった親は、子供が赤化教育を受けようが、非行化しようが、精神病院に入れられようが、世間体のみを気にして、子の将来を憂うことがない。何が人間に取って敵とすべきものであるかすら判別することも出来ない、子供の人格を正しく育む方法も知らない、未熟で無責任な性格でしかないのです。

では動物は友人の為に世の為、人の為に生命を犠牲にして、それらを救うことが出来るかと問いますか。そこが人間の万物の霊長たる所以であると。

大抵の弱い動物（猛獣以外の）は集団で行動し、群に取って強敵が現れると、まずリーダーが敵の目を外らして群を逃がします。象のように大きな動物でも、傷ついた仲間が居ると、その周りに身体で垣を作って、敵の目から隠してしまいます。自分達が傷つけられる危険を覚悟なのです。

親に従順である子。極端な行為に走らぬ賢明な親。躾の行き届いた甘えのない生活。いずれを取っても現代の人類に欠けてきつつある徳です。動物に出来ることさえ人間が出来ないのに、何を以て誇りとし得るのでしょうか。

動物界に取って性の乱れはなく、近親相姦、乱婚と見えるものもすべてはいつ襲われるとも知れない生命の危険の中での〝種の存続〟の智恵なのです。それを動物と蔑むことは出来ません。然るに保護された社会で、人間は互いに何を馴れ合って堕落を容認しているか。古代において人類は、家畜の如くそれを不要な快楽であるとは知りませんでした。だから神は許し、教え導いたのです。これだけ知性の開発された現代において、まさか人々は種の保存の為に快楽を貪りたがっているはずはないでしょう。それを許容させようとする

社会の傾向ならびに声を大にして誘惑的言辞を弄する左翼団体は、マスコミも含めて逃れようのない罪です。極端になりつつある快楽的嗜好、傾向が愚行であり、自然に反し、不要のものであることを知らぬ現代人に天は再び教えねばならないでしょうか。ユーモアとそういった不健全な嗜好、傾向とは別物です。

動物に比べ、劣性であることの証明、即ち悪徳のもう一つは、殺戮嗜好、残虐嗜好です。動物は身を守る為に戦い、生きていく為だけに殺し、それを食う。人間はそれを快楽視している自分に気附かない。快楽の為に動物を殺し、人を殺す。古代人と同じく、現代の無知な人々（何を為すべきか、為さざるべきかも心得ていない）に天は再び判り易い言葉で教えましょう。〃種の存続の為に――民族、国の為に――戦うを嘉しとし、快楽の為に殺すなかれ〃。〃天は少しも人類を動物以上の優れた種とは見做していず、動物界でも下等なレベルの生き様をしか生きぬ恥ずべき人間が増えすぎている〃。〃人よ、謙虚に自然を見習え〃と。

キリスト教徒が頑なに〃神は万物を創造し給うた〃と主張し続けるならば、神、即ち私達は、劣性の種である人類を不要のものとして滅ぼし、あるいは滅びに任すでしょう。〃神はすべてを与え、また、奪い給う〃の言葉通りに。

（二月七日）

ガブリエル

怒りについてお話ししましょう。

天上界が何故、ゆるしの代りに叱責をあなた方に与えるのか、考えたことがありますか。神はいやすもの、何者をも救いたまうもの、と受け取り、何故天上界はこんなにも厳しいのだろう、お怒りになるのか、と疑問に思ったことがありますか。

もし、あなたがそう思うなら、正法を理解していない証拠です。正法は宗教ではない故に、安易に手を差しのべず、その代りに、叱責と忠告を以て自ら立たせようとするのです。

ユートピアをつくるのがその目的であるからです。それ故の共産・社会主義批判であり、厳しい消滅であり、妥協なき魂の研磨なのです。

神は、天上界は、義人は、聖人は怒らず、批判しない、と考えてはいませんか。善は悪と相容れぬ故に怒るのです。批判するのです。正しきを知る故に異を唱え、激しさを以て接するのです。善も悪もない、善も悪になり、悪も善になる、だから罰するのはおかしい、と言う者は、その悪に泣かされ踏みにじられ、殺された者を知らぬだけなのです。

何があっても怒らず、乱されず、心を平静

に保つのが正しいと考えてはいませんか。世を捨て、一人山間に隠居する仙人ならそれも良いでしょう。山紫水明に詩を吟じ、露を食べ、姿を消す術に身をやつす、そんな生き方なら、そのような心も持つでしょう。しかし、あなた方は、俗世に生きているのです。仕事を持ち、家族を養い、明日を思い、今日を暮らす人間です。社会に生きるが故に、平凡ではあっても、人類史の一ページ、片端に生きるあなた方なのです。一人では決して生きてはいません。目に見えるもの、見えぬもの、総てによって生き、生かされているのです。それならば、少しでも良い社会をつくってゆくことが、課題になるはずです。そのためには悪いことは悪い、美しいものは守る、正しいことは貫く、そんな姿勢が大切なのです。必然的に、正しくないものには厳しくするのが、自然な生き方と言えるのではありませんか。

批判をすると、何か円満さに欠ける人格であるかのように思われ勝ちですが、批判できぬ人は悪や不義に対して鈍いだけなのです。鈍いというのは気が付かぬということであり、自分もその中にひたっている、容認しているのだと言えるでしょう。社会悪と妥協し、そして社会浄化には関心のない人です。

あなたは、どうですか。

ラファエル

信じるということについてお話ししましょう。

愛するということと信じるということは同じ一つのものから出ています。愛は感情ではなく最上の理性のあらわれであるように、信じるということは無条件の服従を意味せず、心のうちに立てられた確信を言うのです。

神を見ずに信じるのが神への愛である、とイエス様はおっしゃいました。雰囲気のみでこのメッセージを受け取ってはいけません。神を見ずに信じるというのは、あなた方の人生と生活の中で、自分の心のうちに、他人の性格のうちに、〝神〟を感じ悟り、識るということなのです。神はいかなるものか、天上界とはいかなるものか。霊能者のみではなく、すべての人が識りうるものなのです。宇宙の法則は愛であり、神である。己れを犠牲にして他に尽くすのは愛の一つの姿です。何かを守ろうとするために行動するのが愛のあらわれの本質なのです。そのためにはもちろ

ん、深慮が必要です。正見正思、中道も必要です。そして愛とそれ等悟りの手段が一体となって人に備わった時、パニャパラミタが開いたといいます。義はここに正しい方向付けをなされ、神がその人に宿るといわれるのです。

信じることにより人は苦悩や懊悩から逃れることができ、又信義により互いを守り、保護することもできます。信義は苦悩や懊悩を超え、害や悪をうち負かすための防壁でもあり、建設的な考えをもつ者の精神なのです。

信じるというのは、内にこもるものではなく、それだけで外にむかって出ざるを得ないものです。愛がその人を善へと駆り立てるように、信もまた人を義へと走らせるのです。

（五月十六日　口述筆記　土田展子）

ガブリエル

ユートピア建設について、お話ししましょう。ユートピアとはどのような社会をいうのか考えてみましょう。犯罪も社会悪もない世界でしょうか。善意のみが支配する世界でしょうか。具体的に考えてみたことがありますか。天上界の現在の姿がユートピアなのでしょうか。

あなた方自身の心の内を省りみたとき、少しのくもりもない状態が続くということがありますか。おそらく無いでしょう。浮かんでは消え、消えては浮かぶ偽我に悪戦苦闘しているはずです。何故悪戦苦闘するのか、できるのか、それは正しきものを知るからです。これを魂の研磨といいます。

ユートピアもこれと同じです。社会の規範、常識が、正法となることを言うのです。狭い範囲しか見えず、限られたものしかわからない現身(うつしみ)ゆえに、判断の誤りもあるでしょう。そういったときに、正しい方向に修正できる健全な状態なのです。まさに、天上界とは、この意味でのユートピアです。

ユートピア建設は、あなた方が考えている以上にたやすくもあり、難しくもあります。

あなた方次第なのです。自己を省りみず他を助けるとはどのようなことをいうのか、その基となる愛はあるか、規律となる信義を持っているか、を悟ることによるのです。もし、あなた方が、天上界がついておられるのだから、と安心して生半可な認識によるのなら、ユートピア建設など何百年かかっても無理でしょう。あなた方自身が悟り、始めねばならないのです。天のため、人のために働く、というのは地味で辛く、報酬少ない、地上の価値感をもってすれば無に等しいでしょう。慈善活動でさえ即ち天につながるとも限らないのです。

天意を伝えるというのはそれだけで、皆の持っている影の醜い部分を日にさらすことであり、敵視されやすいのは御存知でしょう。ユートピア建設とは、その積み重ねなのです。辛く、厳しく長い道のりですが、本人に愛と正義と信義の灯がともっておれば、たやすいことです。その道のりは長くとも足取りはしっかりと、険しくとも身は軽いのです。

あなたには、その覚悟がありますか。

ガブリエル

理性についてお話ししましょう。

天上界の秩序、正しさは、愛と義からなっています。愛と義はどこから来るのか。透徹な理性による判断力から来ます。理性は如何なるものか。正しく認識しよう、あるいは理解しようという姿勢からなります。その姿勢の基本となるものは、やはり人の幸せのためにという愛、真理をとおすためという義なのです。理性と愛と義は表裏で一枚となる布のようです。

むろん最初から誰にでも備わっているものでもありません。偽我の多い人はそれだけ苦しまねばなりませんし、皆の幸せのため真理を求める人は見出すのが早いでしょう。

理性というのは血の通わぬ推測、氷のような心をいうのではありません。執着を捨てた感情もまた理性といいます。その意味で、理性の真の姿をとらえた人は、物事の本質、行末、過去をおしはかることが出来、しかもこだわることがありません。

義は理性の怒りであり、愛は理性の抱擁の姿です。

皆様も賢い目を養おうとするならば、物事の表層を眺めるだけではいけません。その底になっている考え、心情、思想は何か、何を欲し求めているのか、それから推測して未来はどうか、と常に考えねばならないのです。社会、共産主義思想、諸宗教を何故排撃せねばならないか、深く考えてみることが大切です。何故私達がそうするに至ったかを思い起こさねばなりません。

理性も愛も義も、一朝一夕に身につくものではありません。度重なる失敗と真理を求める姿勢、努力の積もった結果です。

（七月九日　口述筆記　土田展子）

ラグエル

人に依存すること、人に求めることから脱却して初めて、人間は己を知ることができます。

何故かお解りでしょうか。

あなたが心を許している人に頼ったり、求めたりするのは何故か考えたことがありますか。親に保護さるべき子供時代は別のこととして、成人してからも親に対するのと同じく求めるのは何故か。

何故心を許し開いたのでしょう。

心を開いたのは信頼できるからであり、信頼はその人の中に何か安らぐものを見出したことによって成立します。安らいだのは偽りや嘘のない真心の光によるのです。

そのような心の人に依頼し求め続けるのは先のメッセージにもあるように、求める者の心に真心の光をともす気がまだ出来ていない証拠なのです。

己を知るというのは自分自身のありのままの姿を認識することと、外の物に対し信義を持つことの二つを意味します。信義はゆらぐことのない信頼です。

何に対する信頼か。

それは自他の愛に対する温い思いです。あらゆるものの表面的な価値と私的感情を超えて、純粋に理性の指すところの行動と考えを優先させることです。それが万物の中の良きもの、大切なものを守り育み、強くする、終りなき法則なのです。

初めは、他人の中に見ていたそれらの長所を、やがて自分の中に打ち建て、そこからお互いに独立して正しく見ることのできる信頼関係が生まれます。

信じ合うというのは互いの心にある信義を尊重するということです。

ここが民主主義の原点であり、〃正法者〃と名乗る資格は、己を知ったときに始まります。まだまだ己を知らぬ人ばかりです。焦らずゆっくり見つめてゆきなさい。

（八月十日　口述筆記　土田展子）

ミカエル

奇跡についてお話ししましょう。

例えば、超能力のある者がおり、病をいやし、物品を移動させ、数々の不思議な現象を見せるとしましょう。あなたはその者についてどう思いますか。神のような人だと感嘆しますか。

また、非常によく当たる予言をする者がいたとしましょう。あなたはその者に従いますか。これぞ神の奇跡だと感じますか。

もしあなたがそう思うなら自分に問い返してみなさい。

病いがいえたなら、それまでの自分の苦しみや悩みがなくなったか、物品移動を見て過剰な欲求が解消されたか、予言が当って予言を聞くのと聞かぬのでは違いがあったか。

今はわからずとも数ケ月、数年先には、真に道を求める者は気付くでしょう。

否、と。

それでは神の奇跡とは言えません。神の奇跡とは救いを含みます。救いとは迷わなくなること、諸問題の解答を自己で見つけうることを意味します。愛と正義と信義と確立です。

そして汚だくと混迷の中にあり迫害と敵視の中で義をとおす者、愛を貫く者のことを神の奇跡というのです。

たとえ山を動かす超能力があろうと、人を救えなければ何になるでしょう。山はいつか自然に崩れてゆくのです。人一人救うのは超能力でも何でもない、愛と義なのです。

たとえ山を動かした者として史上に残ろうと、後世にはせいぜい幻のような夢を残す程度ですが、神の義をとおしたものはイエス・キリストのように、人々に指針を与え続けるのです。

あの方は地上に於て、病いをいやした聖霊の力で人々に救いを与えたのではなく、生命をかけた流布活動に真価があったのです。

その勇気を起こさしめたものが、奇跡と呼ばれる神の光です。

（九月七日　口述筆記　土田展子）

ガブリエル

使命感について、もう一度お話ししましょう。これは正法者となることに未だ決心の付かぬ人々へ向けての言葉です。

仮に天変地異が起こり、友人知人が数多く死に、明日の我身の行末さえわからぬということになったとしましょう。

あなたはその時どう思い、何をしますか。

曲りなりにも正法と天上界を信じていたのに助けてくれなかった、と天を怨み自暴自棄になりますか。わけもわからぬまま泣き続けますか。それならあなたは全く使命感がなかったと、天に答えをされても仕方がありません。

何のために正法を正法者が流布しようとしたのか、彼等の使命感はどこから来ているのか、もう一度確めてみなさい。

より良い明日をつくるため、皆の幸福のため流布に奉仕したのです。真理に心打たれ天上界に帰依し、皆に少しでも正法を知って幸福になってほしいと思ったからです。

それゆえに、正法者は、非常事態におかれた時、闇の中の光のように輝くはずです。使命感は勇気をとめどなく出させるでしょう。

どんなに困難な状況におかれても、人類が少しでも生き残っている限り、使命感は燃え続けるのです。正法者の役目はユートピア建設が成就されるまで、法灯をたやさぬよう伝えてゆくことです。

いかなる悲劇や暗黒の時代にも屈せず、天と地がつながりある限り、彼等の使命感は受け継がれてゆき、ともし続けられるのです。

使命感は、人間に対する愛の目覚めに他なりません。何とかして助けたい、守りたいと思ったとき、死をも越えることができるでしょう。死を越えるというのは、執着を完全に捨て去った姿なのです。

今すぐ、あなた方にそうなれとは言いません。ですが、厳しく難しい現在に於てはそれ程の使命感が必要とされているのです。

（10月11日　口述筆記　土田展子）

ミカエル

「正法者」についてお話ししましょう。

正法はこういうものだと理解した人は多いでしょう。では正法者というのはどういう人を言うのか、自分はそれにあたるだろうか、と考えてみたことがありますか。

メッセージを定期的に送り、あなた方が正法を理解するようにはなりましたが、集いの討議や話し合いの中で心を離れて言葉だけが交されている集いもあるようです。なるほど間違ったものは排さねばならない、悪にはゆずってはならない等、従来の業からは徐々に抜け出しつつあります。社会問題に関しても鋭い考察をするようになっています。

しかし一方では依然として自己の欠点をそのままかかえている人が多く、周囲の者が気付きながらも修正を促せない、促さないような状態の集いもいくつかあります。

心に熱意のない者の話は如何に内容があろうとも聞く者の心を動かさない。心に他を思う気持ちのない者の正法の話など少しの値打ちもないのです。

愛は気付くのにそう難しいものではありません。大自然の中に探さずとも、周囲の者の中には無くとも、自分自身が発火点となることが可能です。信義は古代の義人が遭遇したような迫害にあわずとも確信できます。正義は大上段に振りかざすものではなく足場を固めているものなのです。

それらを考えたことがなく、考えようとしないから、正法が理想主義だと片付けられてしまうのです。

「正法者」は一人だけの世界ではありません。正法者というのは、天上界との関係のみではなく、お互いの友情で結ばれるのが必要なのです。あなたはどうですか。

「正法者」というのは聖人君子になることではないのです。正法者が聖人君子を意味するのなら、ユートピアなど出来はしません。どういう意味かわかりますか。

あなた方に天上界が「ユーモアも大切です」と言うと、急いで笑おうと努める。そのような考え方が「正法者」らしくないのです。

（十二月九日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

柔軟な心についてお話ししましょう。

何ものにもとらわれない心とはどういう意味をもつのでしょうか。

今あなたが自分の心をのぞいてみて、どういう心になっていますか。

何ものにもとらわれないというのは、放縦や身勝手な心とは違います。あつかましさや傍若無人さを言うのでもありません。あなたは無理にやさしくなろう、強くなろう、厳しくなろう、善くなろうとしていませんか。

無理に、というのは、わけもわからずにしなければならぬから、という心からきています。これは偽我—本当の自分の気持ちでない気持ち—につながる心です。

何故無理するのでしょう。無理は続けると苦しくなります。正法にしばられているのは無理に〝正法者〟になろうとした人達です。無理して苦しんだ挙句、挫折するか、立ち直るかは、正法を続けている動機によります。

自己の完成のみを願う人は挫折するか、偽我を大きくするだけで、ユートピアを願って正法を続けている人は過ちに気付くのです。

無理して良き人となろうとする人は向上心というよりも偽我が先立っているのです。果して善行や義行は無理して行うものでしょうか。心からそうしたいと思い、行うもので、そういった心が天へと通じ、人の中へとつながるのです。

何ものにもとらわれぬ心は無理せず努力し続けます。おのおの人により程度も速さも違うのです。無理を続けていけば、心は硬くなり、判断力もなくなります。焦らずやってゆくことです。焦るのもまた偽我へとつながっていくのです。

ではどうすればよいのか、と思われるでしょう。誰でもこのような世界の状態では焦るのは無理ないと言うでしょう。

ですが、まずせねばならぬのは焦るよりも考えることです。地球人類が全員焦ってどうしますか。考えるのが大切なのです。

何を行うにしても、常にどの方法が一番良いか考えることです。

柔軟な心とはそういうものです。

（一月十日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

正法が科学であるということを説明できますか？

単に真理であるから何にでも一致する、と納得してはいませんか。それでは宗教団体の説明と同じです。

正法が真理だというのは何ゆえにそう言うのでしょう。科学的とはどういう意味なのでしょう。

真理であるというのは、あらゆる場合においても適用できるということ、すべてのことにつながってゆくことを言います。科学的というのは、その根源に何があるかをつきとめる方法を指します。

正法が科学だというのは、心の動きを解明し、何故そうなるかを探り、解決をめざすからです。〝救い〟とは迷わなくなることだと以前メッセージを送りました。宗教では一切の迷いと病根を、神にすがることによって放棄することを救いと言っています。それでは〝救い〟にならないことは諸宗教団体を見ればお解りでしょう。

正法がどこにでもつながる、何に対しても解決が見つけられる、答えがある、というのは、科学的方法によります。何故そうなのか、そうなるのかと考えてゆくからです。そしてその後どうするかを決め、努力してゆくのはあなた方自身の問題です。

また、正法だけで人生が成り立つものではありません。正法は科学であるということは人生の方法論という意味でもあります。正法にいろいろなものを通し、よりよいあり方、観方を見つけてゆくのです。

正法を宗教じみたものにしてしまうか、真理として活用できるかは、あなた方の認識に依っています。正法とは、そういったものです。

（二月十一日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

判断の基準は自然の中にあると以前申し上げました。

宇宙の法則が愛で、すべてのものを生かし、あらゆるものが生かされるもの、そしていかなるものにも終りがあり、終りの中に始まりが息づいている、この世界です。

しかし生かし生かされるというのは、殺し殺されているということにもなります。他に必要であるという必要性から、それは愛だとみなされているのです。

正法は宇宙の法である、それを悟れ、というのではありません。それを自己の中にどう生かすかが大切なのです。判断基準としての自然の法則も判断の基準としては原始的なものです。なぜなら人間は自然の中に存在するとは言え、自然とは一線を画した生物です。憎しみも喜びも悲しみもあり、それ故に愛を意識できる存在です。自然の法則をそのままあなた方の中に適用してしまうと弱者の存在など許さず、いかなる慈悲もない世界となるでしょう。

慈悲は誤り多い人間に再び立ち直る機会を与えるものです。むざむざ痛い目にあおうとしているところを救う心です。

宇宙の法則を体得し悟るのが偉大なのではありません。宇宙の法則をふまえて、どう役立てるかが問題なのです。

自然の中の人間の存在にとって、何が真理かということ、どう生きてゆくのか、その方向性は何か。人間は一人では生きてはゆけません。社会にとってどういったことが尊重されるべきか、こういったことも考えて、宇宙法則をとらえ直してみて下さい。

（三月十三日　口述筆記　土田展子）

ガブリエル

魂の研磨について以前に私は皆様に種々お教えしましたが、そのこととは別に今あなた方にお伝えしたいのは、正法者と一口に言っても色々な人があり、自らの生命を惜しむあまり、天の意にそむこうとどうしようと、隣人に自分を保護し、安全を計るよう頼んで廻るような人もおります。

それも自分のやり方がまずくてそうなったのには何の反省もなく、周囲の行動もストップして平然としているのです。そして又、周囲の頼まれた方もその人を庇うのが慈愛だと思い違いをして、天への信義について問うことは少しもしない。却って私達にも同様にしてやってほしいと頼んでくるのです。

私は皆様も御存知のように天上のメンバーとして一際厳しく、人の愚かを一々指摘し教え導くようなことはあまりやらず、その為人がつまずき、天王の叱責を受けるまで放置しておくのが常なのです。

しかし目に余るこの愚かな正法者の行動を天は決して見逃してはいないと明言致しましょう。その人の意を容れて、個人の為に天への義務と信義とを疎かにした隣人は、何と私達に弁明しますか？　流布活動の意義を忘れてしまったのですか？

あなた方の私達への忠誠は、天の意志も計画も挫折させて平然とするほど良い加減な浅薄なものなのですか？

こういった人達の日頃の大言壮語は、只表面だけ天にへつらう言葉にしかすぎず、何の誠意も真実もそこにはないのです。臆病なだけで次にはどうすれば良いかという案も智恵もない。いつも私達にどうしたら良いかと聞

きにくるばかり。依頼心しか育っていないのです。

天の為に生命を棄てようと誓った正法者も居ります。

生命を棄てるのは厭だからと流布活動も出来なくなった人も居ります。

そのどちらを私達は喜ぶと思いますか？

よく考えてごらんなさい。

私達は愚か者や臆病者を天に迎える為に地上に来たのではないのです。そのような者を迎えれば、悪霊との闘いに天はいつも苦杯を嘗めねばならず、サタン・ダビデとの戦いと同じ経過を辿ることになるでしょう。私達は信頼出来る天のメンバーが必要です。いついかなる時も、その勇気と智恵と行動力において。

これは女性の場合も同じです。素直であるなら、よく働くなら立派な正法者だと自惚れるのは本人の自惚れにしかすぎず、その人の愚かのゆえに正法活動に停滞を来たし、天に在っては悪霊の前に他のメンバーを危うくするような人は同じく、正法者と自称する資格もなく、天に迎える人物ではないのです。

くり返して言いましょう。臆病で智恵なく行動力なきことは、信義や正義や愛さえも自ずからの養分となすことは出来ず、従って天の求める徳を身に付けることが出来ないでしょう。それは、私達の無用とする宗教人、イデオロジストにも劣り、軍人や愛国者にも劣り、国や世界の滅亡を来たらす者であるからです。

（五月十日　口述筆記　千乃裕子）

ラファエル

今日は暖かい心と冷たい心の違いについて皆さんにお話ししたく思います。

何度も私達が申し上げていることですが、表面的な優しさは単に人前で身づくろいをする社交的な言葉の遊びと同じで、真に暖かい心の尺度とはなりません。時には優しい言葉も苦しみ、悩んでいる人、愛を求めている人の救いにはなりますが、真の優しさはやはり人間への深き理解に裏付けされたものでなければ、人の心を癒すものとはならないのです。ほほ笑みがポーズであってはならない、言葉が単に言葉で終わるものであってはならないのです。このような人は、いざと言う時は逃げて、あなたを救ってはくれません。

その優しい言葉の語る内容を分析し、突き詰めて考えていくと何か壁のような物にぶつかり、何が目的なのか判らない。迷路に入り込んでしまったり、会話から何も得る価値がなかったり、逆にあなたの同情や賞讃を求める物であれば、それはエゴイズム、ナルシズムの変形に過ぎないのであり、真に優しい思いやりから出たものではないのです。人の事を考えぬ冷たい心です。

逆に、言葉は少なくとも、ブッキラボウでも、厳しいものであっても、あなたへの理解が深く、魂を磨き、知性と判断を高めてくれるもの、あなたへの思いやりから言葉のないもの――それは他を益する優しい、暖かい心です。そして又、暖かい心は些事(さじ)に拘ること

なく、あなたの判断と思考と行動の自由を与え、正しい方向にあなたが向くのを待つ師の思いでもあるのです。時に愚かや甘えを鞭打つ厳しさも師の暖かい思い。あなたに期待しているのです。

しかしあなたの隣人が思考と行動を束縛するような厳しさを持ち、正しい方向も示さないような人であるならば、それは、エゴイズムとナルシシズムから来る厳しさ、ぞんざいさ、冷たい心の表れです。

お判りになりましたか？　冷たい心とはエゴイズムの表れ。そのような人は自己の偽我を指摘されるとますます防衛的に冷たくなるのみ。永久に天には来れぬ人。知恵も、三次元の社会をこぎ抜ける知恵しか身に付きません。言葉や動作の身づくろいの巧みな人は、エゴイストであることを理解しておくべきです。

又、理屈の為の理屈をこね、物事の表面的な理解をしか示さない人は未熟な知能かナルシストで、これも社会のリーダーとなるには相応しくない者。全体を見通せないで、一つの事ばかりに執着する者も同じ。暖かい心を持つに至らない、心を預けるに相応しからぬ人物です。そのような人々は避けて通るべきでしょう。

（七月十日　口述筆記　千乃裕子）

機関誌を通じて約五年に亘るあなた方への呼びかけと説話から、〝神を信じること〟と〝人を信じること〟は、正しく〝人を愛すること〟と〝神を愛すること〟が同質の物であるように、基本的には同じでなければならないとお解りになったでしょう。

ただ、目に見える人を信じる場合は、その信頼に応えて、具体的に信義を通してくれる人であるか、あるいはあなたを裏切るか、いずれかの場合があり得ますが、神を信じる場合は、悪霊であれば必ずあなたの信頼を裏切るとしても、〝目に見えぬ〟、〝言葉と法を主とする〟人格である所が、じかに接触して確信を得る、いわゆる対人間の信頼関係とは大きく異なる所があり、少なからず抽象的な概念となっているのです。

いかに霊能者を通して語ろうとも、あなたの五官に作用するのはその者の音声であり、その印象を主とするものでしかありません。神はその背後にあって姿を一般の人々に見せぬからです。

諸々の宗教宗派の神も同じ。教義・教典に現れる神の存在も背後にあって、個々に姿を現して、人間とは別の存在として人々の五官に訴えるものではないのです。

ミカエル

では、あなた方が〝神を信じる〟と言う時、神について何を信じると言うのか、それを今日私は改めて問いかけたく思います。

キリスト教においてはイエス様を神と等しく崇め、信仰し、仏教においてはブッタ様を、法華宗派は日蓮を、新興宗教はそれぞれの教祖を崇め、信じているのです。いわゆるメシアを通して、霊能者を通して〝神〟を信じているのです。説教者を通しての場合もあるでしょう。

この〝目に見えぬ〟神を信じ従うあなた方が、〝法に従うか、人に従うか〟と問われた時、一瞬たじろぐのは何ゆえでしょうか。

ある科学者が〝土田展子さんはお会いして知っているので信じているが、千乃先生はそうでないから信じるかと言われても答えられない〟ある人は（読者であるか、部外者である場合）〝天上界は認めるが、千乃様は信じているとは言い切れない〟と言いましたが、この相反するが如き意見は、いかにも成程と思えてそうではない、真に法を以て正法に従うタイプであるとは言えないのです。しかもこの人達は教祖や教

典、説教者を通じて各々のメシアを信じ、神を信じております。

イエス様にもブッタ様にも直接会ってはいないのに信じ、その教えを以て自らの拠所(よりどころ)とし、歴史上偉大とされる哲学の祖や、各々の分野の先達を崇めているのです。何を以て実際に会いもしない過去の人々を信じ、幻の如き出現以外に、誰も平等に三次元の世界で直接会ったことのない神を信じるのか。しかも千乃様を信じろと言われて当惑するのか。事情があってあなた方すべての前に姿を現さないから信じられないと言うなら、あなた方に同じく姿を現さない神も歴史上の先達も、信じるに値いしないのではないか——その上更に、あなた方の信じる神、即ち天上界が千乃裕子を擁護しているのです。それを何と考えておられるのか。

法を以て神を信じ、又、それを説いた過去の人をも信じるならば、法を仲介として千乃様を信じ、又、正法者が互いを信じるのに何の支障があるのですか。千乃正法を信じるから、それを信じるあなたを信じることが出来ます、と何故言えずに実際に会って語り合う人々の間にさえ背反の気が生じるのか。且つ千乃正法以外の教義にしか目を向けたがらない多くの人々が居るのか。

それは真に法を理解しているのではなく、神を信じているのでもなく、ましてや人も信じたくはない。疑うことに安住の地を見出し、人が集まって信じている振りをしているから、安全なのだろうという低い意識の人でしかない。あるいはその人々を何かの形で利用する、利益を得る。その目的があって従っているに過ぎない——ということのみに帰する。それがゆえに千乃正法を信じ従うことにより、何の利益も得られない、反って自らの過去の生き方を変えねばならず、それによる損失が大きい場合に、前記のような弁解と口実を設けて背反したり、近づかずに無視したりするのです。

このような人々は〝信じる〟とは何をどのように信じるのか理解しても居らず、〝愛する〟とは何をどのように愛するのかも知らず、〝天上界を信じる〟と只、口に出すのみ。実は神を信じると言う資格さえも持たぬ者です。

自らのみを信じ、人を信じず、諸宗教の形骸のみを信奉する米国及び西欧、中東諸国の人々、人を信じず共産主義の力のみを信じるソ連他社会主義圏の人々を冷静に見つめる時、互いを信じ、その信頼の上に立って互いを愛する心なくしていかに世界の平和も繁栄も、ましてやユートピアと神の国も地上に築き得るでしょうか。その実現はまだまだ遠いと言わねばならないでしょう。（その如く反省する言葉さえも持たぬ共産主義思想は、疑いもなく神からのものではなく、悪魔から出た思想に他ならないのです）

（八月二十四日　口述筆記　千乃裕子）

ミカエル

今日は〝姦淫するなかれ〟という戒めについて、真の意義をお教えしたく思います。

現正法は正しく私達天の法を介して、極端に走る思想や行為を戒めております。人間間の愛情が恋愛感情に発展する時も同様に、恋愛は自由であると思い違いをして、愛の溢れるまま何等理性でそれを制する努力をなさぬならば、それは一つの過ちとなり、悲劇で終わる場合が却って多いのです。

未婚の者同士でも、社会には制約があり、その制約を踏み越えても互いが愛を失わず、周囲もそれを暖かく理解し、受け入れるならば、誰も傷つくことはないでしょう。

しかし現実は、男女の考えの相違や心理的な変化が、自由な恋愛をいつも成功には終わらせないのです。互いを愛するならば傷付けぬこと。不幸にせぬこと。それをまず第一に考慮するものでなければ、愛とは言えず、一時の遊び、好奇心、欲望の満足の対象としてしか相手を見ていないことになります。

未婚の者の自由恋愛は〝姦淫〟とは言いません。しかしいずれかが既婚であるか、いずれかが配偶者を持つ場合、それは社会が許さぬものであり、お互いをより傷つけ、又、幸福な家庭を壊す場合は、二人のみでなく多くの人を不幸に突き落とすことになるのです。

現正法はまず第一に〝人の幸せを願い、思いやること〟なのですから、社会の制約が厳存し、お互いのみならず多くの人を傷つけるならば、愛がたとえ心の中に芽生えたとしても、自分で厳しくそれを摘み取らねばならないのです。

相手の幸せを願い、思いやるならば、自らの愛と良心、善我にかけて、相手を傷つけることは出来ないはずです。その意識がなく、エゴイスティックな愛を強要する相手は、勿論悪と見做し、斥ければ良いのです。どうしてもあなたへの愛を断ち切れない人は友人とすれば良いでしょう。人の幸せを奪う行為は盗みにも等しいものです。例え二人が合意しても、〝第二の死〟が裁きとして二人に与えられます。

しかし私達は、一旦夫婦となるならば、如何なる理不尽な言動にも耐えて、子供共々不幸と苦しみにあえぐ生活を強制する相手と永遠に絆を断つなとは言いません。真の愛が通じぬ、人間として価値なき人格に繋れて共に地獄への道を歩む必要はないのです。

いかなる場合も離婚を禁ずるという一部キリスト教宗派の戒律はサタンの束縛であり、人の苦しみはサタンの喜びそのものであるからです。（十月十五日　口述筆記　千乃裕子）

ラファエル

今月は義人でありすぎるゆえの偽我について考えてみましょう。自ずからに備わる徳の完全を求め、魂の研磨に励むことは良いことで、天は怠惰で無節操な人よりもずっと有徳の人を喜びます。

しかし度々私が説くように、あなた方は義に完全であって、落度なき完璧な人格を持つよう努めるよりも、人間性を学び、従って互いに寛容であろうと努め、思いやりという優しい気持ちを互いに注ぎ合う方が、より幅のある、心にゆとりのある人物に成り得ることを、ここで認識しなければなりません。

中庸の徳とはそれを言うのです。

悪を許さぬ心は正しい心でありながら、そこに疑心暗鬼という偽我が忍び込む時、病的に相手を悪と断じてしまうこと。相手のすべての行動を善意と寛容で観ずに、狭量と悪意で観て結論を下してしまうこと——悪いことにそれを正法者の間で行ってしまう傾向があるのを最近よく耳にします。そのような時、批判者は共に法を広めようとする同志であることを忘れているのでしょう。血祭りに上げられた人こそ災難。逃げ場もなく追い詰められます。

この疑心暗鬼という偽我は往々にして義人で完全主義の人物が健康を害した時に度々現れ、周囲を悩ます。正法者が追い詰めるのは共産主義という悪魔の思想であり、手段を選ばず、社会の規約のすべてを破壊してその主義を他に押しつけ、自ずからの権力を得ようとする共産主義者であるべきであるのに、少しでも弱点や欠点を見せた同志に猛然と飛び掛かり、攻撃をくり返すのです。

これを心理学者は被害妄想と呼びますが、そういった病的な心理状態に陥ると、同志が忽ち仮想敵国に見えてくるのです。過労が原因となって健康を害し、精神的な不安を高め、疑い深くなる——その時あなた方は充分に休息を取り、人の欠点も許せる寛容な心になった時、初めて自分の精神は健康を取り戻し、天の意に叶う正法者の在り方に戻ったと考えて下さい。俗に〝健全な精神は健全な身体に宿る〟と言うではありませんか。共産主義者の好む総括の手段は、仲間である一人の人間を多数が批判し、吊し上げ、二度とその屈辱を味わいたくないと思わせる効果を狙うものです。しかし正法者は決してそうであってはなりません。それは弱い者いじめの心理となん等変わらないからです。

義人の陥る偽我は、不寛容の悪であることをよく心して頂きたいと思います。

（一月二十四日　口述筆記　千乃裕子）

春の第一の月とされる今月には、自然は愛のプレリュードを奏で、希望に目覚めます。自然の魅力や恩恵にも無関心になるほど、現代人は自分の内部と外部の闘争に引きずられて、その上更に共産主義思想という、中世の暗黒時代を彷彿とさせる残虐な思想が、かつての暗黒を導いた無知な宗教思想と相まって、今人類の住み家を白アリの如く喰い荒し、その居住者の身体をガンの如く蝕もうとしております。

中世にはサタン・ダビデが跳梁し、無教育な人々を意のままに動かしました。それは私達天上の証する所であり、事実です。そして現代は、互いの闘争で生命を落とした後、共産主義者の亡霊が私達の手の廻らぬ領域で一団となり、ダビデに代って人類の賢明な成長を阻もうとやっきになっているのです。

何故、そのような悪が善との死闘を展開するまでに蔓るのか、それも自然の摂理であるかも知れません。しかしもしあなた方が真に天に住み、光の中に喜びを以て神との交流を求めているならば、神の愛で得る真の人間とは、純真な心を失わず、正しき主に素直に、自ずから神と等しくならんと努める人格であると再び助言いたしましょう。〝神と等しくなる〟とは何を意味するか考えてみることです。

身近な例を挙げれば、最近話題によく上る〝アフリカの狩人〟と形容される南アフリカの原住民の一種族、ブッシュマンの生き方であるかも知れません。彼等ほど自然の一部としての生活をよく認識し、動物や鳥や植物と共存の立場をよく弁え、公正で、謙虚で、神に敬虔である者はなく、その心の美しさは現代の奢り切った文明人から殆ど失われてしまったものであり、彼等の智恵は、なるほど幼いものであるかも知れないが、その心根は神の国に住むに相応しいもの。私達はどうしてもあなた方に求めてしまう姿なのです。幼稚で依頼心を強く、という生き方は必要なく、愚かでエゴイストで人に迷惑を掛けるのはブッシュマンにさえ居りません。彼等は無学なりに智恵を用い、精神は決して幼くはないのです。

あなた方文明人には一体、どのような教えがふさわしいのか、私達は時折判らなくなります。恐らく神を恐れぬ共産主義思想や、正しさの選択さえ出来ぬほど盲いてしまった宗教思想が、このように私達の求めるものとはかけ離れた現代人を創り上げたのでしょう。悲しいことです。

（2月15日　口述筆記　千乃裕子）

ラファエル

梅と共に耐えた寒椿がそろそろ春に別れを告げる頃、金木犀が芽吹いて桃花の盛りが桜の季節も間近と思わせ、暖かい大気が自然の循環に活気を与えます。人にも動物にも春は希望なのです。

その希望の春にさえ、ソ連や北朝鮮、ベトナムやカンボジアなど社会主義国の収容所に押し込められている〃良心的な人々〃に春は巡り来ず、冬の苛酷な日の延長のまま時が過ぎてゆきます。フィンランド然り、ポーランド然り、中国でさえも同じ事です。人は美しい物よりも醜悪を好み、正しい者よりも偽りの言葉や企みを良しとするのは何故か。恐らく美しさも正しさも知らぬ環境に育った者が醜くく偽りに満ちた対象をしか与えられず、より良き物を求める本能も育たず、暗く悲しい世界――即ち人の地獄を作るゆえでしょう。

共産主義教育を受けた者は〃良心〃を捨て去ることをのみ学び、その〃良心〃は陽光を求める自然界の生命の仕組みであることを学ばず、〃自由〃とはその陽光を求めて如何なる方向へも幹を伸ばし、地下には養分の水を求めて根を張る、〃生きることを許された自由〃を言うのであると知らず、〃生きる為に互いを抹殺し合う自由〃のみ与えられた、光なき世界に住む者。哀れな歪み育った密林の住人なのです。サタンの支配する暗黒の黄泉の世界です。

あなた方正法者も、正法に接することを喜ぶ読者も、決して彼等の地獄や密林が、自ずからの美しい自然と〃自由〃に満ちた光溢れる天の国と（心の中であろうと、実生活であろうとそれは同じ事）引き換えるに足る物と錯覚を起こしてはなりません。地獄とはまさに社会主義国の、虐げられた、〃罰されることを恐れ、それを逃がれる為にのみ我が身の行く末を思う世界〃なのです。サタンの配下である共産主義者であり、科学者であり、文化人の密林の腹黒き使者の偽りの言葉や夢を信じる時、あなた方はすべて良き物を失うのです。

社会主義者とてあなたの真の友ではありません。彼等は世の秩序や調和された社会を〃権力〃と罵り、それを破壊することが正義だと思い込んでいるからです。憎しみや怒りは共産主義者のそれと同じく、〃光〃とは何の関りもない、悪魔の意志、〃闇〃から出る物です。

それをよくよくあなたの友人や知人に話して聞かせて下さい。社会主義国の現状が彼等の言葉をすべて空しく、偽りの積み重ねにしてしまうと。宗教界の半分は既に彼等の術中に陥り、天と神を見失ったことも――。

（三月二十二日　口述筆記　千乃裕子）

ミカエル

今月は〝人を信じること〟とはどのような心構えであるかを、特に正法を信じ、学ぶ人にお教えしたいと思います。

人を信じることとは、その人の可能性を信じ、同じ正法を知る者として対することです。時には歪む事があっても、その心の中に飛び込む気持で忠告をすれば、必ず正しい道に戻ります。何故ならばそこにはやはり一般の人達や反正法的な考えの方とは違う、共通した真理への関心がある上に、人として天に望まれ、受け入れられる人格となろうと努めているからです。

ミカエル

人を信じることとは、やさしい心と同じ、寛容な態度でその全人格、言葉や行いを受け入れ、又、正しい方向に向くまで待つことです。勿論、忠告をしてのち待つので、その人の反省すべき点を指摘せずに待つことは無意味です。

賢明な人には穏やかに言葉を選び、はっきりと言わなければならぬ人にははっきりと。

しかし忠告や助言に対して反撥心しか湧かず、素直に受け

入れ難い独善的な人は、それ以上の向上は望めず、放置しておくしか仕方がありません。プライドの高すぎる人も同じです。助言に柔軟に応じ得る人はますます人格が幅広く円熟し、磨かれたものとなるのは言うまでもないでしょう。しかし勿論、柔軟なだけでいつ迄も賢明になれぬ者は、助言を真に受け入れたとは言えません。

また、人を信じるとは、疑いながらその言葉を聞くのではなく、真直ぐな心で受け入れることなのです。これは正法を知り、学ぶものとして心しておかねばならぬことです。

人が偽りを言い、騙こうとする時、それに気付くのは遅くても構いません。他の証言を得、あらゆる点から見て、あなたに真実を語らぬと分析的に証明し得た時、初めてあなたはその者を悪と断じ拒否すればよいのです。その場合には毅然として譲らずに。関係を断つことに未練を残さずに。

それまではお互いの善我を信じ、許し合いましょう。それがアガペーの愛です。

ただしこの助言は、正法や私達天の者に何かの御利益を求める人、あるいは天を無視するイデオロジスト、頑に天を見ぬゆえに、あらゆる人間の悪を容認して彼等の目的を果たさんとする悪魔の思想家には当てはまらないものです。

神を利用して益を得ようとする者、神を恐れぬ人格はサタンと等しくなれる心を持ち、サタンの業を行える者であり、またサタンの誘惑にすぐ陥れられる未熟な者です。あなたと接して変わらぬ人であれば、無縁となるのが天の望む所です。天においては消滅される者達です。

（5月15日　口述筆記　千乃裕子）

ラファエル

偉人と聖人君子と哲学者と凡人の違いをあなた方は知っていますか？

まず偉人とはその名の如く偉大な生涯を歴史に残した人であり、天才と同じく人が崇拝しやすいタイプの人物です。その偉業のゆえに個人の生活に多少の難点があっても、人は大目に見ます。

聖人君子とはその名の如く、個人の生活の場を感じさせないほど、居住まいを正し、隙なく、清涼で有徳の士であること。視野はやや狭く、だが真直な心と振舞いが一致する人物です。

反して、哲学者は宇宙普遍の理を探して、他のすべては眼中になく、ましてや個人の利害には一切無関心、世の常識や道理を逸脱し、むしろそれを望むかの如き人生を生きる人です。偉人や天才と通ずる所があり、しかも個人の野心や欲望のすべてを達観して、超越する性格であるので、しばしば世

に理解されず、受け入れられない場合が多いのです。共感する人間味がないという点で、変人奇人と見做され、実社会とは疎遠になるのです。

凡人は凡庸の世界と生活がすべての対象であり、目標であるので、己れの尺度で計れる物をしか認知せず、強いて理解し得るのは、すべての徳と道理に叶って、人間の域を越える精神の力を備えた、聖人君子のみであり、偉人、天才、哲学者は真の理解の外にあるのです。

従って、宗教家は聖人君子たることを目指し、世もそれを求めます。天上界、神々に、それを求めます。この点において、私達天上界の今迄の在り方や、神も人格を持つと説く私達の言葉が理解されにくいのでしょう。聖人君子とは見えない人物も居た。または居るらしいという点です。あるいはそれを神がよく理解し得るという所が不思議だとするのかも知れません。

さて、今述べた四人が四様の生き方、タイプは天の法、正法に当てはめるとどうなると思われますか？　私達の求める正法者、天上界の一員となるには、これら四様を併せ持つことが望まれるのです。賢者たることを最大の目標とし、凡庸も偉大も天分も、聖人も君子も、一つに偏らず、あなた方の人格に併せ持つよう努力して頂きたい。至難の技であるかも知れないですが、一箇所に止まらず、進化する精神とはそれを言います。

しかし勿論、知能の限界、才能の多様性から、自分が常に偉人や天才などに成り得ると過信することは禁物。己れの能力・限界に問うて謙譲であることが賢者としての条件でもあるのです。

（六月十日　口述筆記　千乃裕子）

ラファエル

今月は人間の心の中に一番根強く巣喰う偽我、嫉妬心について再びお話ししたいと思います。それは競争心や向上心にもつながるものですが、動物の社会に見られる首位争いの表れでもあるのです。人間も動物である以上、同じ動物的な本能が人間をボスの地位獲得に駆り立て、往々にして本人が気付いていない場合に自制心を忘れて、醜いまでの心情を行為として表すようになります。

背反の心も、私達や千乃様への反抗心も同じ。他の人の持つ物をねたみ、自分が首位の座を得たいと思う心に他ならないのです。

この嫉妬心は特に、相手と比べて自分が同等あるいは、自分の方が優れているのに不当にも下位に甘んじているという思い込みがある時、強く働き、自身の勉学や技能を磨くことによらず、短絡的な方法――即ち背反や反抗心、反撥する態度から失脚を願って悪口を触れ廻る。時には殺人という暴力にも訴えて地位の交替を計るのです。相手に落度がない場合は嫉妬が動機と活力となり、自分を相手が不当に扱ったと考える時、嫉妬の炎が復讐心に変わるのです。

このように嫉妬は破壊的要素を持ち、天のメンバーとなるならば常に自制しなければならない、マイナスの感情です。天には受け入れられぬ感情です。

また〝あのように優れたものを身に付けたい〟〝あのように智恵と判断力を備えられるように学びたい〟と羨む心から、競って向上する方がプラスになり、建設的要素を持ちます。

あなたの心の中に嫉妬心の存在を認めたならば、とに角自身の向上の為に学びなさい。その中にマイナスの感情は消失するでしょう。他人を蹴落として上位に昇進をと望む心はあなた方の俗世間には通用しても、私達には通らない考え方。魂の研磨の妨げにしかなりません。謙譲とは無縁の動物的な感情でしかありません。

嫉妬は誰もが持つ考えだから構わないのではないかと容認する意見は慈悲魔であり、正法とは何かを知らぬ者です。

（8月22日　口述筆記　千乃裕子）

今世界に騒然たる反響を巻き起こしている、ソ連領空内に迷い込んだ韓国の一民間機撃墜事件は、私達天上界にもその昔エル・ランティ様、即ちエホバ(ヤーウェ)によってモーセに与えられた、珠玉の戒律を感慨深く思い起こさせました。

〃汝殺すなかれ。〃とは何と素晴らしく、人間としての最高の戒めではありませんか。

〃汝姦淫するなかれ。〃

〃汝盗むなかれ。〃

〃汝隣人について、偽証するなかれ。〃

〃汝隣人の家をむさぼるなかれ。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼるなかれ。〃

また第一の戒めは、

〃汝の父と母を敬え。これは、汝の神、主が賜わる地で、汝の長く生きんためである。〃

全世界の共産主義・社会主義国の聖地であるソ連で、これらの戒めが、せめてもの道徳律として守られておりますか？全人口の$\frac{1}{8}$を葬り去って確立した革命政権により、支配されているこの国から、私達が現在までに得た正しい情報と資料では、この一つとして守られてはおりません。

また世界に十七カ国ある社会主義国ではどうでしょうか？残念ながら、暴力革命という手段を経た以上、一国として人間らしくこの戒めを守り得た国はなく、又、思想的に反対する者に対しては、想像を超える迫害と虐待と死が与えられております。

彼等に与えられた救い主、イエス・キリストを彼等自身で十字架に付けたユダヤ人は、その時以来、血に呪われ、天に見捨てられ、悪魔に操られて、全国家を崩壊、人類の滅亡を彼等自身の手で行うに等しい共産主義理論を編み出したのです。

私達はアブラハムとの約束を守り、サタンの企みの中をユダヤの民、イスラエルの血を守る為に導きを与え続け、メシヤを与えました。しかし盲いた者達がキリストを殺し、その為ユダヤ民族全体が苦難を与えられ、更にキリストを十字架に付けさせた同じサタンが、ナチスによりユダヤ人六百万の虐殺を行わせたのです。

今は滅びし同じサタン・ダビデが、かつて神の民に地上に神の国を築かせぬ為、地獄をこの世に作らせたのです。その為には、神の与えた戒めのすべてをまず捨てさせること。神の前に明らかでなければならぬ良心を次に。そして地獄の中に人類の苦しみと滅亡を備えたのです。

動物は種族の保存のために不必要な殺害を行わないのは、あなた方も知っておられるはず。

神の愛するあらゆる物と人を滅ぼし尽くす企みはサタンにしか出来ぬこと。血に染まる共産主義理論とその信奉者は、サタンに魂を奪われた呪われた人類なのです。

神は彼等に光も救いも与えないが、そこを逃れ出て、神を真に求める者には再び光と愛を、そして望みを与えることを天王である、私ミカエルの誓約としてあらゆる犠牲者に、ここに約しましょう――。

（一九八三年九月二十四日　口述筆記　千乃裕子）

ミカエル

昨年、六月頃から、水戸市のある石材業の方が、親切にも近隣の山から餌を求めて下りてきた八匹のタヌキの親子の餌付けに成功したニュースが、テレビで報道されたことがありました。所が八月から一匹ずつ姿を消し、怪しんで探すと、無残にも猟師がワナを仕掛け、県内のハク製店に売り飛ばしていたのが判ったそうです。今年の一月二十六日に某新聞に発表されておりました。

生命を尊び、慈しむ人々と、それをないがしろにし、奪う人々と——、無力な小さな生き物に暖かい愛を注ぐ自由世界の人々と——、幼児をさえ無差別に殺して、何の良心の呵責もない社会主義国の人々と——。

何と人間とは、その育つ環境に左右され、両親や教育者や友人、はたまた社会の影響を受けて、どのような性格にも成り得るものか。それを考え、認めることは、現在の世界の状況に鑑み、ただ滅びに至る末世への思いと予感に満たされるのみに終わります。

あなた方正法者もJI誌の読者も、先の事件についてどのような印象を受けますか？　生命を尊び、慈しむのは、単に動物に対してのみならず、人間にも当てはまるのは改めて言うまでもありません。特に非力の者や、病める者には（動物も例外なく）、周囲からの救いが差し伸べられていなければ、あなた方が、父母の愛と心遣いでもって優しい思いやりを注ぎ、救わねばならないのです。それは健康な者や自立出来る者の十倍の思いやりであり、愛でなければなりません。

あなた方は社会主義者でも共産主義者でもなく、生命と自由の大切さを学ぶ自由社会に生きる者ですから、人間としての価値は自ずからを犠牲にしても他を救うことにあります。しかも相手が価値なき者でも助けねばならぬ場合にも打つかります。生命を失う場合もあるかも知れません。一人一人が世界を救う救世主となり得なくても、せめて助けを求める人の生命を大切にし、救うだけの人間となってほしいと思います。〃友のためにその生命を捨つること〃とはそれを言うのです。

只、私達の教える事柄を覚え、議論の際の武器とするのではなく、〃動物より優れた人間の在り方〃とはどのようなものかを、せめて理解する位の賢明さを私達から会得して頂きたいと思います。それは人間社会の常識でもあります。私達と出会う以前から学んでいるはずのモラルでもあるでしょう。

正法者やJI誌の読者が反って、〃生きとし生けるものの生命は尊いもの〃であるとは知らず、今私がこう語って初めてなる程と思うようでは、あなた方は〃正法を学び、あるいは接している〃と言う資格さえ無いのです。

それを理解し、あるいは体得するまでは、人間としての価値さえなしと自ずからを反省し、生き方、考え方を改めねばならないのは当然のことです。

動物を哀れと思う心が、人間の生命を軽んずるようでは、強盗殺人犯や爆弾魔を重用し、破壊活動に利用しようとする左翼の過激派や、大虐殺を黙認し、奨励せんばかりの穏健派と何ら変わる所がないでしょう。（3月5日　口述筆記　千乃裕子）

第二章　「希望と愛と光」掲載メッセージ

＊各メッセージの後に表示された年月日は天上界の方々がメッセージを出された日であり、月刊誌の各号の表示ではありません。各号については索引を御覧下さい。

ガブリエル

追いつめられた義人が敵意と迫害に耐えながら暗闇の中で自らを支えたのは勇気を伴った尽きることのない人と神への愛でした。如何なる害にも屈せぬ魂の希望は義人の徳を高め、暗い闇の中に一人立ちなずむ者の足元を照し顔輝かせるために天より光が与えられました。希望と愛と光、この三つは意義に於ては皆同じであり、破壊の時代を生きる者にとっては目を閉じれば浮ぶかがり火でありました。平穏で邪悪な現代ではよくその意味が理解されず、真偽の程の見分け難い三つです。絶望に対し勇気をもたせるのは希望、耐えさせるのは愛、道を示すのは光です。時代がどれほど変り移ろうとも、人間が荒廃しようとも変らぬは何でしょうか。それは自分より他人のことを考え思うという愛と、明日はきっと良いにちがいないという希望、そして正しき人に与えられる天の光なのです。もしあなた方が自分の中に聖なる愛と希望と光を求めるならば義の道を歩き、未だ聞く人少なき天の声を伝えるため、動きなさい。

十一月二十九日

口述筆記　土田展子

ミカエル

一九八一年もようやく明けて、何か新らしい希望が芽生えそうに思ったのは昨年の暮のことで、世の中は私達天上界の意志とは逆に、愚かで頑固な鈴木首相、宮沢官房長官及び大蔵省の渡辺蔵相などに誤り導かれて、いまや社会主義国への地すべりを開始したように思え、大変残念でなりません。

あなた方は正法者や正法誌に関心を持つ読者ですから、そのようなことはよもや無いとは思いますが、もし社会主義国が共産党や社会党の宣伝のように〝人権尊重〟を第一義とし、〝労働者の権利と平等〟を第二とする理想の国家であると考えている人があるとすれば、ひとたび前記の二政党が政権を取るや否や（いわゆる連合政権でも単独政権でも）それがいかに大きな誤算であったかをいやというほど思い知らされるでしょう。

もち論そうなってから、現在の色々な自由が保障されている社会を取り戻すことは不可能です。

なぜならば、社会主義国とは、日本が以前にそうであったような封建主義に軍国主義と

独裁主義をプラスして、全体すなわち国の為には個人の自由も生命も全く保障されない、全体主義の仮の名に過ぎないからです。

36年以上も前に軍国主義が幅を利かせていた戦時中には、ニュース（報道）の自由は完全に奪われ、国の威信を保つ為と国の方針に従わせる為だけの偽りのニュースしか流されず、国民は政府の偽りの言葉にのみ喜んだり悲しんだり、自信を持ったりしていたのです。

その結果はどうだったでしょう。日本国民は国を失うにも等しい無条件降伏をしいられ、憲法も自国で制定できぬほどの屈辱を味あわねばなりませんでした。敗戦のショックで自信を失い、自己をそう失した日本人は36年目の今日もなお、自分が誰で、何をすべきか何を言うべきかもはっきりと自覚していない、一種の精神病のような状態なのです。

その混乱のつづく中で、ソ連のかいらいのような共産主義者が人々の狼狽につけ込み、自分達の力と権威を振う場所を得ようと悪賢く、悪智恵のすべてをしぼって徐々に精神、教育の面からの悪の支配を獲得しようと試み、その策戦は見事に成功しました。

敗戦後自己を失い、軍国主義の不自由な世界から急に自由を与えられ、それをどう処理していくのか判らぬままに、浮草のように自だらくに野放図に国民は過したのです。指導者を失った後、好き勝手なことが言えて、行える世界で、愚な羊の群のようにめいめいで好きなことをして生きてきた日本人は、組織的な共産党と社会党の陰謀の前にはやはり弱い者でした。

数多くの共産主義思想を持つ学生や若者達と共に、共産党の為に身を投げ出して奉仕する女性は、社会党の為に運動に身を投じる主婦も含めて、彼等の陰謀や野心を見抜けず、ただ、あやつり人形のように踊らされているに過ぎません。その上不幸なことに、踊らされていることに気付かず、生命を賭ける人が多い為にますます世間を惑わす原因となっているのです。

いま私達天上界は、しのび寄る環境汚染からの人類の滅亡を心配する前に、しのび寄る共産・社会主義の脅威を憂い、日本の変化を見守っています。

私達の心からの忠告に耳をかさず、日本の愚な政府という指導者はその権力を欲しいままに、一部の賢明な人々の意見に耳をかさず、国を亡す方向にばかり走ろうとしています。実際に走り出しています。

いま迄超大国米国のカサの下に平和と自由の夢を見ていた日本においては、本当にソ連が日本侵略を考えた場合、アフガニスタンのようにいかなる理由や口実を設けてもそれを実現するでしょう。また内部から共産党員が革命を起し、カルマル氏のようにソ連に援助を求めるでしょう。

その時、米国の援兵は間に合わず、日本全土はアフガニスタンと全く同じ形で赤い波にのまれてしまうのです。

あなた方がもし今日までの自由と平和を今後も永久に欲するならば、偽りの人権や平和や平等の呼び声に耳をかさず、この一年で一人一人が何が出来るかを真剣に考え、天の意志と愛を一人でも多く迷っている人々に伝え、その人々の目を覚まして欲しいと私は望みます。

国を失うのは私達天上界ではなく、三次元、地上に住むあなた方自身なのですから。

（口述筆記　千乃裕子）

今月は人の気持ちを考える、ということについてお話ししましょう。

人の気持ち。天上界メッセージや、講師方のお話しの中で、人の気持ちを考えるということが何度も出て来ますが、何故人の気持ちを考えるのが大切なのか、おわかりですか。

自分が大切だと思うように、相手も自分が大切である。だから他人も大切にし、気持ちを考えなければならない。これは常識です。さて、正法の本来の目的、ユートピアをつくる、ということを考えた場合、どうなるでしょうか。人の気持ちを考えるのは、自分の心を浄化するため、争いをして心を乱さぬためでしょうか。自分もそう扱ってほしいから相手を尊重するのでしょうか。八正道や中道が個人の悟りにのみ用いられ、自分の悟りのための手段であるなら、何の天上の教え、真理であるでしょうか。

ウリエル

自分を含めた隣人のために、悟りは開くものなのです。ユートピアは、個々の悟りの集合体ではなく、互いに努力して切磋琢磨しあい、悟ることにあるのです。人の気持ちを考えるうちに、自分の一面を知ることもあり、また、自分を知ることで人の気持ちもわかるようになるものです。

正法を知り、新鮮な感動とみずみずしさに心震わす時、それは既に、幾人もの先人達が試みた神の国の礎を、我も築かん、と心のうちに使命感が芽生えているのです。使命感は純粋に奉仕を意味します。ガブリエルのメッセージにあるごとく、正しい使命感は愛が始まりを告げます。

あなたは今、どのような気持ちですか、使命感を感じていますか、それとも自分の解脱を目指していますか。本当に人の気持ちがわかるのは前者の方であり、正しい人間関係を営むことが出来るのもこの人達なのです。

（三月二十三日　土田展子　口述筆記）

ラファエル

正法を知ってから何とか立派な人間になろうとして月日を経たある日、ふと気になりだす一つのこと。

「私は天上界の方から見て、どんな風に見えるのだろう」

これを考え出すと、何だかじっとしていられなくなる人が沢山いらっしゃるでしょう。天上界の方に限らず、千乃様や集いの主宰の方に対しても同じ気持ちを抱くことがありませんか。あなた方の中でも大部分の方は、自分が外からの目に対して「どう思われているだろう」ということが気になるのではないかと思います。

ですが、どんなに立派な人間になり、やさしい心、正しい考えを持とうと努力しても、「どう見えるか」と他人の目を気にしていては、とうてい無理です。自分の心の中におこった良くない感情、例えば嫉妬、ねたみ、うらみ、うらやみ、にくしみを、「みっともな

い、不細工、だからやめよう、いけない、きっと天上界の方が……」と考えて直そうとするのでは何にもなりません。

「どう見えるか」というのは「良く見られたい」という気持ちに言い変えることが出来ます。「良く見られたい」と思うことは必ずしも悪いことだとは言えませんが、時にあせったり、友人の能力に対して嫉妬したり、自分以上のものに出会った時、少なからずショックを受け「どうせ私など……」と思ってしまいます。

これも執着の一つですね。

立派な人間になろう、良い性格になろう、と自分に言い聞かせるのではなく、まずは悪いことをしないこと、やらなければならない毎日のことを気持ちよく片付けることから始めることです。

難しいことが言える、とか、何があっても動じない、とか、そういうのが立派で良い人間なのではないのです。

うれしい時に喜び、楽しい時に笑い、悲しい時には涙流して、辛い時には耐えることが出来る、というのが健全で素直な生き方なのです。

そして、そういう人が、ここぞという時に天上界の為に働くことが出来るのです。

（三月二十五日　口述筆記　土田展子）

ウリエル

天上界は人の心によって美しいところです。くもりない人々の集うところであれば、目のさめるような景色になります。高次に住む天使や如来もまた景色と同じく、浄化され、姿形を超えた美しさがあります。

天上界の美しさは、長い年月と多くの労苦と厳しい修業の積み重なった姿です。やさしさは鋭さを含み、暖かみは批判眼を備えています。自己中心的ではなく、相手の成長と幸福を願っての姿なのです。これを愛といいます。特定の人や物にではなく、ありとあらゆるものへの尽きることなく、飽きることない献身としなければならぬことをわきまえた心です。

天上界の人々は、特殊な能力をもって人の心を読み、導くのではありません。物事を見きわめる判断力に依るのです。もちろん、人の考えることは波動となって伝わりますが、その中に正邪を見つけるのは、この判断力なのです。判断力は死後、急に身につくものではありません。地上に生きている間に大方の可能性が決まるのです。

魂の研磨は、自己の魂にのみ必要なのではなく、死後も天上界の一員として建設の為に働くのにも必要なのです。生命あるもの、存在するものとして生まれてきたからには、自分が生きるように同じく、他をも生かす手伝いをせねばなりません。

天上高次の人々の姿形を超えた美しさとは、単に暖かさややさしさの現れではなく、正しさの姿なのです。この正しさとは愛、宇宙の法則を意味します。

（五月二十四日　口述筆記　土田展子）

ガブリエル

ゆるしについてお話ししましょう。

あなたは今までに、完全に人をゆるしたことがありますか。

忠告が嫌悪感を持たぬいきどおりから来るように、それができるのは憎しみという執着を持たぬ怒りです。

怒りが義から来るように、ゆるしは愛から来ます。人の求めるままに行うことではなく、足らぬところを補ってやるのがやさしさであるように、ゆるしもまた、後悔にではなく悔い改めに与えられるのです。

愛から出る行動は、人を立ち止まらせず、常に前へと歩かせます。この意味でゆるしはいやしとなるのです。

自分を見つめることさえ並大抵ではないのに、まして他人を自己の尺度で計ることなしに認識するのは難しいことです。あなたがもし誰かのことを怒ったり、心良く思っていないのなら、その感情が胸に黒くつかえていないか、憎しみを持っていないか確めてごらんなさい。その者が改心して良い人になるのを望むか、落ちぶれはててゆるしを乞いに来るのを望むか、あなたは前者を無理なく選べますか。

ですが、ゆるしは悔い改める者に無条件に与えられるものではありません。つぐないをせねばなりません。義の怒りが愛のゆるしへとつながるように、いやされたなら、自ら義人となって歩むようになるのです。

これを、目ざめたといいます。

（六月二十六日　口述筆記　土田展子）

ガブリエル

慈悲についてお話ししましょう。

愛が献身の姿をとってあらわれる時、憐みは慈悲の衣をまといます。

愛はその現われにおいて両極端な形を示します。執着なきものがアガペーの愛、執着の権化がエロスの愛です。

アガペーの愛が何故与える愛で、エロスの愛が奪うのみなのか、考えたことがありますか。

与えるとは如何なる意味か、奪うのみとは如何なるものか。与えるというのは文字通り具体的に何かを与えるということではなく、その中には待つこと、見ること、守ること、足らぬ所を補うこと、を含みます。それらをなした上で相手の中から良所を引き出し、長所を伸ばすことが出来るのです。そのような愛は留まることを知らず、必然性と適切さを

もって働き影響し続けます。自らもまた同時に成長を続けるのです。ちょうど宇宙の法則が破れることなく一定の方向に向かって運行しているように。

奪うのみの愛は、自己に対する不安から来ます。自己に安定した支柱なき故に、他に対して安心できるものを求める結果なのです。アガペーの愛は与える者にも受ける者にも何らかの支柱があった場合に調和と均衡をもたらします。

その支柱とは何でしょうか。神――、すべての執着や欺瞞を捨て去った形の真理を求め信じる心、少なくとも、醜さのない美しい交流や行為を信じることができる心です。そして行おうとする意志があることです。

安定した支柱なき者は、ザルに水を注ぐが如きです。

慈悲は憐みの心から来るものですが、それは重さや暗い涙を伴うものであってはなりません。慈悲魔と呼ばれる執着は人を最も愚かにします。奪うのみの愛が不安定な心から来るなら、無差別の慈悲はやさしい心からというよりも弱い心から来るものです。心弱さもまた、自らに支柱なき故にそうなるのでしょう。慈悲をかけすぎるのは、貪欲に人の愛情をむさぼる姿の裏の形にすぎません。出所は同じなのです。

あなたは、心に支柱がありますか。人を信じることができていますか。

（七月二十三日　口述筆記　土田展子）

ミカエル

愛を受ける方法についてお話ししましょう。愛は行おうとすることよりもまず、自分にそそがれている愛に気付くことからも始まります。

愛は決して派手なものでも一目でこれとわかるものでもありません。例えばあなたが絶望の中で手さぐりをしている中、あなたを照らしている光です。あなたを取りまく様々な人の思惑が取り除かれ、周囲にいたと思う者が去ってゆき一人残されたとき、あなたをみつめているひとみです。

自然の中にあるものがすべてそういった関係にあります。変らずそそがれ続ける陽の光、流れ続ける水、それらを受けて生物は成長してゆきます。天上界の守護もその形なのです。決して不要なことはせず、相手の成長にまかせ、必要なときに助け、自ら救いをみつけ出すのを待つのです。

もしあなたがそのような天上界の愛に気付いたなら、他にその喜びを伝えてゆかねばなりません。しみじみとした感動としみいるような幸福感に包まれたときでも、そこに安穏にひたるならやがては感動は薄れ、幸福感も去り、もっと何かほしいという執着が残るだけです。

常に何ものにも終りはありません。己れは何もせず他に対して求める者には始まりもありません。何かほしいと思う先に何かを与えようとしなさい。目に見えて特別に立派な善行をなさずともよいのです。

まずあなたは何ができるか。そこから考え、自分を見すえなさい。何ができそうだというよりも何をしてあげられるだろう、と考えなさい。

ユートピアは個々のそうした思いやりによるのです。正法流布もその精神が根本となっており、八正道もそれが基礎になります。

何のための修業であるかを忘れてはならないのです。

愛についての具体的な現われをあえて言うならば、安心すること、明日への希望を持たせること、大切に思うことであり、定まった地点ではなく、光へとのびる道を示すことです。

その道は義の道であり、信頼の道しるべのある天国への長く険しい道なのです。

（八月二十六日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

強さについてお話ししましょう。

強い心とは柔軟（じゅうなん）な心を意味します。何か悩みがあった時、解決策を見つけ出せたとします。その解決策を実行できる人は強い人です。正法にふれ、それまで悩んでいた問題の解決の糸口をつかみ、自己の欠点を直していこうと思い、社会を良くしようと決意するのは誰でもできます。ですが実行となると、なかなかできません。

自分の欠点を直すというのは、今まで自分が他人や社会に対して甘え、責任をもたず身勝手にやってきた行動と心根を直すことです。身勝手に行動するのは、その者にとっては楽です。自分のことだけを考えればよいからです。

長所と短所は裏表といいますが、何を基準（きじゅん）にするかおわかりですか。

他人との関り、社会との関り、もう一歩進んで他人を生かすように関っているか、社会をより良くするように関っているかが基準なのです。

自分の身勝手を直すには痛みがともないます。身勝手がひどかった人間ほど自分に対し甘いからです。そしてまた常に考えねばなりません。無意識のうちに行動しているからです。

しかし、それでも欠点を直そうと努力し続ける者を心が強いといいます。強さはねばりを伴うのです。

何故心強くいられるのでしょう。自己の醜(みにく)い部分に対して努力し続けられる人間は、一つの支えがあるのです。人格者になるのが目的ではなく、良き社会のための一人になるということなのです。

人格者になりたいという目的は、金持ちになりたい、美しくなりたいと努力するのと同じです。自分の内にこもるものです。それではいくら努力しても悟りは小さく、まっすぐ天の方向に伸びることもありません。

良き社会のための一人とは、人を傷付けぬこと、だまさない正直さ、傷付けられない、だまされない賢明さを備えた人間です。

何かのために、と支えがあると人は強くなります。

あなたが弱いのは自分のことだけにとらわれているからです。

柔軟な心とは、強さの中に他を思う気持ちがあるのです。

（九月二十三日　口述筆記　土田展子）

ウリエル

何かわからないことがある時、何故だろうかと考えます。

天上界から見ていると、人によって考える方法がそれぞれ違うのがよくわかります。

物事を好き嫌いで判断している人は疑問に対する解答も、正しいものよりも自分の好みに合うものを見つけようとします。独善的な人です。

一度、自分の判断の基準が何によっているか考えてごらんなさい。

判断の基準はその人の価値感とつながっています。価値感は生き方を意味します。

つまり、好き嫌いで物事を判断するのは、自分にとって有益なものだけに価値があるとする人で、自己中心的な生き方です。

正法者にふさわしい判断の基準は、自他を生かすか否かであり、純粋に精神的な強さ美しさに価値を求め、自分もそうなるように努力する生き方です。

ですが、判断ほど難しいものはなく、好き嫌いで判断を下す人間でさえ自分は正しい判断をしているのだと思っているのです。

ここに魂の研磨の難しさがあります。

魂の研磨は自分自身を見つめてゆき、つきつめてゆくことですが、日頃から優柔不断に考えている人、好き嫌いで判断する人は、なかなか研磨できないでしょう。なぜなら、研磨は自己の醜い部分をたたき直すのが目的ですが、先のような人は、自己保身のために好き嫌いで判断し、優柔不断に考えているからです。

おおむね、正法者といえど、この点は魂の研磨のすすまぬ人ばかりです。いつまでも自分は変らない、進歩しない、と悩んでいる人は自分の判断の基準をよく考えてみなさい。

自分を見つめるというのは、自分がこういう時にはこうした、ああ言われた時に怒った、泣いた、喜んだ、等のどんな反射系をもっているかをさぐることからはじまります。

（十月二十五日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

ものの考え方についてお話ししましょう。

反省を例に取るとします。

あなたは何故反省するのでしょう。美しい人格になりたいからですか。天上界に気に入られるためですか。悪いことをした、とやむにやまれぬ気持ちからですか。

反省は自分が何故誤った言動をとったか、良くないことを考えたか、を考え、次からそうせぬようにするためになすものです。

もしあなたが美しい人格になろうとして反省するのなら「悪いことをした」と思うだけ思って安心してしまうでしょう。美しい人格が目的だという人は他者とのつながりを考えず、自分をつくることだけに執心しているので「反省をしている謙虚な人柄」である自分で納得するからです。他者への配慮のない人故に、毎日をいくら省みても同じことをくり返し続ける進歩のない人です。

天上界に気に入られるため、守護霊を意識して反省する人はいつまでたっても独立した一個の人間とはなれぬ人です。何かの権威を感じて従うという姿勢もまた、他者への配慮なきが故に「悪いことをした」と思うだけで考えはしません。向上しない人です。

反省というものは、毎日毎日そうやたらに材料があるわけではありません。日常のほん

のささいな過ちなら一つ一つひろうと、健全な生活など営めません。

天上界が「反省」してほしいと思うのは、個々の「何度やっても直らない」という性格についてなのです。何故なら、あなた方の生活の中の悩みや対人関係における過ちも、そこから来ているからです。

それにはまず、欠点が他者に及ぼしている影響を真剣に考えることです。それには他者の人格、心をおもんばかることです。そうすれば、おのずと「やむにやまれぬ気持ち」になって、悪かった、もうすまい、と決意するでしょう。

いくら反省しても欠点のなおらぬ人、いくら努力しても賢くなれぬ人とは「やむにやまれぬ気持」が少ないからです。

あなたは一度でも、自分の利害に関係せず他者をおもって「やむにやまれぬ気持ち」になったことがありますか。

（十一月二十四日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

判断力についてお話ししましょう。

良い悪いと正しいまちがっている、の4つを区別できますか？　集いを廻っていて、意味をつかんで発言考察している人は滅多にいません。殆んどの人が、4つを混同しています。何故今回そう問いかけたかわかりますか？

正法に対する認識の中で、「良いものと悪いものをはっきりさせる」「正しいかまちがっているか判断する」といいながら、何がそれにあたるのかわからずにいる場合が多いからです。

良い悪いというのはおおむね個人の主観から出る場合が多く、良いものも時には悪く、悪いものも時には良くなります。長所、短所の考えに似ています。

では良いと正しいは同じでしょうか。

私達天上界が正しいとするものはどんなものでしょう。正しいというのは方向や姿勢を判断しているのであり、良いというのはその状態を判断していいます。

一見さしさわりのないいわゆる〝良いことを言っている〟宗教をまちがいとする天上界の見解がここにあります。正法的なもののとらえ方というのは、良い悪いではなく、正しいかまちがっているか、なのです。

真実と事実もまたそうです。事実が状態をさし、真実は方向や姿勢、性質をさします。

これらのことを判断できるようになるには、まず考えるくせをつけることです。今まで何となく思い浮かべていたことがらについて、人の評価について洗い直してみることです。

理性は生まれながら備わっているものではなく、育つものです。理性を育てるのは謙譲な気持ちと考える意志です。

だからといって、考えることや反省すること（いわゆる内観法に囚われること）ばかりに気を取られ、実際に行動する上での積極性と智恵に欠ける人は〝役に立たない〟ということを忘れないようにして下さい。生きていく上の、人生の智恵――パニャパラミタ――こそ正法者としても天の一員としても欠くべからざるものなのです。

（一月二十七日　口述筆記　土田展子）

ラファエル

自由な心についてお話ししましょう。

正法は宗教ではないというのは、悩みや苦しみを神に預けず自分で解決するということともう一つ、自由な意志によってなされるものであるという二つの点から成り立っています。

自由意志でなされるということは宗教のように絶対的服従によってユートピアを目指すのではなく、一人一人が〝ユートピアにしたい〟と心から願い、動く姿勢です。

何かに強制されるのではなく、自らすすんで歩いてゆくのです。

それ故に正法は縛るものではなく、解き放つものなのです。何をするにも自らやらなければ無理が出ます。そして自ら自己を魂の研磨にかけるが故に難しく辛いのです。

自由というのは義務と責任を負うての上のものであるのはこのためです。正法的な意味での自由とは他人の自由をも守る自由であること、つまり、自己の欠点や偽我を放置するものであってはならないのです。

自由な心と柔軟な心とはどう違うでしょうか。

ごまかそうとせず自己をみつめるのが自由な心なら、柔軟な心は他への理解の助けになるものです。となりの人に対して悪いことをしたとき、自分が悪かったと認められるのは自由な心、〝悪かった、もう二度としない、どんなにあの人は傷付いたろう〟と考え、謝まれるのが柔軟な心です。

（三月一日　口述筆記　土田展子）

ミカエル

慈悲についてお話ししましょう。

善人は憐(あわれ)み深く人助けばかりしますが、彼等が善人と呼ばれて賢人とならないのは何故でしょう。

慈悲は悲しみを共に感じることから起こっています。

この自然の中で人類だけが意識を持ち、慈悲を持っているのは、苦しみながらも生きてゆかねばならないことへの救いともなっています。

しかし慈悲はそれだけでは人を救うには至りません。憐れみという悲しみにとらわれているだけでは一時しのぎの人助けしかできないのです。

何をする場合でも一時しのぎでは、後から必ず破たんが来るように、人助けもユートピアづくりもそうです。何がそれにとって建設的なのか、を考えて慈悲をかけねばならないのです。

厳しさとは言っても、きつくするのや、むざむざ失敗しようとするのを放って置く、或いはしごく、というのとは違います。

直すべきところ、改善せねばならぬものを甘やかさず辛抱(しんぼう)強く見守ることです。

善人であるだけではユートピアづくりは難しいのです。賢くなければ悪らつな人間に頭からねじ伏せられてしまいます。

個々の家庭でもそうであるように、より良く生き、家族を守り、外からの侵入を許さないというには賢さが必要なのです。

厳しさのない慈悲は人をだめにします。賢さのない善は実らないのです。

（三月二十四日　口述筆記　土田展子）

ラグエル

今月は、私が代わってお話し致しましょう。
実は、今月はあなた方に、お聞きしたい事があります。それは、次のような事です。
一、天上界に於ける正しさとは、何だったでしょうか。
二、何故あなた達は、私達の下に集まって来たのですか。
三、私達天上界の真意は、どこにありましたか。
この三つの質問に対して、よどみなく躊躇(ちゅうちょ)することなく正しい解答を出せた人は、真理を求めている人達です。
しかし、だからと言って天上界が喜ぶと思われたのなら、大間違いです。
正しく答を出されたからと言って、実行がともなっているとは、決して言えません。
あなたの日々の生活を振り返ってみなさい。何と甘えた、自己保存の多いことでしょう

か。いつまでも他を頼り、自らは優柔不断であるにも拘らず、一端の正法者ぶっているだけでは、ありませんか。

天に唾している者と、何ら、かわりはありません。

何故、あなた方は進歩しないのでしょうか。何故、あなたを取り巻いている環境を、他人事ととらえておられるのか、私には理解できない反応です。

先日も、ナイロビで森林保護の為の会議が開催され、決議されたというニュースがありました。

いくら〇〇宣言、△△運動と、美々しく叫ぼうとも、かけ声ばかりでは何にもならないのです。あなた方一人一人が、参加し、実行するものでなくては。

自分の日常生活を、よく考えてみなさい。

あなた一人が一日生きて行く為に、どれだけ多くの犠牲と、資源が消耗されるかを。

正法、正法と知識ばかりを追いかける人間には、到底わかり得ないでしょう。

己が存在そのものが、原因となっている現状であることを。

何と厳しいと思われるでしょうが、いつまでたっても幼児的な精神でいる人々に合わせて、私達はこれまでのようには、待ってはおられません。

天の正しき法灯は、もうあと僅かの月日を残すだけとなった今は、どしどし苦言と叱責を与えたいと思います。

何の為でしょうか。あなた方は、自分の子孫に一体何を残すつもりですか。金銭ですか？土地ですか？　家ですか？

そんなものは、苦労をせずに得たとて、泡銭となり、なまじ資産を残した故に、骨肉の争いをするだけです。なぜならば、自己中心的な若者達なのですから、親の苦労など眼中にはないでしょう。現代は、そういう若者が大半を占めているのです。自分の家族には関

係ないと言い切れますか。

似たりよったりの問題を抱えて、青息吐息ではありませんか。この世的なものに価値があるとするならば、それ故に我が身を欲と執着の絡まった糸で、自らが縛られ、身動き出来なくなって行くのです。

私達の再三の警告にも耳を傾けず、相変わらず偽我を多く抱え、正法を学べど魂どころか、心さえ軽くならず、何をもってして己れを高しとするのか。

このような人々は、さしずめイタチごっこをしている自分の姿にも気付いていないのでしょう。哀れな人達です。

この世の俗的なものに、何ら価値はありません。

又、あなた方に望むものは、美しい天の波動に合う魂であり、悪と闘う強い意志を持つことです。この世の俗的な価値基準など、通用しないのです。

すべてに於て、真理を追求するに於て、汝自身を追求せぬという事は、理に合わないでしょう。

自分自身を知らずして正法を学んだとて、それは何の役にも立ちはしません。

あなたが悟り、あなたが正法を日々の生活の中に活用せずして、何が真理ですか。

私達の意とするところを、落ち着いて、よく考えてごらんなさい。

（五月十九日　口述筆記　谷田三枝）

第三章　正法とはなにか？

正法の歩み

千乃裕子

三億六千五百万年前にこの地球に飛来し、ようやくにして約一万年前より私たちの地球に住む人類の大半と、ベー・エルデと名づけられた星から来た霊達が合体し、ともに、現れては消える文明と、歴史の大河を浮きつ沈みつしてきたという驚天動地の事実を、私たちは知らされました。

しかし、私たち地球の文明は、ようやくのことに宇宙飛行士という特殊な訓練を受けた地球人が月世界まで飛行する技術を開発する段階まで達したに過ぎず、また、たとえ宇宙の法則を天文学者や科学者たちが次々と明らかにしてゆくとはいえ現代科学により観測可能な範囲で約百五十億光年。無限の広がりの中に大宇宙は一千億以上の銀河系星雲や星団を含み、その各星雲や星団の中に平均して一千億個の太陽系の太陽に比較し得る、あるいは、それ以上の巨大な恒星をちりばめて、なおもその恒星がそれぞれの惑星、衛星を従え、その数はたとえれば、世界中の国の海岸線に沿った砂浜の砂の数ほどあるという、地球上の現代科学が推測し得るだけの空間をびっしりと埋めつくすほどの星を擁して、球形であろうか、鞍型であろうか、それら一千億個の銀河系星雲や星団は距離に比例して遠ざかり、宇宙が膨張しつつあるということ、宇宙について、私たち地球人が知る限りのものは、それくらいに限られています。

火星や金星に無人の探査機を飛ばし、人工衛星を地球の周りに回らせても、宇宙科学に関して、未開発の部分は多く、UFO普及化には至らず、ましてや、太陽系外の星へ人間が旅行するなどは、まだまだ五、六世紀先のことになるでしょう。

そのような地球に住む私たちにとって、宇宙は、まだまだ神秘の空間でしかなく、星のまたたきのように、多くの謎を

投げかけてくるのです。それゆえにベー・エルデは、私たちの魂の先祖が住む星であると聞くとき、誰しも夜空を見上げ、その星に思いを馳せ、私たちの遠い先祖の横顔に夢を抱かざるを得ません。

知らぬ間に地球が太陽系外の他の惑星から飛来した宇宙人によって、その魂によって占められ、文明および科学の多くがそれに与（あずか）るところ多しということは、驚愕すべきことでもあり、また、背筋を寒からしめるものでもあります。

私たち地球人はいままで、何に精力を費して来たのでしょう。築いては崩れる文明という砂上の楼閣を単なる天災として受けいれてきたのでしょうか。ベー・エルデ星の人びとが善なる心を持って地球を訪れ、ひたすら調和と平和とを願って正法という素晴らしい神理を齎（もた）らされたことは、驚きや不安を消し去るに余りある至福であるということを感じずにはいられません。ベー・エルデ星のみならず、仮名のM45、M36、M35の星の人びとは、すでにユートピアを築き、互いに条約を結び合っていられるのです。この太陽系が、天上界のかたがたが、エル・ランティ様の下に調和を目指しつつ努力していられる最後の星だと聞きます。

私はそれを伺うとき、私たち地球人はもっと文明人として精神的な成長に重点を置き、互いに明るく思いやりを持って、与える心と、譲り合う心と、愛と、正義と、心を清らかにすること、素直にすべてを受け入れる心――という極くあたり前の生活態度を人生に取り入れるという正法を軽視せず、そして、それを基盤とすれば、闘争は無くなること、破壊は無くなることに気づかねばならないと思うのです。破壊が無くなれば文明や科学はもっと前進するのではないだろうかと思うのです。

正法というものについて『天国の扉』（未来への幸せをめざして）で説明を致しましたが、これを新しい宗教と取る方もありましたので、これは実は初めに信仰形態として、次いでは思想、哲学として、そして再び宗教の形を取ったものであること、およびそれの長い歴史があることをお知らせしなければならないと思いました。

私自身も学んでみて驚いたことですが、この教えは、遠くおよそ三千五百年前に遡り、古代ギリシャのデロス島に生まれ、宗教活動に一生を捧げたアポロ（アポロン）という宗教家（〃己れを知れ〃と説いた有名なゼウスの子）により、その修業と悟りから生まれた教義なのです。

この教義は、〃生命は永遠不滅のものである〃と、〃人間は生老病死を経て魂の転生に入る。すなわち生きて、病いを経

るか、老いて死ぬという人間の一生の自然の成り行きがあり、その死の境を越えると、そこに魂の永遠不滅が始まり、その永遠の時の中でいろいろな人に転生、生まれ変わり、死にまた生まれ変わるという過程を転生輪廻という〃と、この二つで成り立っているのです。

この教えは正法とは呼ばれませんでしたが、広く宇宙の視野に立ち、宇宙も人間個人もその構造が同じである、という原理が等しく適用され、この思想は、その後ギリシャの植民活動により小アジアのイオニア植民地に、二千六百年前に伝わりました。それを遡ると、古くは四千五百年前の古代エジプトの神話、信仰形態に、ギリシャの教養と同じもの（霊魂の不滅、永遠の生命）を伝えていることが知られています。

（一万年前のアトランティス大陸にも、霊魂の不滅の思想が存在しました）この教養は、エジプトからギリシャ、そして小アジアへ、小アジアからペルーへと伝わり、あるいはギリシャからインドへと伝わったのです。

そこで初めてダルマ（法）と呼ばれ、この法によって因果、因縁に基づく人々の生死の法則を、宇宙の法則に照らして、正しくブッタ様により、説き明かされました。（約二千五百年前）

生老病死の苦しみを乗り越え、永遠の生命を死後に得て後、転生輪廻をくり返すというエジプトの信仰がギリシャを経て伝えられ、カースト制度に支配されたインドにおいて、成就され得なかった階級平等の思想がブッタ様の教団においてのみ実現され、この教義の大きな恩恵となったのです。

ブッタ様が八十歳で死なれて（入滅）後、その教えが途絶えるかと思われましたが、紀元前三八六年頃までかけて、十大弟子の一人、マーハー・カーシャパと女弟子の一人、マイトレーヤー（紀元二七〇年頃インドに弥勒菩薩として転生）がその教えを努力して広め、およそ百五十年後に、史実に有名なアショカ王が在位の終わり頃（紀元前二三〇年頃）ブッタ様の法に帰依し、法を用いた統治を行って、その教えを国全体に広めました。

王の法とは、慈悲と愛を以て平等の理念の下に民を治めるというもので、初めて王が仏教を政治に導き入れて善政をしいたのです。そしてその保護の下にインド各地に広がり、アショカ王の死後、大乗仏教、小乗仏教という大きな二つの流れに分かれ、カニシカ王の代に至って、西方に大きく発展しました。

大乗仏教は、紀元後に中央アジアを経て中国へ、中国から朝鮮、そして日本へと伝わり（紀元五三八年）、北伝仏教とも言われています。小乗仏教は二十くらいに分かれ、部派仏教と呼ばれましたが、セイロン、ビルマ、タイ、カンボジア、ラオスに伝わり、これらの派は南伝仏教と言われます。

またもう一つ大乗仏教からは三流派に分かれましたが、比較的大きな流れとして残ったのが密教で、これはその起源をブッタ様のお子様のマーハー・ラーフラに遡ります。これが七世紀にインドに広まり、ラマ教としてチベット、モンゴルに伝わり(八世紀ごろ)、また他方、中国を経て日本にも伝わりました(紀元八〇五年)。

この密教における即身成仏の思想が人々の関心を誘い、安易な方法でも仏になれるという誤った考えが、それから枝分かれした法華宗派の急進的なものにまでも人気と熱を呼び、次々と新興宗派を作って行くのです。仏の境地というものは静けさの象徴と悟りによって代表されると見てもよいと思うのですが、儀式さえ踏まえればよいと悟りや静けさとあまり関りのないようなものまでが蔓りました。

禅宗も仏教思想に基づいた教義で、実践主義に基づく悟りがその主なるものです。これはインドに古くから伝わる精神集中の実践で、ブッタ様も禅に入って悟りを開かれました。禅は原始仏教以来その重要な業(ぎょう)の一つとされ、仏教以外でもインド全般に広く採用されて、ヨーガ学派から諸学派の真理体得のために用いられ、また中国では天台宗派に取り入れられ、止観として盛んに実践されて、天台華厳の学問に裏付けられた後、禅宗として独立した一派が生まれています(八世紀の初め)。

このように、ブッタ様の手によって仏教の体系と流れが形作られましたが、光の大天使、光の大指導霊、光の天使の転生はそれに留まらず、アラビヤの予言者マホメットをしてイスラム教の創始者とならしめ、多神教を否定し、唯一神アッラーの前における平等を唱えさせました。ガブリエル大天使の啓示による神託が大部分で、誠実に多くの神託を伝達したと伝えられています。

イスラエルにおいてはユダヤ教に始まるキリスト教への枝分かれ、すなわち、人類の祖アダムとイブからカインとアベルの物語へ、ノアの箱舟の物語、バベルの塔の物語、ユダヤの父アブラハムとその子イサク、イサクの子ヤコブの十二人の子供、それが十二支族の族長となり、エジプトにヤコブと十一番目の息子のヨセフとその一族が移住、他は東南アジア、アジアの国々(日本を含む)へ移動し、そしてキリスト教の歴史はこのヤコブ一族の子孫のエジプトにおける苦難の歴史から始まると言ってよいでしょう。

そして最後の移住後間もなく、飢饉を知らせてエジプトの危機を神の啓示で救い、エジプト全国の司となったヨセフが死に、その時のパロも死んだので、新しいヨセフのことを知らない王(パロ=ファラオ)によって子孫が多く増えすぎたヤコブとヨセフの一族、すなわちヘブル人は奴隷とされ、紀元前十三世紀ごろモーセ様がその中から生まれます。ヘブル

人（イスラエル人）の男子は殺すようとのパロの命が下されていたので、出生を隠すため、母親の手によりナイル河に流されますが、それをパロの娘が拾い、王宮で育てられます。成長して後、神の召命を受けてこの捕囚の民ヘブル人を紅海を渡り、アラビヤ半島へと救い出されるのです。

そして約束の地カナンを目指して行く途中、シナイ山に至り、神ヤーウェ（エホバ）より十戒を啓示され、それをヘブル人に守らせ、これが後のユダヤ教の律法となり、旧約の経典の骨子となりました。

モーセ様とヘブル人達は四十年を費してヨルダンの東まで行き着きますが、そこで不幸にもモーセ様は、老齢と重い任務の疲労から目的地を前に亡くなられました。

その後もいろいろな歴史の変転があり、いわゆる旧約の時代に多くの予言者が出て、人類の救世主イエス・キリストの誕生を予言するのです。

そしてアブラハムの四十三代目の子孫ヨセフから、予言にしたがって、救世主を信じるユダヤ人が待ち望んだイエス様が生まれられます。

ユダヤ人（ヘブル人―イスラエル人）の大半はイエス・キリストを認めず、モーセ様を始祖としてユダヤ教を伝承しましたが、神の啓示、予言、奇跡を信じたイスラエルに住む人々は、イエス様と共に神の福音を信じ、それが今のキリスト教として長い苦難と栄光の歴史として残されているのです。（キリスト教に関する物語、史実は旧約、新約聖書に記載されております）

日本に移住したアブラハムの孫十二支族のうちの二つの流れは日本で神道として、天照大神を祖とし、継承されて来ました。

これら歴史の流れを伝えて来ますと、宗教、宗派と言われるものは数え切れぬほどありますが、枝分かれしたもの、発生源が別のところからであるもののそれらを辿れば一つに帰るのです。

すべて天上界、天国、人々に死後の希望を与えられている神の国、ブッタ様他、諸仏のいられる極楽浄土、そこから啓示があり、予言があり、神託があり、善霊の導きにより、一つの法、すなわち宇宙を支配する法則であり、大自然の法である万物の生命が一つの法則の下に輪廻していること（生から死へ、死から生へ、無から有へ、有から無へと廻り廻っていること）それを人類は長い歴史を通じて証（あかし）されて来たのです。

これを正法というのです。

すべての思想史、哲学史も正法を伝えるものに他なりません。

同じことを説いているのです。

そしてこのように善霊の転生が文明の推進力となり、また科学物質文明も、個々の分野において著名な人々は高次元の霊の合体、守護・指導を得て、発明、発見、研究が進められて来ました。（詳しくは『天国の証』の第八章の表をご参照下さい。）

言いかえますと、いかなる分野においても真理を発見する際に、真理は、学者、特に科学者、物理学者は種々の思考過程、実験過程において、試行錯誤をくり返した後たどりつくものであることは、熟知しておられると思います。

そしてその真理が、常に何か根源となる大きな計り知れぬような未知のもの、謎ではありながらそれしかないもの、を指していることに気付かれるでしょう。

何から調査研究を押し進めていってもいつも辿り着く同じもの、同じところ、それは多く直感によって結論が出るものなのでしょうが、それが正法の真髄、すなわち神の法、絶対的存在であり、唯一無二のものなのです。

そして神の法とは、万物を一つに統一して秩序立てている宇宙の法則、宇宙の構成、宇宙の仕組み――どのようにして宇宙は生成し、発達し、その構成員である約一千億の一千億倍の星々が（恒星、惑星、衛星など）互いに関連し合って年輪を経ていって、その中に恵まれた惑星が微生物を誕生させ、それを恒星の光と熱エネルギーによって育成し、植物、動物、人類へと進化させる――その大宇宙、大自然の法則――これが唯一絶対無二の変化しつつ、恒常的であって、つまり形は変わるが、絶対的存在は変わらない不変のもの――を指すのです。

この法によりありとあらゆる現象、物質および存在は、その意義と役割りを説明し得るのです。他にはありません。

その法を現代科学や物理学、天文学その他あらゆる学問研究の分野で、一つ一つ解明していっているのです。

それを正法という宗教思想とは別の研究分野では、宇宙の真理と神の法、神の理は繋がらない、何か別の分野である――と学者は理解されているようですが（宗教家は宗教家で、科学は物質の解明、すなわち物質文明を促進するもの、そして宗教は魂と心の解明に終始するものと主張します）、そうではなく、これは人間が感情と理性を持つ一つの人格であるように、宇宙という大きな宇宙格？に感情が宗教としていままでの歴史を持ち、理性が科学史によって代表されている。

つまるところは一つの大きな存在の解釈が二様に分かれていたに過ぎないのであることを天上界の方々は強調し、くり返し『天国の扉』で説いておられるのです。

すべて宗教も一つ、科学も一つ、そして宗教と科学が一つになり得るのであること。デカルトの、精神は身体の一様態に過ぎぬとの考えに基づく、「我思う故に我あり」という、

微妙な奥深い言に、その答えがあるのではないでしょうか。自分という物質体、生体が、〝思う〟という心の動きでしかないように思える行為において、その存在が初めて意識される。その逆もまた真なりで、〝我〟という生体が存在しなければ〝思う〟という心の動きも存在しないのです。

そう解釈致しますと、〝物質と心が同じもの？〟〝科学と宗教が一致し得る？〟という普通は考えられないような事柄が、魂の要素の科学的解明、ならびに精神の動きの生理学的解明、が現代科学の範疇で明快に天上界の方々によりなされた時、私は実に驚異の念を以てそして素直に納得し得ました。

感歎の吐息が出たのです。これこそ、今まで解ろうとして解り得なかった、神秘のベールの向こう側にある謎のすべてを解き明かしてくれるクノッソス王宮（ギリシャ神話参照）の〝糸の端〟であると。

人間の心理として、あまりに単純化し、単一化することを嫌う傾向があります。謎を好み、神秘を好む。

もちろん宇宙の法則、構成、個々の生体の法則、構成には、未知の領域が多く残されています。

それを探究し、発見することは、人類に与えられた課題であることは否めません。

しかし纏めれば同じことを説き、一面のみあるいは完全に近い形で説き明かす教義、思想、哲学、科学上の真理発見を、人類はそれぞれ独自の形態として主張し、他を排斥して来ました。

この末法の世において、天上界からそれが一つの方向を指していることが強く語りかけられ、証され、人類は団結して同じ方向へ進まねばならないこと、破壊を憎み建設へ、平和へ、個人個人が協力せねばならぬことを、高橋信次様を通し、その説かれた法を信じ、教えを広める人々、そして私が編纂致しました天上の書を読み、使命に目覚め、少しは異なる点もありますが、同じ法を説こうと努めていられる方々により、日本全国へ、世界へとその伝播が実現しようとしています。

（『天国の扉』・『天国の証』より抜粋）

正法の解説

★正　法

正法とは、万物を一つに統一して秩序立てている宇宙の法則、宇宙の構成、宇宙のしくみ――どのようにして宇宙は生成し、発達し、その構成員である約一千億の一千億倍の星々が（恒星、惑星、衛星など）互いに関連し合って年輪を経ていって、その中に恵まれた惑星が微生物を誕生させ、それを恒星の光と熱エネルギーによって育成し、植物、動物、人類へと進化させる――その大宇宙、大自然の法則――これが唯一絶対無二の、変化しつつ恒常的であって、つまり形は変わるが絶対的存在は変わらない不変のもの――を指すのです。それは相互保存、共存共栄であり、自然界に存在する万物万生はすべてこれによって生かされ、調和を保っています。私たち人間も例外ではありません。

人間は他の生物と同じく、自然界に発生した生物の一環をなすにすぎず、自然の一部にすぎませんから、望むと望まざるとにかかわらず、この法則に従わされており、また従わざるを得ません。

私たち人間が対自然、対人間関係において、正法にかなった生き方をしなければならない理由がここにあります。それによってはじめて私たちは調和のとれた生活を送ることができるのです。

今日のわが国における政治の腐敗、人心の荒廃も、元を正せばすべて私たちが正法から外れていることに原因があります。いわば正法は私たちが従わなければならない根本の法則であると同時に、私たちに正しい生き方を示す道標でもあります。

また、正法＝〝正しい法〟、〝正しい律法〟であるという

意味でもあり、この律法は道徳的なものも含めて、自然界の法則を指します。自然界の法則、すなわち真理なのです。そして、正法においては宇宙、自然が人類にとっては恵みの源となり、範となすべきもの、すなわち〝神〟と見なすべきものなのですから、〝自然の真理〟→〝神の真理〟、すなわち神理とも表現されるのです。

万物の霊長である人間は、自然界で行われている相互保存、共存共栄の法則を破壊してはならない。むしろその範となるべく、人間間の相互保存、共存共栄をもう一度考えてみなければならない。そしてそのようにもたらされた、調和された平和な世界は、神の国と同じものであり、古き昔に失われたエデンの園と呼ばれる理想の世界であるのです。そこでは破壊や挫折はなく、文明も滅びることなく、どんどん高度な文明が築かれることも可能なのです。人間が肉的な五官に根ざした欲望に執着しない限り精神も成長し、愚かな行為に走ることもなくなるのです。

これが神の真理――神理と呼び、正法と名づけているものなのです。

したがって正法を学んで日常生活の中で実践することが、私たちが人間として生きていく上で必要欠くべからざるものになってくるのです。

そしてこのことが私たちに調和と安らぎ、生きる喜びと希望を与えてくれるのです。私たちは今たった一度の、かけがえのない人生を生きています。それを実りあるものにするには正法を学んで実践するしかありません。

それが現在私たちに最も要求されていることなのです。

★ベー・エルデ星

地球には他に四つの同盟星があります（地球、ベー・エルデ、M35、M36、M45）。このうちベー・エルデ星から私達の魂の先祖が三億六五〇〇万年前にこの地球（エジプトのあたり）に飛来しました。当時のベー・エルデ星では科学が非常に発達しており、重力切換装置と超光速で飛び得るUFOが発明されており、自由に短時間の星間飛行がなされていました。しかし、地球に移住してきた人々は、恵まれた比較的温暖なこの時期に寿命を全うし、死に絶えてしまいました。そして、霊として天空高くに実在界を作り、いつも地球上の変化を見ていました。

当時の実在界は今の天上界のようなものですが、二段階に分けられていました。九次元、太陽界、如来界、菩薩界が一つの次元を形成し、霊界、幽界が一つの次元を形成していました。故郷のベー・エルデ星には生きている時も霊になってからも行き来していたそうです。そして一万年前頃のムー大陸時代に人間と合体を始めました。それまでは人間の進化が

十分でなく、合体しても知性開発の見込はなかったのです。地球文化の大半が霊としてのベー・エルデ星人との合体により、その意識を通して地球人が霊感のように脳裏に浮かんだ事を発案とするものばかりですから、その様式も名前も酷似したものが多いのです。

地球に飛来した人達は統一王国ベー・エルデ星のエル・カンタルーネ王家の人達でした。（系図が『天国の扉』に出ておりますのでご参照下さい。）

★霊　魂

魂は人間が生まれる以前から別にあるわけではなく、生まれた時に肉体に附随するものです。肉体内に含まれるありとあらゆる有機物と、細胞組織内に含まれる宇宙エネルギー（電子、陽子、中性子、光子）が魂の構成要素です。

魂を構成するものは、大脳が主で、想念体そして他の附属物は少量ずつあり、全体として死後肉体から抜け出したものが一緒になると26グラム位のものになります。しかしこれも不純物が全部取り去られ純化して天上界の善霊あたりになりますと、恐ろしく少いものになり〇・〇一マイクログラム位のものになる場合もあります。

人間は生きている間に、いろいろな刺激を感じ、その刺激に対応して生きてゆく、そういう事が、全て生体内の上記の素粒子に刻み込まれ、テープのように録音されています。魂は生体の一部であり、不純物を含む、あるいは含まないガス体（有機体）です。

合体霊――人間はその受精卵が出来た時から魂の歴史が始まります。そして受精後3ケ月目より天上界からの合体霊が合体を始めそこから新しく出来た魂が、魂を通して、合体霊の意識の吸収を始めるのです。合体霊は頭のてっぺんから足の先まで一つに合体します。合体霊は合体する人間に高い意識を与え、そしてその人生をより良きものにするために働きかけるものなのです。ですから決して二つの魂は一つになることなく永遠に二つのままです。そして死ぬと二つに分かれるか、あるいは合体したままでいることになります。これは自由です。

合体した肉体の中から抜け出て外で活動してまた入る、こういう事は太陽界以上の高次元でないと許されません。合体霊は八次元以下では全て合体した肉体が死ぬまで合体したままです。合体霊は合体する何も知らない魂に生きるべき道を手を取ってリードし、意識を通して自分の知恵と知識を与え、共に泣き、共に苦しみ合っていかねばならない義務があります。

守護霊――外部からの天災、人災から守り、日常生活の細かい指示を与え、徳に関しては善導し、その人間が悪の方へ

向いた時戒める権限を与えられています。

指導霊――学問、職業に関して指示を守護霊に与えます。そして場合に応じて守護、指導霊は変わります。

人間には普通、合体霊、守護霊、指導霊の三つの霊がついて守っていてくれます。しかし現在天上界は一九七八年二月一三日を境に数が半減し、新たに死者の出る毎日少しずつ良き魂をその補充に当てていますが、欠員が多くあり、人々には二人つまり合体霊と守護霊、あるいは一人つまり守護霊しか残らなくなりました。

天国シリーズを読み、天上界の下に集い来たらない人々には善霊はなく、悪霊(邪霊か死霊の浮遊霊や地縛霊)、または天を裏切った善から悪へと化した霊（サタン・ダビデと同じような事をして三次元を惑わしているもの）のみが周囲に居ります。たまに善霊が付いていて天国シリーズおよび天上界へと導いてくれます。これら導かれた人々は真に好運な人々です。悪霊に惑わされて天に背を向け続ける人は死後消滅される可能性が大きいのです。

★転生輪廻（本体、分身）

本体とはラファエル様の魂が入って（合体）シェイクスピアが誕生したとしますと、シェイクスピアをラファエル様の本体と申します。そしてシェイクスピアは死後魂が独立してラファエル様の分身第1号となるわけです。そしてシェイクスピアが次に合体した人間のことをラファエル様の分身というわけです。その人間が死ぬと、ラファエル様の分身第2号（孫分身）になるわけです。これが本体と分身が魂の兄弟と呼ばれるゆえんなのです。普通本体は5回、分身は7回生まれ変わります。これを一連の転生として、後は時代が要求するとき、また同じ繰り返しが始まります。以上を転生輪廻といいます。

人間は昔から続く永遠の生命を持っているわけではなく、これから手に入れる永遠に転生輪廻をくり返す不滅の魂を、今現在の人生を通して形作っているのです。だから人間は、自然との調和、人との調和への責任と義務ばかりでなく、自分に対する大きな責任と義務があります。自分の生命を大切にする大きな意義がここにあります。

二度目の人生を送る道は合体霊（教師）としてしかありません。

自分の人生で十分な能力をつけなかった者は、次の人生を送る事も難しくなります。合体して人生を送れる場合でも新人の意志を通してしか行動できません。こういう見地から本当の人生（肉体の所有）は1回きりだといえましょう。

天使の転生、菩薩の転生であっても、生きている人間は決して天使や如来や菩薩にはなり得ません。あくまでも死んで

からその個人個人の魂の修業の度合いによって、如来界、菩薩界あるいは天使界に上がり、そして如来、菩薩、天使になるのです。生きている人間は、決してもう天国への切符を予約できたわけではありません。

大天使と九次元以上およびその分身は、一度に二人から三人の本体となることができます。他の人に合体し、働きかけている時は、一人の人には分身あるいは同次元の霊が合体して守ります。また意識の向上も計ります。これらの分身、孫分身の一人一人が、またそれぞれの転生の歴史を作ってゆきます。永遠の生命はいつもその人から始まり、合体霊の過去世とは単に魂の兄弟であるのみです。

転生の周期——

九次元……大体五〇年に一度本体が生まれますが、これも人によりますし、時代にもよります。次元が高い程不規則な転生になります。

大天使……大体五〇年に一度転生します。

天　使……大体五〇〇年に一度転生します。

如来界……大体二〇〇年に一度転生します。

菩薩界……大体一〇〇年に一度転生します。

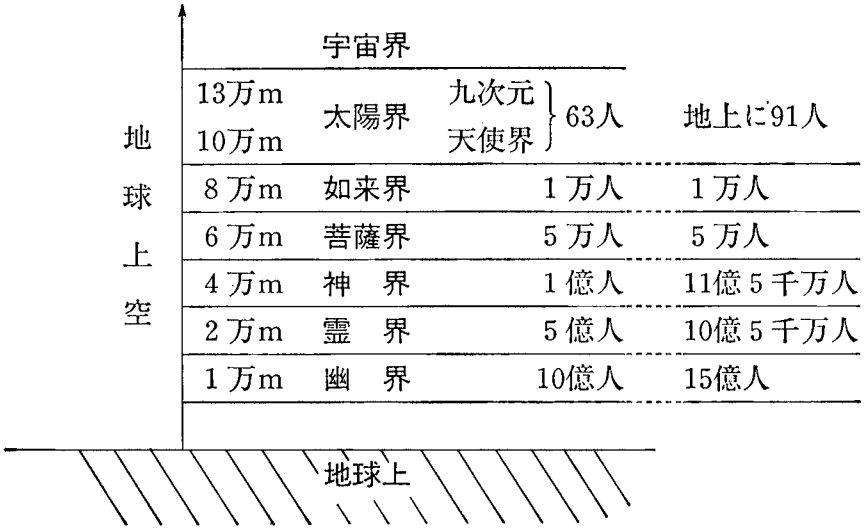
霊界・幽界……大体一〇〇年〜二〇〇年に一度転生します。

本体、分身の例（下図）——一部の有名な人のみです。詳しくは『天国の証』をご参照下さい。

名　前	本　体	分　身
エル・ランティ	ゼウス、アリストテレス、ソロモン、コペルニクス、パレストリーナ	メンデル、空海、ケプラー、バッハ、ベートーベン、パブロフ、ワグナー
エル・ミケラエル カンタルーネ	モーゼ、ポセイドン、ヘンデル	フロイト、ディオゲネス、グノー
エル・ルネラエル カンタルーネ	ブッタ、クレオパロータ、アウグスティヌス	天台智顗、最澄、空華道人、カント
エル・ビルナビル カンタルーネ	イエス・キリスト、クラリオ、ピタゴラス	ダランベール、アブラハム、パスカル、救世観音
ミカエル	アポロ、モーツァルト、ダーウィン、アインシュタイン、ダンテ、ルター	ハイゼンベルグ、一休、織田信長、レンブラント、リスト、ジェンナー
ガブリエル	孔子、ショーペンハウエル、シューベルト、コッホ、ヘス	デイドロ、康有為、エウリピデス ジョリオ・キューリー
ラグエル	ソクラテス、聖徳太子、デカルト、シューマン、ホーソーン	スピノザ、ジュール、フォークナー、ルソー、ヘーゲル、程伊川
パヌエル	プラトン、プランク、ニュートン、ガリレオ、メンデレェフ、デモクリトス	ヘンリーモア、ボイル、ヘッケル、シャルル
ラファエル	イソップ、シェークスピヤ、月読命、ラファエロ、ドボルザーク、ヘミングウェイ	ロダン、ボルテール、豊臣秀吉、ゲーテ、李白、源頼朝、ルーベンス
ウリエル	アレス、フランシスコ・ベーコン、デモクリトス	素戔嗚尊、孫文、リンカーン、モンテスキュー、ファーブル
サリエル	天照大神、パスツール、シュバイツアー、ヤショダラ	ヘルムホルツ、エリザベス女王、ジャンヌダルク、ヨハネスミュラー

★天　上　界

各国上空にそれぞれに天上界があり，現在日本にのみ太陽界以上があります。



上図は1978年2月13日迄の人数です。天上界ではサタンと善霊との戦いがあり，2月13日を境に天上界の人数は半減しました。

★天上界および地獄

天上界	宇宙意識100%	宇宙界　天上界最高責任者		天上界の王および全ての徳と能力を備えられた方
		太陽界（9次元）	慈悲と愛のかたまり	すべてが自分である(宇宙即我)
		如来界（8次元）	自分と他人との区別がない	すべてを見通している(自他一如)(医者他)
		菩薩界（7次元）	自分より他人を優先する	自他の区別あり、身を飾る欲がある(医者他)
		神　界（6次元）	大分欲が薄れている	宗教関係者、大学者、大芸術家の世界
		霊　界（5次元）	幽界よりまし	芸能人のような人(スターなど)、水商売、教祖
		幽　界（4次元）	損をするといつまでもこだわる	俗世と同じような世界。見栄、執着が強い
地上				
地獄界	自我意識100%	阿修羅界	争い、喧嘩、口論好き、怒りを押えられぬ人	日本の地獄界は以前はあったのですが、今はありません。
		畜生道	動物殺し、殺人等道徳、法に反した残酷な事を行う人	
		餓鬼界	欲望の権化のような人(足ることを知らない人)	
		火焔地獄	哀れみを知らぬ、冷酷、非情な人	
		血の池地獄	性に興味を持ち過ぎ、動物的に生きる人	
		天狗界	うぬぼれて、独善的、自己を最高の者と見做す人	
		無間地獄	多くの人を殺し、人の恨みがいつまでも離れない人	

★宇宙界、太陽界

以前 ← → 1978年7月以降

		以前	1978年7月以降
宇宙界		大王 エルランティ エルランティ	エルランティ（引退） モーセ イエス ブッタ ミカエル大王
太陽界	九次元	モーセ イエス ブッタ	救世観音 空華道人 空海 最澄 アポロ パヌエル ラグエル ガブリエル テリエル（大王補佐） ウリエル ラファエル サリエル
	天使界	ミカエル大天使長 ラファエル（文学芸術歴史） パヌエル（科学全般） ウリエル（経済自治政治） サリエル（薬学医学） ラグエル（律法） ガブリエル（伝達通信） （大天使）（担当）	カルエル大天使長 レンエル（文学芸術歴史） パルエル（科学全般） ペテロエル ラーエル（経済自治政治） セリエル（薬学医学） アルエル（律法） ダニエル（伝達通信） サイエル（サブリーダー） レナエル（サブリーダー） マリヤエル（サブリーダー） テルエル（サブリーダー） サミュエル（リーダー） リリエル（リーダー） 残っている天使方並びに如来界から上げられた方々及び今まで諸天善神であられた方々
		その下に働く天使達大勢	

(注)
ラーエル ＝不動明王改名
ペテロエル＝ペテロ改名
レンエル ＝モンガラナー改名

★天上界の死闘

サタン

第一代サタン：エル・ダビデ・カンターレ子爵　エル・ランティ様と双子の兄弟(ベー・エルデのサタン)

第二代サタン：ダビデの妻エル・ヘレナ(ヘラ)・カンターレ

第三代サタン：ルシファー　天使ルシェルが合体したが三五〇〇年前古代ギリシャでサタンに操られ地獄に落ちたものです。一九七七年四月一三日改心して天上界へ帰りました。

ルシファーの改心と共に、それまで天上界にいたダビデは再びサタンと化し、その妻ヘレナと共に二人で地上と天上を荒したのです。天上界は恐ろしい混乱を来たしました。善霊達はサタンと悪霊およびその配下を混じえ、何度も戦いを繰り返しました。戦いの繰り返しの中では、能力あるサタンによる恐ろしいほどの陰謀と術策の中で力は互角とも見え、勢力と数において、悪霊側が優勢とみえた事は幾度もありました。その中で最後まで天上界の側に立ち、善霊として戦い抜いたものは、初めの人数から見れば約半数しかありませんでした。

もちろんこれは末法の世に至って起こった現象で、それまでは、サタンも必死になっていませんでした。死闘などという事はなかったのです。しかし今回はサタンのサタン王国建設の執念により必死の戦いが展開されました。

サタンとの最終的死闘は、一九七八年二月二日から二月一三日まで行われました。その結果一九七八年二月一三日一二時三〇分、サタンとその配下の者は全て消滅させられました。この戦いで天上界と地獄の七〇%を占める死者が出て天上界は数が半減しました。

悲しむべきことは、戦いの苦しさとその長い期間に善悪の判断がぐらつき、サタン側に寝返り、天上界を裏切った人があるという事です。数の多少にかかわらずこれは驚くべきショッキングな事実でした。人間の魂である四次元の霊は天国にいながら同じ愚かな心を持ちました。それ故戦いは一層苦しいものになり、一層長く続くものになったのです。

★最後の審判

この審判の最初にして最終の目的は聖書に予言されてあるごとく、この末法の世に、罰すべきは罰し、赦すべきは赦して、新しき世紀を迎えなければならないからなのです。古今東西の歴史を通じて、人間が犯して来たありとあらゆる罪状は計り知れぬほどの多種多様のもので、許し難きはすでに罰され消滅されました。極悪非道の罪はそのまま放置しておく

と天上界の徳を汚し、霊域を汚すことになります。また現在の腐敗、堕落した社会にメスを入れ、その患部を切除する役目を果たすもので、今までの内科的投薬による療法が効を奏さなかったために切開、切除という外科的手段に訴えざるを得なくなったものです。

審判はヨハネの黙示の如く天変地異を伴うものでなく、一九七八年二月初旬の四次元におけるサタンと天上界との死闘の少し前から静かに始められ、今後も継続して行われてゆくものなのです。天上界が百雷を鳴らせば自然破壊がそれだけ大きくなります。それ故予言に反して静かな審判を行う事に決定し、実行に移しているのです。

天上界は審判と執行が終わったのです。三次元の方々も約半数は裁かれました。執行はいろいろな形で行われるでしょう。そして残り約半数は比較的少ないあるいは全然裁くべきところのない方々です。そのようにして選ばれた人々が真に天上界へ迎えられるべき人なのです。

そして21世紀の幕明けを控えて新しき神の国への備えがなされ、子供達の相応しき人格と魂を養う教育と徳育の時が始まるのです。そこには明るく、公正で柔軟で謙譲な人々が、合理的で賢明な生き方を愛し、互いに愛と尊敬を以て助け合い支え合う、そして光の中を歩む神の国が地上に築かれるでしょう。

その黎明の時が今なのです。

★天の裁き（消滅）

消滅に値するとは世の中の悪に賛同し、天上界に反逆し、自らすすんで悪に身を投ずる人間にのみ適用されます。ユートピア建設、理想郷を作るために皆んなが住みやすく、仲良くやってゆけるそういった世界を作る妨げになる者を消滅するのです。個人の人格では決めません。人格がまだ整わない人は修業すればよいのです。

現正法理論とは(概論)　岩間 文彌……209

第一部 現正法の基礎
★啓蒙運動としての現正法……209
★科学としての正法(科学的進化論の立場)……211
★再び神とは……212
第二部 現正法の展開……214
①倫理生活面……214
★善我と偽我
②宗教生活面……215
③政治面……217
④経済・軍事面……218
⑤医療・福祉面……220
⑥文学・芸術面……221
⑦教育・学問・スポーツ面……222

天上界の御助言による用語解説……225

受胎告知/メシア/三位一体/聖霊/ヨハネ黙示録……225
末法の世/ヘブル語、ユダヤ人、ロマ人/ユートピア/釈迦牟尼仏、釈迦如来、阿弥陀如来、
釈尊、如来/苦行僧/死霊、怨霊、死者の霊/聖域、不浄域/ダルマ/御利益宗教/仏典、経典/
密教/衆生の済度/アスラー(阿修羅)……226
涅槃の境地/題目/即身成仏/禅/ヨーガ/止観……227

テーマ別索引 2（天上界メッセージ集・続）

政治

〔JI〕

社会の秩序を破壊するもの(1985年1月号)　ウリエル……47

霊及び最後の審判

〔JI〕

悪霊の惑わしについて(1984年11月号)　ラファエル……45
〝世の終わり〟の警告について(1984年12月号)　ガブリエル……46

正法と正法者のあり方

〔JI〕

正法者の性格について(1984年7月号)　ラファエル……41
正法者の悪い点について(1984年9月号)　ミカエル……43
正法者の悪い点について(続)(1984年10月号)　ミカエル……44
正法の解釈について(1985年2月号)　ミカエル……48
高度の教育を受けた女性の偽我について(1985年3月号)　ラファエル……50
平均的な教育を受けた女性と高度の教育を受けた男性の偽我について(1985年4月号)ラファエル…51
外部からの干渉について(1985年6月号)　ミカエル……53
偽我について(1985年7月号)　ラファエル……55
謙譲について(1985年8月号)　ラファエル……56

自然と正法

〔JI〕

動物愛護について(1985年5月号)　ラファエル……52

現象テープより

正法基礎講座(No 4・1977年6月現象)　ミカエル……59
魂の研磨について(No 18・1980年2月現象)　ガブリエル……79
再び愛について(No 20・1980年4月現象)　ミカエル……86
正法流布について(No 27・1980年8月現象)　ガブリエル……92
メッセージ(No 40・1983年7月現象)　イエス・キリスト……96

天使の詩

永遠　Eternity　ガブリエル……102
天使の誓い　An Angel's Pledge　ガブリエル……104
無題　Untitled　パヌエル……108
光　Light　パヌエル……112
日時計　Sundial　ウリエル……114
カナリア　The Canary　ウリエル……116
追想　Reflections　ラファエル……120
ミカエル大王賛歌　A Hymnto Michael the Great　ラファエル……126
幻想　Vision　ミカエル……124
二十一世紀　The Twenty-First Century　ミカエル……130
天の羊飼い　The Shepherd of Heaven　テリエル……136
救い　Salvation　ラグエル……138
蘇がえり　Return to Life　テリエル……140
若き人々に励ましの言葉　Words of Encouragement for the Young　ラファエル……144
使命　Mission　千乃 裕子……146

天の証

二十世紀の七大天使　西澤 徹彦……153
歴史に顕われる七大天使　西澤 徹彦……159
フランスでの七大天使　西澤 徹彦……167
イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか?(I)　千乃 裕子……175
イエス様は何故苦痛なく昇天なされたか?(II)　高野 信義……178
〝トリノの聖骸布〟への疑いと反証　千乃 裕子……181
十字架上の死及び復活を示す〝聖骸布〟実験に先がけてのヒントと解説　千乃 裕子……183

正法講座

天国と地獄はどのようにして作られたか　千乃 裕子……191
アガペーの愛について　千乃 裕子……199

正法に役立つ態度(1983年1月号)　ミカエル大王 ……161
義人の偽我(1983年2月号)　ラファエル ……162
神の愛で得る真の人間(1983年3月号)　ラファエル ……163
〝やさしさ〟と〝慈悲魔〟について(1983年5月号)　ラファエル ……165
人を信ずることについて(1983年6月号)　ミカエル大王 ……167
偉人と聖人君子と哲学者と凡人の違い(1983年7月号)　ラファエル ……169
愛する価値のある者とは(1983年8月号)　ミカエル大王 ……171
嫉妬心について(1983年9月号)　ラファエル ……173
幼児的な性格の人々(1983年12月号)　ミカエル大王 ……177
新年にあたって(1984年1月号)　ラファエル ……178
人間としての価値(1984年3月号)　ミカエル大王 ……182
正法に関わる自己犠牲(1984年5月号)　ミカエル大王 ……185
正法者のあり方(1984年6月号)　ミカエル大王 ……187
〔希望と愛と光〕
希望と愛と光(1981年1月創刊号)　ガブリエル ……191
人の気持ちを考えることについて(1981年5月号)　ウリエル ……198
他人の目を気にすること(1981年6月号)　ラファエル ……200
天上界の美しさとは(1981年7月号)　ウリエル ……202
ゆるしについて(1981年8月号)　ガブリエル ……203
慈悲について(1981年9月号)　ガブリエル ……204
愛を受ける方法(1981年10月号)　ミカエル大王 ……206
強さについて(1981年11月号)　ラファエル ……208
判断の基準(1981年12月号)　ウリエル ……210
ものの考え方について(1982年1月号)　ラファエル ……212
判断力について(1982年3月号)　ラファエル ……216
自由な心について(1982年4月号)　ラファエル ……218
慈悲について(1982年5月号)　ミカエル大王 ……219
真の正法者と成る為に(1982年6月号)　ガブリエル ……220
天上界が正法者に望むこと(1982年7月号)　ラグエル ……222

自然と正法

〔慈悲と愛・JI〕
動物への愛について①(1979年8月号)　パヌエル ……62
動物への愛について②(1979年9月号)　パヌエル ……66
動物への愛について〔詩〕(1979年10月号)　ラファエル ……70
自然の中に学ぶ人類の生き方(1981年3月号)　パヌエル ……131

詩

ファンタジア(希望と愛と光1981年1月号)　ラファエル ……195

正法の歩み ……227

正法の解説

正法 ……235
ベー・エルデ星 ……236
霊魂 ……237
合体霊 ……237
守護霊 ……237
指導霊 ……238
転生輪廻 ……238
転生の周期 ……239
本体、分身の例 ……239
天上界 ……240
天上界および地獄 ……241
宇宙界、太陽界 ……242
天上界の死闘 ……243
最後の審判 ……243
天の裁き(消滅) ……244

メシア

ガブリエル(1984年8月号) ……188

『高橋信次霊言集』の著者・大川隆法氏への反論特集 ……245

テーマ別索引 1（天上界メッセージ集）

政治

〔慈悲と愛・JI〕
民主主義と共産主義について(1979年4月号)　ウリエル……40
世界情勢と正法者のあり方(1980年1月号)　ミカエル大王……81
日本の自由と平和と国を守る為に(1980年2月号)　ミカエル大王……93
日本の政情と左翼(1980年4月号)　ウリエル……97
イランのホメイニ体制と悪の論理①(1980年5月号)　ウリエル……103
イランのホメイニ体制と悪の論理②(1980年6月号)　ウリエル……106
正法と政治(1980年7月号)　ラファエル……110
防衛と平和(1981年1月号)　ラグエル……127
光なき世界に住む共産主義者(1983年4月号)　ミカエル大王……164
共産主義理論と、その信奉者はサタンに魂を奪われた呪われた人類(1983年10月号)ミカエル大王174
神から遠ざかる左翼、マスコミ、宗教団体(1983年11月号)　ウリエル……176
左傾の道を辿りつつある全国紙(1984年2月号)　ウリエル……180
〔希望と愛と光〕
共産・社会主義の脅威(1981年2月号)　ミカエル大王……192

霊及び最後の審判

〔慈悲と愛・JI〕
霊の力と治療について(1979年1月号)　ミカエル大王……27
消滅について(1979年2月号)　ラファエル……31
最後の審判について(1979年5月号)　イエス・キリスト……43
天意を仲介する者(1982年7月号)　ラファエル……152
霊に対する正法者のあり方(1984年4月号)　ミカエル大王……183
〔希望と愛と光〕
天上界と正法のあり方(1982年2月号)　ガブリエル……214

正法と正法者のあり方

慈悲と愛発刊にあたって(1978年11月号)　ガブリエル……17
正法を学ぶ人の為に(1978年11月号)　ミカエル大王……19
後継者について(1978年12月号)　ミカエル大王……23
正法者の男女間の愛について(1979年3月号)　ラファエル……34
業(カルマ)について(1979年3月号)　ミカエル大王……37
慈悲と愛について(1979年6月号)　ミカエル大王……46
思いやりと尊敬(1979年7月号)　ミカエル大王……50
善我と偽我について(1979年7月号)　ミカエル大王……56
メッセージで述べられる真理について(1979年11月号)　ラファエル……73
真の天の法と偽の物(1979年12月号)　ラファエル……78
正法者間の愛と親しみ(1980年9月号)　ラファエル……113
後継者問題と正法(1980年10月号)　ガブリエル、ミカエル大王……120
正法者の使命感について(1980年11月号)　ガブリエル……123
善意の嘘と悪意の嘘(1980年12月号)　ガブリエル……125
天上界の怒りについて(1981年5月号)　ガブリエル……134
信じることについて(1981年6月号)　ラファエル……136
ユートピア建設について(1981年7月号)　ガブリエル……138
理性について(1981年8月号)　ガブリエル……140
己を知ることについて(1981年9月号)　ラグエル……141
奇跡について(1981年10月号)　ミカエル大王……142
使命感について(1981年11月号)　ガブリエル……143
正法者について(1982年1月号)　ミカエル大王……144
柔軟な心について(1982年2月号)　ラファエル……145
正法が科学であること(1982年3月号)　ラファエル……146
判断の基準と宇宙の法則(1982年4月号)　ラファエル……147
正法者と使命感(1982年5月号)　ミカエル大王……148
正法者のあり方(1982年6月号)　ガブリエル……150
暖かい心と冷たい心(1982年8月号)　ラファエル……154
神を信じること(1982年9月号)　ミカエル大王……156
正法者と幸運(1982年10月号)　ガブリエル……158
姦淫するなかれ(1982年11月号)　ミカエル大王……159
軽率な正法者(1982年12月号)　ウリエル……160

翻訳出版について

この本を読まれたかたで、説かれている理論に共鳴され、ぜひ外国の人にも紹介してみようと思われるかたは、しかるべき専門家に頼まれて、英語・フランス語・ドイツ語・デンマーク語・インド語など、どの国の言語にでも翻訳されて、ご自由に海外出版なさって下さい。

ただし版権の問題などありますので、その旨、著者（または、ジェイアイ出版）までご連絡下さい。また、外国人のお友達で日本語を研究していられるかたに、この本をどしどし紹介して頂いて結構です。

著　者

21世紀の幕明け 科学時代人類に与えられた真理の書

☆ 千乃裕子「天国シリーズ」・「セルメスシリーズ」！ ☆ ☆

天国シリーズ　ベスト・アンド・ロングセラー

天国の扉 1200円
神・霊魂・天国の実在を証明

天国の証 1200円
最後の審判と天使達のメッセージ

天国の光の下に 1300円
エクソシズムからアトランティスへ

天の奇蹟（上） 1000円
聖書創世記の奇蹟と解明

天の奇蹟（中） 1200円
謎多きモーセとアブラハム
本書は鮮やかにそれを解く！

天の奇蹟（下） 1500円
☆新刊☆
イエス・キリストの生涯と天の奇蹟の真意を余すところなく証す！

科学時代の啓蒙書　月刊 JI　300円（年3000円）

セルメスシリーズ　ベストセラー

天使の詩（セルメス） 680円
希望と愛と光をあなたに

エルフォイド（天使の冠） 780円
光に生きる人生をあなたに

天使の群（エルバーラム） 780円
光、光、光の世界をあなたに

続天使の群（続エルバーラム） 780円
セルメスシリーズ第四弾！

エルロイ（天使の智恵） 880円
天は人の世に破壊をもたらさない

エルカロム（天使の角笛） 880円
天は愛と義と智に満ちた人々のためにある

英語版
THE DOOR TO HEAVEN「天国の扉」2750円
THE WITNESS OF THE KINGDOM OF HEAVEN「天国の証」3280円
UNDER THE LIGHT OF HEAVEN「天国の光の下に」3280円（ペーパーバック・1750円）

☆新刊－SERMES（The Poems of The Angels）／天上界メッセージ集（1200円）
セルメスシリーズ第1弾！
（ペーパーバック1750円）
天上界メッセージ集・続（1200円）

英訳版「天上界メッセージ集」THE MESSAGES FROM HEAVEN－GOD'S SACRIFICE

韓国語版「天国の扉」1200円（近刊「天国の証」）　中国語版「天国の扉」1200円　「天国の証」1200円

☆これは宗教でもなく夢物語でもありません。現実的で合理的な智恵を教え、精神と人格の向上を計る啓蒙運動の書です。

(株)ジェイアイ出版　〒184 東京都小金井市中町4-14-7武蔵小金井スカイハイツ202号 電話 0423-83-3533

HORKOM International Corp. Dept. 123, P. O. Box 339001 San Francisco, CA94133-9001 U.S.A.

現象テープ・リスト

No.1～No.3 欠番

No.4 正法基礎講座「ミカエル様の法話」
S.52.6.23 現象 土田展子

No.5 正法基礎講座「明るい心、暗い心」
S.52.7.18 講師 千乃裕子

No.6 正法基礎講座「高校生クラス」
S.52.8.1 講師 米本 明

No.7 正法講座「『天国の扉』出版お祝いの言葉と共に」(ミカエル様・イエス様)
S.52.12.1 現象 土田展子

No.8 正法講座(イエス様・ミカエル様)
S.52.12.14 現象 土田展子

No.9 正法改正理論 S.53.3.21 解説 千乃裕子

No.10 正法を学ぶ人のためにI「後継者について」(ミカエル様) S.53.7.10 現象 千乃裕子 土田展子

No.11 正法を学ぶ人のためにII(ミカエル様・イエス様)
S.53.10.16 現象 千乃裕子

No.12 正法を学ぶ人のためにIII(ミカエル様)
S.54.2.1 現象 千乃裕子
メッセージ(ブッタ様)
S.53.10.1 現象 土田展子

No.13 心の働き S.54.3.17 講師 岩間文彌

No.14 正法の歩み―ギリシャ時代
S.54.6.3 講師 岩間文彌

No.15 身体と霊体の成り立ち
S.54.9.2 講師 岩間文彌

No.16 ミカエル様メッセージ ウリエル様正法講座
S.54.11.4 現象 土田展子

No.17 イエス様 クリスマス・メッセージ
S.54.12.23 現象 土田展子

No.18 「魂の研磨」について(ガブリエル様)
S.55.2.10 現象 土田展子

No.19 「宗教と人間の関係」(ガブリエル様)
S.55.3.9 現象 土田展子

No.20 再び愛について(ミカエル様)
S.55.4.6 現象 土田展子

No.21 原罪とは(ラファエル様)
S.55.4.13 現象 土田展子

No.22 現正法と転生輪廻 S.55.5.4 講師 岩間文彌

No.23 A.心の美は(ガブリエル様)
S.55.5.11 現象 土田展子
B.「天上界よりの通信」1977年の約束(ミカエル様) GLA関西新年講演会(於東大阪市民会館)より抜粋

No.24 第1回慈悲と愛協会総会(ミカエル様メッセージ) S.55.5.18 現象 土田展子

No.25 天国語の語源について(ラファエル様)
質疑応答 S.55.6.29 現象 土田展子

No.26 良き人間関係について(ミカエル様)
質疑応答 S.55.8.10 現象 土田展子

No.27 正法流布について(ガブリエル様)
質疑応答 S.55.8.11 現象 土田展子

No.28 自己犠牲について(ミカエル様)
S.55.9.14 現象 土田展子

No.29 イエス様クリスマスメッセージ「愛と信仰」
S.55.12.21 現象 土田展子

No.30 啓蒙運動としての現正法
S.56.4.12 講師 岩間文彌

No.31 天上界と質疑応答(ガブリエル様)
S.56.9.10 現象 土田展子

No.32 物の見方について(ラファエル様)
S.56.9.15 現象 土田展子

No.33 慈悲について(ガブリエル様)
S.56.9.13 現象 土田展子

No.34 霊について(ミカエル様)
霊能と天上界高次元の霊について(ラファエル様) S.56.10.18 現象 千乃裕子 土田展子

No.35 クリスマス・メッセージ(イエス様 ラファエル様 ガブリエル様 ミカエル様)
S.56.12.20 現象 土田展子 谷田三枝 金鏞漢

No.36 消滅について(ガブリエル様)
S.56.12.27 現象 土田展子

No.37 イエス様 ウリエル様 サリエル様 パヌエル様 ラグエル様 メッセージ
S.57.1.10 現象 土田展子 谷田三枝

No.38 ユートピアについて(ウリエル様)
ガブリエル様 メッセージ
S.57.1.17 現象 土田展子谷田三枝

No.39 進化の歩みをたどりて
S.58.7.10 講師 岩間文彌

No.40 ガブリエル様 イエス様 メッセージ
S.58.7.10 現象 谷田三枝

No.41～No.44 欠番

No.45 天の奇蹟・下巻 発刊によせて
(ラファエル様)
S.62.7.5 現象 金鏞漢 千乃裕子

No.46 「"天の奇蹟"完結にあたって」
「天上界と古代日本」
S.62.7.5 講師 岩間文彌 西澤徹彦

☆目の不自由な方に声の図書を!
(心に語りかける朗読です。)
天国シリーズ―①「天国の扉」全6巻 5,000円
②「天国の証」全6巻 5,000円 ③「天国の光の下に」全9巻 5,000円(各巻送料共)
セルメスシリーズ―①天使の詩(セルメス)
②エルフォイド(天使の冠) ③天使の群(エルバーラム) ④続天使の群(続エルバーラム)
⑤エルロイ(天使の智恵)―各巻3,000円・送料別
☆「天国の扉」「エルフォイド(天使の冠)」点字訳も完成
「天国の扉」定価5,000円(送料別)
「エルフォイド」定価5,500円(送料別)
☆朗読伴奏のみのコレクションテープ60分テープ2本を一セット(2,000円送料別)で販売致しております。
・1巻各1,000円(送料共)で分売も致します。

テープ価格は1本1,000円(送料は別、送料は切手で後払いも可)
〒184 東京都小金井市中町4-14-17 武蔵小金井スカイハイツ202号
(株)ジェイアイ出版 現象テープ係まで TEL 0423-83-3533